

# 戦後ベストセラー小説と流行語

―『斜陽』『三等重役』『太陽の季節』『美徳のよろめき』―

金城学院大学大学院 文学研究科 博士課程後期課程

国文学専攻  
服部このみ

## 目次

### 序 1

## 第一部 上流階級への郷愁と「斜陽族」の誕生―太宰治『斜陽』（一九四七年）―

### 第一章 『斜陽』と上流階級に関する報道との関連性 9

- 一. 『斜陽』ベストセラー化の通説 10
- 二. 上流階級に関する報道の検証 13
- 三. 華族の没落に関する報道の分析 16
- 四. 『読売新聞』と「斜陽族」 18

### 第二章 階級設定の曖昧さについて 25

- 一. 「貴族」という表現について 25
- 二. 「宮様」という言葉について 29
- 三. 皇族に関する報道と比較して 32

### 第三章 『斜陽』受容における『桜の園』の影響 36

- 一. 日本における『桜の園』の定着 36
- 二. 戦後の『桜の園』の解釈 39
- 三. 『斜陽』受容への影響 42

## 第二部 戦後の価値観をどう受け容れるか―源氏鶏太『三等重役』（一九五二年）―

### 第一章 『三等重役』のイメージの変遷 45

- 一. 「三等重役」という言葉の印象 46
- 二. 「艶福物語」における「三等重役」 48
- 三. 「艶福物語」から『三等重役』へ 50
- 四. 『三等重役』における「三等重役」 51

### 第二章 流行語「恐妻」について 54

- 一. 「恐妻」という言葉の起源 54
- 二. 戦前の「恐妻」の用例と特徴 56
- 三. 流行時の「恐妻」の用例と特徴 58

### 第三章 『三等重役』における戦後派重役像 63

- 一. 戦後の価値観をどのように肯定するか 63
- 二. 『三等重役』における誘惑場面の分析 65
- 三. 『三等重役』連載前後の性をめぐる状況 72

### 第四章 恐妻と貞操―『三等重役』に描かれた戦後性― 75

- 一. アメリカ的夫婦観と「恐妻」 75
- 二. 『三等重役』に描かれる「恐妻」像 78
- 三. 男の「貞操」と純潔教育 81

第三部 階級差をどのように描くか — 石原慎太郎『太陽の季節』（一九五六年）

三島由紀夫『美徳のよろめき』（一九五七年） —

第一章 動機なき行為者をいかに描くか — 『太陽の季節』論 — 85

- 一. 先行研究の分析 86
- 二. 語り手および竜哉の描かれ方の考察 87
- 三. 「灰色の教室」との比較 92

第二章 上流階級意識のよろめき — 『美徳のよろめき』論 — 96

- 一. 「よろめき」について 96
- 二. 「美徳」について 99
- 三. 節子の階級と語り手の分析 103

第三章 『太陽の季節』ブームと「よろめき」ブーム 109

- 一. 階級差か世代差か — 『太陽の季節』ブームについて — 110
- 二. 優雅さの消失と大衆化 — 「よろめき」ブームについて — 114

## 序

本研究では、第二次世界大戦後、焦土となった日本がGHQによる占領期を経て再び国際社会に受け入れられ、「もはや戦後ではない」と言われるまでのおよそ十年の間にベストセラーとなり、「〇〇族」という流行語を生み出した小説について考察した。

具体的には、一九四七年から一九五七年にかけてベストセラーとなった太宰治『斜陽』、源氏鶏太『三等重役』、石原慎太郎『太陽の季節』、三島由紀夫『美徳のよるめき』の四作品について、作品が流行し、作品をもとにした流行語が生み出されるまでの過程および社会状況の調査と、作品の分析を並行して行った。

この二つの作業を関連させることによって、自分たちの「上」にあたる階級や人物像への憧れが、一九五〇年代当時の読者が小説を欲望・消費する理由の一つとして存在し、それが小説をもとにした「〇〇族」という言葉の流行とベストセラーという形で表れていることを示した。

これらの小説に係る流行語には、「斜陽族」「三等重役」「恐妻族」「太陽族」「よるめき族」があり、いずれも集団を表す流行語である。

当時の読者やメディアはその作品に描かれる主題に新しさを感じたために、当時存在していなかった、もしくは存在はしていたもののそれに当てはまる言葉を持っていなかった集団を表す際に作品の名前を冠したのだと言えよう。

小説のベストセラー化が語られる際には、当時の世相・風俗が反映されているという理由が挙げられることが多いが、特定の集団を現す言葉を生み出した文学には、当時の時代状況と密接に関わった内容が描かれていることはもちろん、むしろ時代に先行した内容が描かれている可能性があると考えられる。年代単位で戦後のベストセラーを論じたものには、塩澤実信『昭和ベストセラー世相史』(第三文明社、一九八八年)や井上ひさし『完本ベストセラーの戦後史』(文藝春秋社、二〇一四年)、朝日新聞社編『ベストセラー物語』(全三巻、朝日新聞社、一九六七年)などが挙げられる。同時代を知る論者によって通史的に語られる形式のものがほとんどであり、当時の状況を知るにあたってたいへん貴重なものである。

そして現在、戦後のベストセラー作品を分析する際には、同時代を知る手段の一つとして右のような資料を参考にすることが多い。しかし、ここで注意しておきたいのは、彼らが同時代を「振り返って」語っていることである。彼らが語るベストセラー化の理由は、当時のベストセラー化の過程を正確に写しとっているのではなく、当時巻き起こったブームによって形成された強固なイメージに上書きされたものであるという可能性は否定できない。

実際、ベストセラーとなった作品がなぜ多くの読者を得たのか、ということが語られる際にはどうしても、作者をとりまくスキャンダルや、作品に扇情的な主題・表現が用いられていたことが要因であるという結論に帰結してしまうことが多い。

確かに作品がベストセラーとなる過程で、出版社やメディアが読者にわかりやすい主題を設定して読者の欲望を煽り、それによって売り上げを伸ばしていくこともあると思うが、多くの読者が飛びついた理由は、果たしてそれだけなのだろうか。

このような疑問を抱いたことから、本研究においてはブームや流行語確立以降のイメージにとらわれずに時代との関係性を踏まえた読まれ方を提示することを目的として、当時の新聞・雑誌記事や同時代評などを参照しながらブーム形成を段階的に追っていくことで、読者が置かれていた社会状況を具体的に検証していくことを心がけた。

第一部では、流行語「斜陽族」を生み出した太宰治『斜陽』（一九四七年）を扱った。

これまで『斜陽』が読まれるようになった理由は、当時騒がれていた華族階級の没落を、写し取った「ためだ」と考えられていたが、『斜陽』は時代に先行して華族の没落を描いていた。だからこそ、没落する上流階級に「斜陽族」という名がつけられたのである。

当時の人々には滅び行く上流階級への郷愁が常に存在し、それによって『斜陽』や、没落華族の報道を求め、積極的に消費していったのではないかと考えられる。

第一章では、一九四五年から、一九五一年頃にかけての上流階級に関する報道を詳細に調査し、正確な実態を把握することを試みた。

太宰が『斜陽』で華族階級を扱ったのは、『斜陽』が連載されるまでの間に、華族の没落が世間で話題となっていたからだ、という意見が通説となっているが、実際の報道を調査した結果、太宰が『斜陽』を構想する時期から『斜陽』を連載するまでは、華族の没落はほとんど話題になっていないことがわかった。

むしろ、太宰が『斜陽』を連載するまでの時期に終始一貫して話題となっていたのは、皇族の臣籍降下（皇族が一国民と同じ身分になること）である。

『斜陽』は構想時の段階では、太宰の実家をモデルにした没落する旧家の悲劇として描かれる予定であり、地主階級という設定であった。しかし、実際に発表された『斜陽』は、華族階級が没落する話となっている。このことから、太宰は皇族の臣籍降下に影響を受け、『斜陽』の登場人物たちを華族階級へと変更したのだと思われる。

華族の没落に関する報道が目立つようになるのは、一九四八年六月以降である。太宰の入水自殺と時期が重なっていたことや、太宰の死に影響を受けて自殺したとみられる華族が実際に存在したことから、『斜陽』と結び付けて報道されるようになっていく。

また、没落する上流階級を意味する「斜陽族」という言葉が、『斜陽』の流行をきっかけに流行語となった。「斜陽族」がいつから使われていたかについては、太宰の生前から使われていたという説と、死後使われるようになったという説が混在しており、これまで曖昧であった。

しかし、今回の調査により、太宰の死後さかんに『斜陽』が没落華族の報道と結び付けられるとともに、一九四九年以降「読売新聞」を中心として「斜陽貴族」「斜陽族」という言葉が使用されている実態が判明した。

第二章では、第一章で確かめた階級の問題を踏まえて『斜陽』本文を分析し、主人公一家の階級が、皇族を想定して描かれた可能性が高いことを指摘した。

『斜陽』の登場人物の階級について、太宰自身は「皇族にほとんど近いぐらいの華族」であると述べている。

この発言について、先行研究では華族階級であることの証明に使われることがほとんどであったが、報道の実態と合わせて考えてみると、太宰にとつては、華族であることよりも、皇族に近いことの方が重要であったと考えられる。

本文における階級描写の分析を通して、主人公一家の爵位や姓が示されないことや、主人公であるかず子や他の人物が主人公一家を指す際、華族と断定せず、皇族と思わせるような曖昧な書き方をしていることから、皇族を想定して描かれた可能性が高いことを示した。

また、皇族に関する実際の報道と物語内の時間が照応しており、戦後の皇族の動向や生活ぶりが、母・直治の最期やかず子の発言に影響をもたらしていることを指摘した。

第三章では、『斜陽』がなぜ没落華族の悲劇として受容されてしまうのかを、チエーホフの戯曲『桜の園』との関係から考えた。

『桜の園』は日本において戦前から親しまれ、戦後にもブームを巻き起こしたとされる。『桜の園』には、上流階級の没落という悲劇的な面が描かれる一方で、新しい人生を歩んでいくことに喜びを覚える娘の姿も描かれている。

しかし、『斜陽』発表前後においては、『桜の園』は新しい人生を歩む姿よりも、悲劇的な面が強調された物語として受容されていることを示した。

また、当時『斜陽』を読んだ読者の感想を見ると、母の最期のみを読み、その後のかず子の展開を無視しているものが多い。

『斜陽』構想の際、太宰は「日本の『桜の園』を書くつもり」だと明言しており、本文中にも『桜の園』を連想させるような展開や言葉が確認できる。読者は『斜陽』を読む際に『桜の園』を連想し、そのことによって『斜陽』を上流階級の没落を描いた悲劇として受容してしまう面があったのではないかと考えられる。

第二部では流行語「三等重役」「恐妻(族)」を生み出した源氏鶏太『三等重役』(一九五二年)を扱った。

『三等重役』は、戦後の価値観を肯定的に描こうとした作品である。

この時代は、財力も権力も持った重役が愛妾を囲うことは当たり前の時代であった。その中で、『三等重役』の主人公である桑原社長は、女性たちに誘惑されながらも、決して肉體関係を結ばない重役として描かれ、それによって他社の重役や、部下たちに評価されるという展開になっている。

また、桑原社長は、妻に頭の上がない「恐妻家」として描かれ、当時の日本に「恐妻」ブームを巻き起こした。

配偶者以外とは性的交渉をしないことによって成り立つ一夫一婦制的な価値観や、家庭内において妻に頭の上がない様子は、当時憧れとされたアメリカの夫婦観、家庭観と重なっている。

このことから、『三等重役』は戦後の夫婦観や男女観を、日本人が受け入れやすいようにユーモアを交えて書き換え、一般に広めた作品であることを指摘した。

第一章では、『三等重役』という言葉について分析した。

『三等重役』とは戦後現れた新しい重役像を指す言葉であるが、『三等重役』の連載が決まった際、源氏が「三等重役」という言葉に肯定的なイメージを付け加えていることがわかった。

また、それによって『三等重役』は戦後の価値観をいかに受け入れるか、という物語となったと考えられる。

『三等重役』という言葉が初めて登場した『艶福物語』（一九五一年）は、プレ『三等重役』とも言えるような作品であるが、ここでは戦後派重役自ら、戦前の重役より下であることを強調するための蔑称として「三等重役」という言葉を用いている。

それに対して『三等重役』では蔑みの要素が薄められ、むしろ親しみやすさや肯定的なイメージで使用されていることを指摘した。

第二章では、『三等重役』をきっかけに流行した「恐妻（族）」について考察した。

「恐妻」は、『三等重役』が連載された時期に造られた言葉であるという説と、戦前から存在していたという説が混在していたため、具体的にいつから存在する言葉なのかを特定することにした。

調査の結果、「恐妻」という言葉は一九二四年の時点で使われている言葉であることが確認できた。戦後用いられるようになった「恐妻」はそれ以前のものとは比べ多くの夫婦にあてはまるものに変化したことに加え、「恐妻家」と「愛妻家」が表裏一体のものであるという考えが当時の人々の共感・関心を呼んで広く受け入れられたことにより、流行語化したと考えられる。

第三章では、『三等重役』本文を分析し、桑原社長が戦前派重役と対峙し、立派な社長として評価されていくための価値観が何であるかを考察した。

第一章で挙げた『艶福物語』は、公職追放中の上司の愛妾であった女性を愛妾として囲うことによって、重役としての能力や自信を高めていくが、追放解除後、上司の元へ戻りたいと告げられてしまうという話である。

『艶福物語』には、戦前派重役の模倣ではなく、新しい価値観で対抗しなければ、戦前派重役をこえることはできないという戦後派重役の姿が示されていると言える。

それに対して『三等重役』の桑原社長は四人の女性に誘惑されるものの肉体関係を結ばない貞操堅固なキャラクターとして描かれる。「浮気は男の甲斐性」という価値観が堂々と示される中、貞操を護り続けることで部下や戦前派重役に評価されるという展開になっていることを示した。

第四章では、今までの分析を踏まえた上で、桑原社長に与えられた「恐妻家」という設定の分析を通して『三等重役』に描かれた戦後の価値観がどのようなものかを明らかにした。

「恐妻家」とは、妻を愛しているために、一夫一婦制を守ろうとする夫であり、妻に頭の上がらない夫である。

この姿は、当時多くの人に読まれていたアメリカ漫画『ブロンディ』に描かれた夫婦の姿や、施策の成立にGHQが関与していたという「純潔教育」における「純潔」の定義——性的交渉は結婚当事者間におけるもののみを純潔と認める——と重なっている。

『三等重役』は当時の人々の憧れでもあったアメリカ的・民主的な夫婦生活をストレートに描くのではなく、ユーモアを交えつつ、戦前の日本にも存在



した「恐妻」という思想を緩衝材にすることによってリアリティを持たせ、日本人に受け入れやすとした作品であると言える。

第三部では、流行語「太陽族」を生みだした石原慎太郎『太陽の季節』（一九五六年）と、「よろめき（族）」を生みだした三島由紀夫『美德のよろめき』（一九五七年）を扱った。

両作の類似性を指摘する先行研究が複数確認できること、物語の構図・流行の過程が似通っていることから、第三部では二作品を扱うことにした。先行論ではいずれも扇情的な主題がブームの要因とされるが、これらは当時の読者より上の階級に属するだろう人物たちの行為や価値観を、語り手が特殊なものとして語っていく作品でもあると言える。

また、当時の読者たちが登場人物たちの財力やそれに伴う暮らしぶりに憧れと反発を抱いており、それが多くの読者を得る理由の一つであると考えられる一方で、ベストセラー化に伴い、出版社や雑誌メディアが世代差の問題や一般的な家庭でも起こりうる話として捉え、流通させている実態があることを指摘した。

第一章では、石原慎太郎『太陽の季節』の本文分析を行った。

『太陽の季節』は作家や当時の社会を巻き込む一大ブームとなり、さまざまな話題を呼んだ作品である。それ故に、先行研究の多くは外部状況の検証・整理にとどまり、作品そのものの分析が行われることは少なかった。

しかし、『太陽の季節』には、「太陽族」という新語を用いて表現しなければならないような、既存の言葉に当てはまらない青年像が作品内に描かれていると考えられる。

そこで、本文に描かれた青年像を、主人公である竜哉の性格と、語り手の特徴を分析することによって考察した。

竜哉は自身の感情や行動の意味付けを行わない、「考えない」人物として描かれている。そして、竜哉が考えない人物であるということは、竜哉の側に沿った心理描写が不可能になることを意味する。

それに対して語り手は、「どうだろうか」という形を多用することによって、不確定な事項であることを示しながら、竜哉の行動の分析や解説を執拗に重ねていく。

語り手の解説を除き、竜哉に関する叙述のみに目を向ければ、竜哉の行為や感覚は決してわかり得ないものではないが、語り手は竜哉が動機なく行った一連の行為に特殊さや残忍さを読み取り、強調していく。語り手が、竜哉の価値観を特異なものとして浮かび上がらせているのである。

また、処女作の「灰色の教室」と比較してみると、「灰色の教室」は主人公が、動機のない自殺を行う友人の解説をするという形をとっていたが、『太陽の季節』では主人公が動機なき行為者となっている。そのために、語り手が解説をしなければならないという構図になっていることを指摘した。

『太陽の季節』は、衝動的な感情によってのみ行動する動機なき行為者をいかに描くかという実験的な小説であると言える。

第二章では、三島由紀夫『美德のよろめき』を扱った。

『美德のよろめき』は倉越節子の婚姻外の恋愛を描いた小説であり、『美德のよろめき』という題は、「浮気をしてはいけない」という中流階級的な道徳を踏み外すことを意味しているというのが今日の通説である。

そして、その表現が時宜になつていたために「よろめき」という言葉が「妻の浮気」を意味するものとして流行・定着したとされている。

しかし、本文では「よろめき」は足もとがふらつくという本来の意味でしか用いられていない。また、「美德」という言葉についても、本文では基本的に節子の美德として語られることが多く、節子の階級設定によっては中流階級的な道徳とは言い切れない。

先行研究において節子の階級に関する記述は統一されていないが、本文を読めば節子の階級が旧上流階級として設定されており、そのことは語り手によって執拗に語られている。

節子は上流階級意識を無意識に保ちつづけている人物であるが故に、世間や語り手が語り得る価値観とは相いれない価値観を抱く人物として存在しており、そのような節子の上流階級的な価値観が、世間的な価値観へとよろめく物語が展開されていく。

『美德のよろめき』というタイトルは、中流階級的な道徳の踏み外しを意味するのではなく、節子の上流階級意識が不安定になることを指しているのではないかと考えられる。

第三章では、『太陽の季節』『美德のよろめき』が当時の人々に読まれた理由を再考した。

当時の読者の感想や、新聞・雑誌記事の分析を通して、読者と違う階級・立場の人間をいかに描くかを目的とした『太陽の季節』『美德のよろめき』という小説が、メディアが話題にする際に、読者と同じ立場の人間を描いた物語にすり替えられてしまっていることを指摘した。

『太陽の季節』の場合は、当時の若者世代にあたる読者がブルジョア階級の物語と捉える一方で、大人たちによって当時問題視されていたアプレゲールの問題に回収されてしまい、石原が描こうとしていた意識の問題にまで触れられることはなかった。

また、『美德のよろめき』の場合は当初、優雅さを強調して売り出され、読者もまた節子の贅沢なライフスタイルに憧れを抱きながら作品を読んでいたが、週刊誌において妻の不貞を理由とした離婚が問題となっていく中で、上流階級だからこそ可能な恋愛という解釈からすべての女性の問題へと切り替えられてしまったと考えられる。

また、本論を始めるにあたり、本研究で対象とした作品から発生した流行語である「斜陽族」「三等重役」「恐妻(族)」「太陽族」「よろめき(族)」について確認したい。それぞれの言葉の意味については全て『日本国語大辞典(第二版)』(小学館、二〇〇一年)からの引用である。

まず、「斜陽族」は太宰治『斜陽』から生まれた言葉で、「時勢の変化のために没落した、もと上流階級の人々。貴族や華族などで、しだいにおちぶれていく人たち」を意味し、ここから「〇〇族」という流行語が発生するようになったと言われている。発生・流行時期は資料によつて一九四七年から一九四九年頃とばらつきがあるが、一九四八年頃を流行時期とする説がいちばん多い。ただし、用例はいずれも一九五〇年以降のものが挙げられている。

杉森久英は『苦悩の旗手太宰治』の中で、太宰の生前である一九四七年十一月頃に「斜陽族」という言葉が流行していたと回想しているが、そうだとすれば太宰が「斜陽族」という概念を容認していたことになる。太宰が『斜陽』の階級設定にこだわりを持っていたことを考えると、「斜陽族」が生前に流行ったか死後に流行ったかを考えることは重要なことであると思われるため、今回の調査を通して流行時期の確定を試みた。調査の結果「斜陽族」という言葉が生まれ、浸透していくのは一九四九年以降であり、太宰の死後であることが判明した。

「三等重役」「恐妻（族）」は源氏鶏太『三等重役』がきっかけで流行した言葉である。

「三等重役」は「経営はまかされても資本の実権はない重役。また、小規模の会社のため、たいした実権を持っていない重役」を意味している。右の引用からも読み取れるように、辞書や流行語事典においては、ネガティブなイメージで語られることの多い言葉であるが、『三等重役』という作品および映画を鑑賞した時に抱くイメージには否定的な意味合いは薄く、調査をする必要があると考えた。

確かに、最初に使われていた段階では蔑称のような、否定的な意味合いで用いられる言葉であったが、『三等重役』の発表を経て「三等重役」という言葉が流行するにあたっては、作者や編集者が意識的に肯定的なイメージへと書き換えており、それが読者に広く受け入れられたという背景がある。

また、『二等重役』をきっかけとして「夫が妻をおそれること」を意味する「恐妻（族）」という言葉が流行するとともに「恐妻」を冠した歌や映画が出現した。この言葉については、流行時に出来た言葉であるという説と、それ以前から存在するという説が存在したため、今回調査をし、一九二四年に既に存在している言葉であることを示した。ただし、流行以前は頻繁に使用される言葉ではなく、流行時とは意味が少し異なることが明らかになった。

一九五六年には、石原慎太郎『太陽の季節』をきっかけに「太陽族」という言葉が生まれた。辞書的な意味は「既成の秩序にとらわれないで、奔放に行動する戦後派青年の典型の一つ」である。この言葉は、大宅壮一によれば一九五六年五月の段階で生まれていた（『太陽族』の健康診断『週刊東京』同年五月五日号）という。「太陽族」という言葉の流行および意味の変遷については、難波功士が『族の系譜学』（青弓社、二〇〇七年）において詳細な調査を行っている。

また、この頃は月刊誌に代わって週刊誌が主導的な位置に立っていく中で、新潮社が『週刊新潮』を創刊し、これまで新聞社のみが発行していた週刊誌に出版社が挑戦した年である。『週刊新潮』は成功を収め、後の週刊誌創刊ラッシュへと繋がっていくのであるが、これ以降、週刊誌によって「〇〇族」が強調・演出され、量産される傾向が見て取れる。

そして、「よろめき（族）」は三島由紀夫『美徳のよろめき』によって生まれた言葉である。「よろめき」は「妻が夫以外の男性にときめきを感じたり、誘惑されて浮気をしたりすること」を指す。ただし、作品内において同様の意味で「よろめく」という言葉は使われていない。

物語の展開から「よろめき」＝妻の浮気と解釈することも可能であるが、これもまた、作品の意向に沿っているというよりは、当時夫婦間の浮気が問題視され、週刊誌で多く取りざたされるようになる中で、浮気を表現する言葉として適当なものとされ、流行した言葉であると言える。

このように、いずれも作品を読んだ時の印象と、流行語として語られる言葉のイメージに違和を感じたことから研究の対象としている。流行語となる段

階で意味が変化するのはよくあることかもしれないが、本研究で対象とする流行語の場合は、週刊誌創刊ラッシュ以前であることからメディアによる演出が顕著になる前の段階のものが多く、言葉が発生した過程を丁寧を追うことで、なぜ多くの読者がその作品を読むのか、当時の読者の意識や欲望が明らかになるのではないかと考えた。

# 第一部 滅びゆく上流階級への郷愁と「斜陽族」の誕生―太宰治『斜陽』（一九四七年）―

## 第一章 上流階級に関する報道との関連性

はじめに

太宰治『斜陽』は、『新潮』一九四七年七月号から十月号にかけて連載され、同年十二月に単行本が刊行された。

『斜陽』は、敗戦後没落していった日本の旧華族階級の家庭を描いた物語として、戦後初のベストセラー小説となり、没落する上流階級を表す「斜陽族」という流行語を生み出した。

『斜陽』が当時熱狂的に受容された理由や、ベストセラーとなった理由として、太宰の情死事件の衝撃や、当時の状況との関わりが指摘されている。

とくに、当時の読者が置かれていた社会状況を検証する必要性を説く先行研究は多いが、これまでの研究では「同時代に身を置いた読者にとつてのみ了解可能」なものであるとして概括的に述べられるのみで、具体的な検証はほとんど行われてこなかった。同時代を知る読者が少なくなりつつある今、当時の『斜陽』読者を取り巻く状況を少しでも整理しておきたい。

また、『斜陽』の主人公二家は華族という設定であるが、先行研究ではその設定を当時の世相を反映した結果であるとする見方が多く、なぜ華族という設定にしたのかということについての積極的な議論はなされていない。

しかし、太宰が『斜陽』の主人公一家を華族という設定に変更した時期や、『斜陽』発表前後の太宰の言動に注目してみると、太宰は意識的に『斜陽』の登場人物を華族階級に設定したように思われる。

『斜陽』における華族という設定が、当時の世相を反映した結果であることは間違いない。そうした要素があることを認めた上で、第一章では、『斜陽』構想時から連載時において華族の没落よりも皇族に関する報道が頻繁であり、当時の世相＝華族の没落とは言い難いことを示したい。

具体的には、当時の上流階級（本論では主に皇族・華族二を指すものとして用いる）に関する報道の点検を通して、太宰が『斜陽』を構想した時期から『斜陽』の連載が終了するまでの間、新聞上で華族没落の報道がほとんど見られないこと、太宰が『斜陽』の主人公一家を華族階級へと変更した時期が皇族の臣籍降下決定と重なることを明らかにする。また、太宰の死後さかんに『斜陽』が没落華族の報道と結び付けられ、後に「斜陽族」という流行語が生まれたことで、『斜陽』が没落華族の物語であるという認識が強固なものとなったと考えられる。

一では、先行研究における『斜陽』の華族階級への言及をまとめ、当時の状況整理の必要性を指摘する。『斜陽』が書かれた時期に華族の没落が騒がれており、それによつて太宰が『斜陽』の登場人物を華族階級に設定したという見方が通説になっていることを確認する。

二では、主に新聞三紙『朝日新聞』『毎日新聞』『読売新聞』を対象にした上流階級に関する報道の調査から、『斜陽』の構想時から連載時にかけては華族ではなく皇族に関する報道が頻繁に取りざたされていることを明らかにする。

三および四では、太宰の情死前後の報道から、華族の没落に関する報道が増加するのは太宰の死後であり、とくに『読売新聞』が一九四九年以降『斜陽』と没落華族の報道を積極的に結び付けていることを指摘する。

## 一・『斜陽』ベストセラー化の通説

ここでは、先行研究で語られる『斜陽』ベストセラー化の理由と、『斜陽』の主人公一家の階級設定の変遷を確認していく。  
はじめに『斜陽』ベストセラー化の理由を、先行研究をもとに確認する。

太宰治『斜陽』は、一九四八年度にその年のベストセラーズで二番目となる十二万部を売り上げている。<sup>三</sup>その内訳をみると、一九四七年十二月十五日に刊行された単行本が三万部、一九四八年七月十一日に刊行された新版が九万部<sup>四</sup>であり、新版の売り上げが、一九四八年度の総部数の四分の三を占めている。新版刊行の約一ヶ月前である一九四八年六月十三日には、当時の社会に多大な影響を与えた太宰治の情死事件が起きており、それがベストセラーとしての『斜陽』を語るうえで外せないものとなっている。

たとえば、尾崎秀樹は「旧華族が転落の道をたどった時代、滅亡の美をうたった流行作家太宰治は、みずからの情死行をもって、その芸術を追いもめた」<sup>五</sup>と述べており、太宰の死を『斜陽』の主題の一つである「滅亡の美」と結び付けている。

また、塩澤実信も「ショッキングな情死事件が先行しすぎたきらいのある『斜陽』だが、この作品は太宰治を代表する傑作として、今日に読みつがれている」<sup>六</sup>と、情死事件が『斜陽』の売行きに拍車をかけたことを指摘している。

根岸泰子は、『斜陽』が多くの読者を獲得した理由を「現行の数多くの解説書からひろいあげてつづつて」いるが、『斜陽』の主題が「太宰自身の生き方」と「オーバーラップ」することや、主人公たちが「まさに当時の世相のなかで人々が身近に見ることのできた没落華族であった」ことを挙げたうえで、「だ」がなにもまして、単行本となった『斜陽』が版を重ねるさなかの太宰の入水自殺という衝撃的な話題性が、『斜陽』を作家太宰自身が体現した〈滅び〉というコンテキストに引きつけさせ、さらに多くの読者を獲得していった」<sup>七</sup>と述べており、情死事件による話題性をより重視している。

これらの先行研究では、太宰の情死事件こそが『斜陽』のベストセラー化に影響したと考えられている。確かに、それは大きな要因であると思われるが、太宰の情死事件が「単行本となった『斜陽』が版を重ねるさなか」に発生したという文章にも注目したい。ここから、情死事件以前の一九四七年十二月から翌年六月の間においても『斜陽』の売行きが好調だったことがうかがえる。

さらに、『新潮』一九四七年十月号の編集後記には「七月号に第一回が発表されるや、各方面から激賞讃辞が殺到した」「完結を機会に、太宰氏に読者諸君と共に厚くお礼を述べたい」とあることから、連載の時点においても読者から熱狂的に受容されていたことがわかる。

瀬戸内晴美と前田愛は、『斜陽』を読んだ当時を振り返り、「戦後のあの時代ということが背景にあつてわれわれがこの雰囲気ショックを受けたということがあるんじゃないでしょうか。日本はひっくり返り、貴族なんていう昔の栄光の座にあつた人たちがすっかり落ちぶれてというふうな時代でしょ。『斜陽族』という言葉もここから出ましたね。時代の背景があつて強く印象づけられたんじゃないかという気がいたします」（瀬戸内）、「あのころのわれわれ読者が置かれていた状況というものをもう一遍たぐり寄せてみると、『斜陽』という作品があれだけたくさん読者に影響を与えたということがわかりにくいんじゃないか」（前田）とそれぞれ述べており、『斜陽』が多くの読者に影響を与えた要因が、戦後の状況にあるとしている。

三好行雄も同様に、「没落の主題が現れてくるとそこに戦後の状況というのがワツとおつかぶさつてきて、その没落していく人間の美しさとか、やさしさとか没落の美学が作品の実態以上に読者を感動させるといふからくりがどうもあつたような気がするんですね」<sup>九</sup>と、『斜陽』における「没落の主題」と「戦後の状況」の関わりを指摘する。

また、奥野健男は、読者は戦争を起因とする「単なる食糧不足と節生活からくるみじめさ」を、『斜陽』を通して「没落貴族というかつこうの階級」に「自己を同一化」することで「身につまされる感傷性」にすりかえていたのではないかと分析する。<sup>+</sup>

これらの評価から、読者も華族階級の没落を主題とした物語として『斜陽』を受容していたと考えられるとともに、華族階級の没落という題材こそが、当時の読者に影響を与える要素を含んでいたことが読み取れる。

詳細は二で述べるが、敗戦後、制度改革や財産税法の執行など、上流階級を取り巻く環境は一変し、一九四七年五月三日には、日本国憲法の施行とともに華族令が廃止された。

そのような状況の中『斜陽』が連載されたこともあり、作品内において華族階級に関する詳細な書き込みが少なくにもかかわらず、多くの評者・読者が、華族階級の没落という題材に着目してしまったのではないかと考えられる。

これまでの研究の多くでは、太宰が『斜陽』で華族階級を扱ったのは当時の世相を反映した結果であるという意見が自明のものとされ、太宰が『斜陽』の主人公一家を華族に設定した理由はほとんど考えられてこなかった。

そこで次に、『斜陽』の主人公一家の階級設定の変遷について確認する。

『斜陽』の構想は津島美知子の回想によれば、一九四五年の七月末に「金木町の長兄の家に転がりこ」んでから「帰京するまでの一年四カ月の間」に、「生家の没落の様相」を目にしたことで芽生えたものと考えられている。<sup>+</sup>帰京した太宰は一九四六年十一月二十日に新潮社の面々に構想を伝え、『新潮』への連載が決定する。その段階では『斜陽』は、「自分の実家の津島家をモデルにし」た「没落する旧家の悲劇」<sup>+</sup>として描かれる予定であり、主人公は地主階級の設定であつたと考えられる。

しかし、実際に書かれた『斜陽』では主人公は華族階級となっている。このことから、太宰が『斜陽』の登場人物を華族階級へと変更したのは一九四六年十一月二十日から連載第一回分の脱稿日である翌年三月六日までの間であると言える。

この変更の理由として、『斜陽』の主人公・かず子のモデルである太田静子の日記を入手したことが挙げられる場合がある。確かに、静子の日記を参照したことで内容が変更された可能性は高いが、静子は「藩政時代から代々御典医を務めて来た由緒ある」<sup>十三</sup>家柄ではあったものの華族階級ではなく、階級設定を変更した直接的な理由としては説明できない。

また、太宰は『人民しんぶん』のインタビュで『斜陽』を「ほとんど皇族に近いぐらいの華族が没落してゆく」<sup>十四</sup>話であると説明しているが、『斜陽』の主人公一家を単なる「華族」ではなく「皇族に近い」立場であると強調する様子は、この階級設定がきわめて意識的に行われたことを示すものであろう。それにもかかわらずこれまでの研究では、階級設定変更の具体的な理由の検討は行われていない。この期間に上流階級をめぐるどのような出来事が起こっていたのか、改めて検討する意味はあるだろう。

そのことを踏まえた上で、これまでの研究で『斜陽』の登場人物が華族に設定された理由がどのように考えられているかをみていきたい。

奥野は太宰が『斜陽』において「没落貴族という題材」を用いた理由を、「社会のセンチメンタルな風潮にとびついた」<sup>十五</sup>ためであると指摘する。野平健一も『斜陽』は、その素材だけで、時流に投じたと思われるフシがたぐさんある」<sup>十六</sup>と述べている。ここからは、彼らが当時華族の没落そのものや、華族の没落に共感するという「社会の」「風潮」や「時流」が存在し、『斜陽』の設定はそれに触発されたためだと考えていることが読み取れる。

その後、根岸は「貴族の没落というテーマが異様なほどの共感を得た時代という点に即して」「特権階級」を取り巻く環境を整理し、特権剥奪や財政上の打撃、華族制度の廃止といった価値の変転が『斜陽』の構想から連載までの時期」と「重なっている」ことを指摘する。また、「作品に描かれた主人公たちが、まさに当時の世相のなかで人々が身近に見ることのできた没落華族であった」と、「没落華族」が華族階級と直接的な交流がなかっただろう読者たちにとつても「身近」な存在であったと述べている。<sup>十七</sup>

これらの論に共通するのは、『斜陽』が連載されるまでに、華族の没落が世間で話題となっていたという主張である。

右に挙げたような諸々の事態が生じ、それがきっかけで華族階級が没落していったことは間違いないが、はたしてそれらの事実は当時一般の人々にどのような程度伝えられていたのだろうか。

根岸が「接する」ではなく「見る」と表現していることから読み取れるように、上流階級と交流する機会のなかった一般の人々は、新聞や雑誌などのメディアを通して、上流階級のイメージを得ていたものと思われる。そして太宰もまた彼らと同じように、上流階級に関する情報やイメージは、新聞や雑誌を通して得ていただろう。

このことから、新聞や雑誌の報道を元に当時の状況を確認していく必要があると言える。また、当時の人々にとつてそのような情報は、原因と結果が瞬時にわかる形ではなく、日々の報道を通して少しずつたがっていくものとして伝わっていたと思われる。太宰や当時の人々をとりまく環境に少しでも近づくためには、彼らと同じ地平に立ち、段階的に当時の報道を追っていくことが必要だろう。



## 二・上流階級に関する報道の検証

二では主に新聞三紙における上流階級に関する報道を比較し、華族の没落に関する報道がいつ頃頻繁に取りざたされていたかを検証する。

調査の対象としたのは『朝日新聞』『毎日新聞』『読売新聞』の三紙である。この三紙を選んだ理由は、一九四五年の東京版の発行部数がいずれも百万部をこえており<sup>十八</sup>、一般に広く流通していた新聞であると考えられること、一九四五年から一九五六年頃にかけて欠落がなく、調査・比較がしやすいことの二点による。

ここでは調査結果を【1】『斜陽』構想時、【2】『斜陽』執筆時、【3】『斜陽』連載時の三つの時期に分けて説明していく。構想・執筆時を調査の対象に含めた理由は、構想・執筆時に華族の没落を象徴する事件があった場合、作品内に事件を想起させる内容が含まれている可能性が考えられるためである。

また、構想時と執筆時を分けたのは、構想時と執筆時で人物の設定が変更されているためである。『斜陽』構想の段階では華族階級ではないことから、執筆時に、太宰が華族階級への変更へと踏み切るような事件が発生している可能性が考えられる。なお、章末に上流階級に関する新聞記事の見出し一覧を掲載したので参照されたい。

### 【1】『斜陽』構想時（一九四五年七月末～一九四六年十一月二十日）

『斜陽』構想時は、一で確認したように一九四五年七月末から一九四六年十一月二十日までとした。この時期に報道された華族に関する出来事は、華族制度の改革、財産調査および財産税法の執行、新憲法の公布による華族制度の全廃決定の三点である。

華族制度改革の過程を『朝日新聞』に基づいて追っていくと、一九四五年九月三十日に華族の「政治的特権」を剥奪すべきだと述べる論説<sup>十九</sup>が掲載され、十一月十三日には「華族令改正に着手することにな」<sup>二十</sup>ったと報じられている。そして、十二月七日には幣原首相が「華族の政治的特権の除去については貴族院令の改正と共に研究してゐる」<sup>二十一</sup>と述べたことが報じられ、十二月二十八日には華族世襲財産法廃止に関する報道がなされている。<sup>二十二</sup> また、『読売新聞』では一九四六年一月二十一日に華族制度の全廃が決定したと報じている。（華族制の全廃決定 全国二百余名に及ぶ）

財産調査および財産税法の執行については、一九四六年三月三日に三紙すべてで、財産調査の方法や申告書が掲載されている。国民は三月三日時点での財産を強制的に申告させられることとなるが、財産税法では、この調査結果に基づいて課税額を決定した。税率は十万円超十一万円以下の二十五パーセントから段階的に上がり、千五百万円超が九十パーセントとなっている。<sup>二十三</sup> そのため、多くの財産を所有する華族や皇族、資産家は大打撃を受けた。財産税法は同年十一月十二日に公布、十一月二十日に施行された。

最後に、新憲法の公布について確認する。大日本帝国憲法に変わる新しい憲法である日本国憲法は一九四六年十一月三日に公布され、翌年五月三日に施行された。第十四条第二項「華族その他貴族の制度は、これを認めない」および第四十二条「国会は、衆議院及び参議院の両議院でこれを構成する」<sup>二十四</sup> という条文のもと、華族制度と貴族院が廃止される。『朝日新聞』でも当日「新憲法きよう公布 歴史的式典を挙行」の見出しで報道されている。

ここまで華族に関する報道を中心に取上げてきたが、この時期は華族よりも皇族の動向が注目される傾向にあった。皇族も華族と同様に、特権の廃止や皇室典範改正に伴う臣籍降下の問題、財産税の公布など環境の変化が大きく、「皇族の特権を廃止 十四宮家へ天皇の被護絶つ」(『読売新聞』一九四六年五月二十四日付)、「皇族の臣籍降下 陛下も出席されて御熱論」(『朝日新聞』一九四六年九月一日付)、「皇室財産課税五十億か」(『読売新聞』一九四六年九月十四日付)、「皇室財産にも財産税近く公布」(『読売新聞』一九四六年九月十五日付)といった記事が掲載されている。

さらに、皇族の場合には制度に関する報道以外でも取りざたされている。若宮たちの働く決意 新田で苦しい御生活」(『朝日新聞』一九四六年四月七日付)では、皇族の人々が新田切替の影響で財政難に陥り、各宮家が自動車を手放していることや、竹田宮家が千葉県三里塚を開墾し、馬鈴薯の植付をしたことが報道されている。また、三笠宮が満員電車に乗っている写真(『満員電車に三笠宮』『朝日新聞』一九四六年三月二十日付)はとくに話題となったようである。

これらの記事からは、当時の新聞社やそれを読む人々が、皇族の生活に興味を持っていたことが読み取れる。鹿島茂が指摘するように、「宮家の人々というのは、民衆が、畏れ多い天皇一族に対しては向けることのできなかつた好奇心を差し向けることの許されるスターやアイドルに近い対象」<sup>二五</sup>であつたのだろう。

一で述べたように、『斜陽』の階級設定はこの時点では華族ではなかつた。構想時において華族に関する記事は制度に関するもののみであり、実際に華族が没落したという報道は確認できない。華族世襲財産法廃止や特権の剥奪の可能性は報道されたものの、それが実行されるのは一九四七年であり、上流階級の人々を苦しめることとなる財産税に関しても、税の徴収が執行されるのは十一月である。この時点では華族の没落が表面化することはなかつたといえる。

## 【2】『斜陽』執筆時(一九四六年十一月二十一日～一九四七年六月末)

『斜陽』執筆時は『斜陽』が『新潮』に連載されることが決定した翌日から、『斜陽』が完成する一九四七年六月末までとした。

この時期は財産税法執行直後であるため財産税徴収の影響が感じられる記事がいくつか確認できる。

たとえば「別荘の賣物が続出 財産税生み出しに悩む湘南」(『読売新聞』一九四七年二月十二日付)、「財産税 皇室は三十三億 皇族の筆頭は高松宮の一千万円」(『読売新聞』同年二月二十一日付)、「財産税 納付は百四十億 赤字を背負い込んだ某財閥」(『読売新聞』同年三月十六日付)などがある。その記事の中には「元大臣、華族様、旧財閥などのお歴々がトラの子の別荘を売って税金を生み出そうという窮余の策だが」<sup>二六</sup>と、華族への言及もされている。

この期間に華族を中心に扱った記事は「『闇駆逐』…と華族商法 産地直結を看板の子爵乾物店」(『朝日新聞』一九四七年二月六日付)のみであり、中園輝雄子爵が市井の一商人として吉祥寺の駅前で乾物屋を開業したことが書かれている。中園子爵は「背広に、白い上ツパリ着込んで算盤片手に仕入から

店頭のお世辞にまで大忙しで、「ゆくゆくは勤労者の多い中央沿線の中野、荻窪、飯田橋、八王子、新宿などにチェーン式に直営販売所を設け、闇値を駆逐しようといふ大した意気込みである」と店の繁盛ぶりがうかがえる。

同様の記事は当時の雑誌にも見られ、『サンデー毎日』一九四七年三月二日号では「名士新商売のぞき」という特集を組み、その中で徳川義親侯爵の沢庵屋を紹介している。この記事においても店が繁盛している様子が描かれ、「まだまだこの人たちには更生の資金のあることをしみじみと思つた」と結ばれていることから、没落の影は見いだせない。この時期の華族に対し、新聞社側は財産税の生み出しに悩む記事を掲載する一方で、彼らが新たに商売を始め、生活の立て直しを図る姿に注目しており、その姿に対して肯定的な視線を送っていたと考えられる。

執筆時においても、【1】と同様に皇族の動向が注目されている。なかでも十一宮家の臣籍降下の決定は特筆すべき出来事と言えよう。臣籍降下の問題については九月頃から取りざたされていたが、議論の末に臣籍降下が決定したのは十二月下旬頃であつた。その決定は三紙すべてで報道され、一時賜金の額や姓がどうなるか、その後の生活をどのように設計するかなどが詳細に綴られている。

太宰が『斜陽』の階級設定を華族へと変更したのは一九四六年十一月二十日から翌年三月六日であることは一章で述べたが、新聞や雑誌では華族の没落を彷彿とさせる記事はほとんど見当たらない。

もし、設定の変更に踏み切る出来事がこの期間にあつたのだとすれば、当時新聞を賑わせていた皇族の臣籍降下の決定こそがそれにあたるのではないだろうか。

### 【3】『斜陽』連載時（一九四七年七月～一九四七年十一月）

『斜陽』連載時は『斜陽』が『新潮』に連載された一九四七年七月から十一月までとした。<sup>二七</sup>

この時期の華族に関する報道は「ニセ摘発隊三人組 元伯爵の次男が一役」（『朝日新聞』昭和二十二年十月十日）のみとなっている。これは旧華族が起こした事件ではあるが『朝日新聞』一紙で取り上げられた事件であり、扱いも大きくない。

現在の華族階級に関する記事はほとんどなかったものの、一九四七年九月二十七日に没落の憂き目にさらされた華族を描いた映画『安城家の舞踏会』<sup>二八</sup>が公開され、好評を博したことには注目しておきたい。脚本を担当した新藤兼人によれば、『安城家の舞踏会』は監督の吉村公三郎が「鎌倉の華族によばれて聞いた話」<sup>二九</sup>をもとに創作したものであると言う。このような事実や華族による犯罪の報道があつたことから、華族没落の様相はこの頃から表面化してきたのではないかと考えられる。

また、この時期には十一宮家が皇族籍を離脱しており、一九四七年十月十四日から十九日にかけて、詳細が各新聞で報道されている。

雑誌でも「宮さま・下界に降りる」（『週刊朝日』昭和二十二年十月六日号）、「宮様、平民への門出」（『サンデー毎日』同年十一月九日号）と特集が組まれ、皇族籍を離脱した五十一名の詳細や天皇陛下との〈最後の晩餐〉の様子、各家の今後の生計などが詳細に述べられている。

「今週の話題」『サンデー毎日』同年十一月二十三(日)号)にも昭和天皇の第一皇女として生まれ、東久邇家に嫁いだ成子夫人について「このお方が一足とびに、私らの仲間になられ、手鍋をさげたり、配給の行列にも並ばれると思うと、昔風の人々には、おいとしさで胸が一杯になることだろう」とあり、感傷の念を抱いていることが確認できる。「その一挙手一投足が注目され、渴望される「セレブ」<sup>三十四</sup>であった宮家の人々が一国民になってしまうことは、それだけ新聞社やそれを読む人々にとつて興味深い出来事であったのだろう。

このように『斜陽』構想時から『斜陽』連載時までの新聞記事を見てきたが、上流階級の報道は皇族にまつわるものばかりで、華族の没落を思わせる報道はきわめて少ないことが明らかになった。しかし、皇族が一国民となってしまうことに関する記事が多く掲載されており、反響が大きかったと考えられることや、華族の没落を描いた『安城家の舞踏会』が好評であったことから、当時の民衆は、上流階級の没落という物語を求めていたと考えられる。

臣籍降下が騒がれた一九四七年十月からしばらくの間、上流階級に関する報道はほとんど見られない。

そして次に上流階級に関する報道が確認できるのは、太宰の情死事件前後に起きた二つの事件である。これらの事件をきっかけとして、華族の没落を彷彿とさせる報道が顕著になったと考えられる。

### 三・華族の没落に関する報道の分析

ここでは主に、旧華族に関する報道が増加する発端と考えられる二つの事件―清棲元伯爵の長男による窃盗事件および高木元子爵の失踪・自殺に関する報道について見ていく。

はじめに、清棲元伯爵の長男による窃盗事件について確認する。この事件は清棲幸保元伯爵の長男・家隆が食堂で毛布を盗み、窃盗現行犯として逮捕されるというもので、一九四八年六月四日に三紙すべてで報道されている。

『朝日新聞』がこの事件を三段抜きで扱っているのに対し、『毎日新聞』と『読売新聞』はこの事件をトップで扱っている。記事には、家隆の父は元伯爵、母は「伏見宮博恭王の次女という名門だった」が、母の死後「元フロリダのダンサーであった女が母として来てからは家庭が冷く」<sup>三十二</sup>なったために家出をし、罪を犯したという動機が共通して書かれている。

また『読売新聞』には父が「家隆君を」罪の子<sup>三十三</sup>と罵倒、示談ですませようとした永里主任のはからいをはねつけ、身柄引取りをも拒否した<sup>三十四</sup>ために逮捕されたことが書かれている。これらの新聞記事からは、家隆が皇族家の母を亡くしたために転落したと思われるような書き方がされていることがうかがえる。

実際、この事件で非難が集中したのは家隆の家族に対してであった。家隆に対して世間は同情的で、「見知らぬ他人から配給のアンズやタオルの差入れ、引取つて世話したいとの申出、あるいは立派に更生して下さいなどの激励文」<sup>三十五</sup>が届いたという。この反響を受けて朝日新聞の記者は「一般の亡びゆく、特権階級に対するノスタルジアは、まだ相当強いね」と「名門の子」であることが家隆に同情的な理由だと指摘している。<sup>三十六</sup>

このことから、皇族に関する一連の報道に関してもそうだったように、「特権階級」が民衆と同列になることに新聞社側が肯定的であるのに対し、民衆は感傷的であるという傾向が確認できる。とくに家隆の場合、皇族の孫という身分でもあるため、その傾向が顕著であると考えられる。この時期においても皇族に対する憧憬が一般の人々に存在し続けていたことがうかがえる。

次に高木正得元子爵の失踪・自殺に関する報道を確認する。この事件は、三笠宮妃の実父である高木正得元子爵が一九四八年七月八日夜から行方不明となり、事故とみて捜査が進められていたものの十四日に遺書が発見され経済破綻による自殺であることが判明。そこから四ヶ月近く捜索を続け、十一月三日に死体が発見されるというものである。

最初の一報は一九四八年七月十二日に三紙で報道されている。いずれの記事でも三笠宮妃の実父であることが書かれており、清棲家隆の事件と同じく、皇族と近い関係にあることが強調されている。当初は「家庭的にも経済的にも失踪するような原因はな」<sup>三十五</sup>いとされており、事故とみて捜査が進められていた。

しかし、その後の捜査で「正得氏は昔気質で極めて良心的実直なため新時代に即応出来ず冗談まじりにヤミをする位なら死んだ方がましだと口ぐせのようについていた」<sup>三十六</sup>ことや「先月太宰治氏の心中事件の記事を読みながら、馬鹿なことをするものだ」と自殺を強く非難しながらもむさぼるように読み返していた」<sup>三十七</sup>という話から、自殺説が有力とされる。

『朝日新聞』と『読売新聞』は、高木元子爵が失踪のひと月前に報道されて話題となった太宰の情死事件に影響を受けたことについて言及している。とくに『読売新聞』は見出しを「高木元子爵の自殺説有力 太宰氏情死に衝撃？ 時勢にとけきらぬ深刻な悩み」（一九四八年七月十四日付）とし、太宰の死との関連性を強調している。

遺書の発見は七月十五日に三紙で報じられている。遺書には敗戦後の変革によって経済破綻に陥り、死を選ぶこととなった旨が記されていたが、ここで初めて「没落する華族階級」<sup>三十八</sup>「滅び行く旧貴族」<sup>三十九</sup>といった言葉が用いられていることには注目しておきたい。<sup>四十</sup>このことから、高木元子爵の失踪・自殺が戦後の華族の没落を象徴する事件として初めて報道されたものだと言ってよいだろう。

さらに『読売新聞』では「旧貴族階級の没落を描いたものとしては創作に太宰治の『斜陽』映画には『安城家の舞踏会』があり」<sup>四十一</sup>と『斜陽』の名を挙げ、華族の没落と『斜陽』を結び付けている。

『サンデー毎日』一九四八年八月十五日号では「没落名家集」という特集を組み、没落した華族・地主・地方財閥について報告している。「名門、名家が転落し没落し崩壊してゆく。宮様の義父が家出をした。宮様の血をひく鳥の殿様の子が泥棒をした。井伊大老の子孫がつかまつた」という冒頭からもわかるように、高木元子爵の失踪および清棲家隆の窃盗が最初に挙げられており、反響が大きかったことがうかがえる。

そしてこの文章からも、二つの事件を起こした人物が、単なる華族ではなく、「宮様」＝皇族の関係者であることが注目される理由であったことがわ

かるだろう。

また、導入部には「櫻の園」や「斜陽」どころでない、もつとどぎつくきびしい一幕一場が演じられている」と書かれており、ここでも華族の没落の物語として『斜陽』が挙げられている。このように実在の華族の没落と『斜陽』が結び付けられていく理由には、一九四八年六月に太宰の情死が報じられて話題となったことに加え、七月十一日に刊行された『斜陽』新版が熱狂的に受容されたことが背景にあるだろう。

高木元子爵の死体は一九四八年十一月一日に雲取山で発見され、十一月三日に三紙で報道された。その間には、井伊元子爵の三男による強盗事件や元子爵長男の詐欺事件、九条元公爵令嬢の家出など、華族に関する事件の報道が三点ほど確認できる。ここでもようやく新聞社にとって華族の没落が注目すべきものとなったということだろう。

しかし、一九四九年二月二十七日に報道された元子爵の板の間嫁ぎ以降、『朝日新聞』と『毎日新聞』では華族の没落に関する事件の報道がほとんど見られない。両紙は高木元子爵の事件の反響を受けて華族の事件を扱っていたものと考えられる。

このような皇族関係者にまつわる事件への反響からは、人々が一貫して皇族や華族の没落に対して同情的であり、そのような物語を求める傾向がうかがえる。そして『斜陽』は、その需要を満たす物語だったのだろう。もしかすると、当時の読者や雑誌も、『斜陽』が「ほとんど皇族に近いくらいの華族が没落してゆく」話であることを承知していたのかもしれない。

#### 四.『読売新聞』と「斜陽族」

『朝日新聞』と『毎日新聞』が没落華族の事件をさかんに報じたのが一九四九年二月までであったことは先ほど述べたが、それに対して『読売新聞』は一九四八年七月以降積極的に没落華族の事件を報道している。さらにその際『斜陽』と結び付けている傾向が見られる。

そこで、一九四八年から一九五一年にかけての『読売新聞』記事を確認し、どのように『斜陽』と結び付けられていくかを分析するとともに、「斜陽族」という流行語の変遷を追いたい。

まず、一九四八年に報道された記事を確認する。

高木元子爵の事件が騒がれていた最中の七月二十六日、『読売新聞』は「悩みは果てなし」華族商法「夏枯れから閉店 繁昌するのはまず例外」という記事掲載している。この記事では四つの例から、「元華族を看板にいましくスタートをきった人たちが」「ゆきづま」っている様子を書き立てている。そのうち一つは繁盛している例であるが、「これは商売上手という例外中の例外である」とし、全体として没落を想起させるような文面が並んでいる。<sup>四十一</sup>

同時期に書かれた「没落名家集」『サンデー毎日』一九四八年八月十五日号）でも店を出した華族について言及しているが、そこらは「結構うまくやっているようだ」と繁盛している例を多くあげていることから、『読売新聞』が華族の没落を強調する記事を掲載している傾向がうかがえる。

また、事件でなく、動向について報道している点にも注目しておきたい。『読売新聞』は、『朝日新聞』や『毎日新聞』と比較して、華族に関する動向を

報道することが多い。

八月二十三日には、博文館社長・大橋新太郎の妻であり、『金色夜叉』のお宮のモデルとしても知られていた大橋須磨の家出が報道される。この事件は、大橋夫人が生活苦と母娘の相克から十七日より失踪、二十四日に護国寺内で見つかるといものである。大橋夫人は華族階級ではないものの、上流階級に属していると言える。

同様の報道は『朝日新聞』『毎日新聞』でもなされているが、大橋家が上流階級であることの強調や、お家騒動という観点での記述は『読売新聞』にのみ見られる傾向である。また、「須磨さんは高木元子爵の失踪事件を聞いて「わたしも同じような境遇だ」と家人にもらしショックをうけていた」<sup>四十三</sup>とも書かれており、高木元子爵の失踪に共感したという記述が見受けられる。

この他にも井伊元子爵の三男による強盗未遂事件（七月二十八日付）や、九條元公爵の令嬢による家出騒動（十一月二、三日付）が報道されている。一九四八年に報道された『読売新聞』の記事からは、高木元子爵の失踪を華族の没落を象徴する事件として他の事件と結び付けている傾向や、華族の没落を想起させるような記述が確認でき、没落する旧華族を意識的に作り出しているようにすら感じられる。

また、一九四九年の報道からは、旧華族の没落を「斜陽」という言葉に置き換えていき、「斜陽族」という言葉を流行語として位置づける過程が見られるので、それぞれ確認したい。

はじめに、「養豚とバーのマダム 鍋島元子爵夫妻希望の設計」（二月九日付）について確認する。

この記事には、鍋島直浩元子爵が養豚業を始めたこと、それが軌道にのり、妻の重子夫人も高級喫茶を開店する運びとなったことが書かれている。これは『読売新聞』のみに掲載されたものであり、昨年七月二十六日の記事同様、事件でなく、旧華族の動向に関する報道である。ただし、昨年の記事とは違い「新しい生活の設計をめざす人々」の「希望物語」として書かれている。

また、ここで注目したいのは、「戦後の姿を「斜陽」の悲劇に彩った旧貴族社会の中にも新しい生活の設計をめざす人々がある」という記述で、以前ならば「没落」という単語を用いていたのを「斜陽」に置き換えていることである。『読売新聞』では高木元子爵の事件でも、華族階級の没落を描いた作品として『斜陽』の名を挙げていたが、この記事では、高木元子爵のものと比べより直接的に「斜陽」と「没落華族」が結び付けている。

大衆投票による良書ベストテンで『斜陽』が第二位となった<sup>四十四</sup>ことや、『斜陽』が十二万部を売るベストセラーとなっていたことから、読売新聞社は「斜陽」という単語を「没落」の意味に置き換えても通用すると考えていたのかもしれない。

また、『週刊朝日』一九四九年一月三十日号では、「人の噂も七十五日物語」という特集が組まれている。そこには昨年新聞紙上を賑わした人々のその後が書かれており、『斜陽』の女主人公・かず子のモデルである太田静子<sup>四十五</sup>がその一人に選ばれている。

その中で、彼女が「かず子的」とか「斜陽族」とかいわれるほど世間知らずだった太田さん<sup>四十五</sup>と紹介されていることは注目に値する。この文章から、この時期すでに「斜陽族」という言葉が用いられていた可能性が高いと考えられる。しかし、記事を読むにここでの「斜陽族」は階級を示すというよりも

「世間知らず」の意味で用いている部分があり、定義がはっきりしていないようである。次に、二月二十七日に報道された元子爵による板の間稼ぎについて確認する。

この事件は、元子爵である石川重之が老いと生活苦から板の間稼ぎを働いたというものである。当記事は、朝日・毎日・読売の三紙全てで扱われているため、それぞれの書き出しから、各新聞が石川をどのように記述しているかを比較したい。

『朝日新聞』は「元子爵の」板の間「犯人二十六日池袋署に捕まった」<sup>四十六</sup>とのみ書いており、板の間稼ぎという犯行を強調している。『毎日新聞』は、「またも転落の名門」<sup>四十七</sup>と、没落華族による事件の一つとして捉え、「転落」という言葉を用いている。

それらに対し『読売新聞』は「常陸下館の若殿様で育ち元子爵従二位の肩書さえある一老人」と紹介しており、華族の階級を強調している。また、「斜陽貴族の例にもれず戦後急速に没落」<sup>四十八</sup>と、「斜陽貴族」という単語を用いている。「斜陽」という単語は『朝日新聞』や『毎日新聞』には見られない。このことから、『読売新聞』のみが「斜陽」という単語に「没落」の意味を持たせていることがわかる。

三月十五日には、十三日に公開された映画『お嬢さん、乾杯！』（監督・木下恵介 脚本・新藤兼人 キャスト 石津圭三・佐野周二・池田恭子・原節子他）の評が掲載されている。この映画は「没落華族のお嬢さんと生活力旺盛な下町青年が育ちの違いでぐたくしながらも結局むすばれるというフワツとした話」<sup>四十九</sup>であるが、ここではヒロインに対し「斜陽貴族」の言葉は用いられていない。『週刊朝日』一九四九年三月二十七日号の「新映画」にも評が掲載されているが、そこでも「名門の令嬢」と書かれているのみである。

これらの映画評は、没落を意味する「斜陽」という単語が、この時点でまだ一般的ではなかったということを表していると思われる。また、『読売新聞』では「斜陽」という言葉に悲劇的なニュアンスを持たせている傾向があるため、喜劇的なストーリーである『お嬢さん、乾杯！』にその言葉を用いるのはふさわしくないと判断したのかもしれない。

十一月には「生きぬく」斜陽の二女性 『愛なき廿年』を清算（七日付）「法廷に争う」斜陽の兄弟 下方の逸品消ゆ（二十一日付）として、没落華族に関する記事を掲載しており、そこでも彼らを「斜陽」という言葉で紹介している。ちなみに、七日の記事で紹介されている女性の一人・一条重子は、一月九日に報道された鍋島氏の元妻である。

そして、十二月二十七日の「編集手帖」には「昭和廿四年の歳晩、この年が生んだ『新語と流行語』を考えてみると」「斜陽族」はもつぱら【内職】に血眼<sup>五十</sup>と、『読売新聞』紙上ではじめて「斜陽族」という言葉が使われている。

一九五〇年に入ると、華族にまつわる報道は少ないものの、「斜陽族」という記述が目立つようになる。

たとえば、四月十三日の「編集手帖」では学習院を「斜陽学校」<sup>五十一</sup>としているし、五月十二日の「よみうり時事川柳」には「斜陽族五月廿日が羨まし」<sup>五十二</sup>という川柳が掲載されている。川柳が読者による投稿であることから、当時の人々が「斜陽族」という言葉を用いていたことがうかがえる。

また、十月以降には「久邇氏に斜陽の悩み 宏壮な本体手放す 追われる生活と税金」（十月十六日付）「王族から職人へ 元李鍵公がガリ版屋開業」（十



月二十九日付)「大橋図書館の末路 先代の苦心も水泡 没落招いた?当主の愛欲行」(十二月二十五日付)の三記事で「斜陽族」という言葉が用いられている。ちなみに、最後に挙げた記事は、一昨年の八月に報道された大橋家にまつわるものである。

ここで注目したいのは、それぞれの元の身分が、皇族・王族・上流階級であり、華族階級ではないことである。以前の報道において「斜陽」が用いられる際は華族階級に限定されていたが、「斜陽族」となったことで、意味の範囲が広がったのではないかと考えられる。

その後、一九五一年四月二十六日に「斜陽夫妻法廷に争う 横須賀元侯爵 在米の婦人と離婚訴訟」が報道されたのを最後に、『読売新聞』は没落華族の報道をやめてしまう。生活保護法が制定されたことにより、没落華族自体が少なくなっている可能性もあるが、「斜陽族」という言葉が定着したことを受けてやめてしまったということも理由の一つとして考えられるのではないだろうか。

一方、『朝日新聞』は七月十八日の「天声人語」で「斜陽族」をもじって「社用族」というのがあるそうで「と述べているが、『朝日新聞』紙上で「斜陽族」という言葉が確認できるのはこの記事が初めてである。

また、十二月三日にも「斜陽夫人もつい出来心 きこのうの日曜・万引ばやり」という記事を掲載しており、『読売新聞』が用いていたのと同様の意味で「斜陽」という言葉を使っている。

『読売新聞』以外の新聞紙上で「斜陽族」が用いられるようになったことは、その言葉が一般化したことを示していると思われる。実際、昭和二十五年から文芸作品内でも没落した上流階級を意味する単語として「斜陽族」が用いられるようになっていく。<sup>五十三</sup>

さいごに、「斜陽族」について補足しておきたい。「没落貴族の家庭を描いた太宰治の長篇『斜陽』(昭和二十二年刊)から出た言葉」であることや、「激変した戦後社会の中で没落した階層を指す」という定義<sup>五十四</sup>ははつきりしているものの、具体的な流行時期やどこで最初に用いられたかは明確ではなく、ほとんどの流行語辞典では、「斜陽族」の例として高木氏の事件を挙げ、一九四八年に流行した言葉として考えられてきた。

しかし、今回の調査から、高木氏の事件前後には、事件と「斜陽」を結び付ける傾向は確認できるものの、「斜陽族」という言葉が用いられていなかったことや、一九四九年以降『読売新聞』が(旧華族の)「没落」という単語を「斜陽」に置き換えており、実在の旧華族の没落と「斜陽」を意識的に結び付けている様子がうかがえる。

一九四九年以降、地方紙や雑誌上でさかんに華族の没落を意味する言葉として「斜陽」を用いる動きが確認できるが、『読売新聞』のように、華族の没落を「斜陽」という言葉を用いて定期的に報道し続けるという姿勢は非常に稀であった。「斜陽」が華族の没落を主題とした物語として熱狂的に受容され、のちに「斜陽族」という流行語まで生みだされることとなった一端には、『読売新聞』の積極的な姿勢が関わっているのかもしれない。

## まとめ

第一章では、一九四五年から一九五一年にかけて『朝日新聞』『毎日新聞』『読売新聞』の三紙および『週刊朝日』『サンデー毎日』の二誌を分析し、華族

に関する報道がいつから、どのようになされているかを調査・分析した。

その結果、戦後から一九四七年にかけては主に皇族の皇籍離脱にまつわる報道が多く、華族に関する報道が少ないこと、また、一九四八年六月から七月にかけて、華族の没落を象徴する二つの事件が起き、それをきっかけとして、主に『読売新聞』紙上で没落華族に関する報道が積極的になされていたこと、一九四九年には『斜陽』のベストセラー化を受け、「没落」という言葉を「斜陽」に置き換えて没落華族に関する報道をしていたことが確認できた。

これまで、太宰が『斜陽』で没落する「華族」の物語を描いたのは、華族の没落が騒がれるという世の中の動きが先にあり、そこに『斜陽』という作品が投げられたという見方が通説であったが、今回の調査から『斜陽』連載まで華族に関する報道がほとんど見られないことが明らかになった。

この結果を踏まえた上で、なぜ太宰が『斜陽』の主人公一家を華族階級に設定したのかを改めて考えていく必要があるだろう。

〈資料〉 上流階級に関する新聞記事（朝日・読売・毎日）一覧

新聞社	日付	見出し	キーワード
朝日新聞	1945/9/30	議会制度の改革(下) 華族の特権廃止	華族制度
朝日新聞	1945/11/13	華族令改正に着手	華族制度
朝日新聞	1945/11/17	華族制度の改革に着手 華族令・全面的に検討	華族制度
朝日新聞	1945/12/7	華族の政治的特権 首相答辞 剥奪を研究中	華族制度
朝日新聞	1945/12/28	華族世襲財産法廃止 政府・衆議院に提案	華族制度
読売新聞	1946/1/21	華族制の全廃決定 全国三百余名に及ぶ	華族制度
朝日新聞	1946/3/3	財産調査、けふ午前零時	財産税
読売新聞	1946/3/3	財産調査日	財産税
毎日新聞	1946/3/3	財産調査・申告の手引	財産税
朝日新聞	1946/3/20	満員電車で三笠宮	皇族
朝日新聞	1946/4/7	若宮たちの働く決意 新円で苦しい御生活	皇族
朝日新聞	1946/5/8	皇族の人間解放 “国民は捉われ過ぎる 気楽になった我々”	皇族
朝日新聞	1946/5/9	天声人語(三笠宮に関する記事)	皇族
読売新聞	1946/5/13	“天皇よ人間ならぬと云ふこの声” 世田谷大会 宮内庁ヘデモ	皇族
読売新聞	1946/5/14	白米の残飯がたらひに三つ 宮城内 皇族方の夕食献立発見	皇族
朝日新聞	1946/5/24	皇族の特権を廃止 十四家の資産に課税 マッカーサー司令部指令	皇族
読売新聞	1946/5/24	皇族の特権を廃止 十四宮家へ天皇の被護絶つ	皇族
読売新聞	1946/5/24	苦しくなるお台所 皇族方も職探し	皇族
朝日新聞	1946/7/13	ゆき悩む各宮家のお台所 生活の簡素化に腐心	皇族
朝日新聞	1946/8/19	崩れゆく封建制 梨本宮別邸売立に地元怒る	皇族
朝日新聞	1946/9/1	皇族の臣籍降下 陛下も出席されて御熱論	皇族
朝日新聞	1946/9/11	皇族の地位と範囲に変更	皇族
読売新聞	1946/9/14	皇室財産課税五十億か	皇族
読売新聞	1946/9/15	皇室財産にも財産税近く公布	皇族
読売新聞	1946/9/16	民主化される新皇室典範	皇族
朝日新聞	1946/11/3	新憲法きょう公布 歴史的式典を挙げる	新憲法
朝日新聞	1946/11/19	財産税法・施行規則 あす実施	財産税
朝日新聞	1946/11/24	新皇室典範・皇室経済法案成る	皇族
朝日新聞	1946/12/8	典範改正へ 皇族の立場から 三笠宮のおはなし	皇族
毎日新聞	1946/12/20	皇族 一せいに臣籍降下	皇族
読売新聞	1946/12/27	明春、臣籍に降下	皇族
朝日新聞	1946/12/31	皇族の臣籍降下 二月、市民の仲間入り	皇族
朝日新聞	1947/1/3	秩父宮妃 気楽になった昨今 時折は殺人列車で上京	皇族
読売新聞	1947/1/3	臣籍降下の宮家 生活新設計 竹田宮は農園経営 本邸を手放す久邇宮	皇族
朝日新聞	1947/1/22	華族世襲財産廃止法案提出決る	華族
朝日新聞	1947/2/4	“もっと優美に―” 高松宮・ダンス談義	皇族
朝日新聞	1947/2/6	“間驅逐”…と華族商法 産地直結を看板の子爵乾物店	華族
読売新聞	1947/2/12	別荘の賣物が続出 財産税生み出しに悩む湘南	財産税
読売新聞	1947/2/21	財産税 皇室は三十三億 皇族の筆頭は高松宮の一千万円	皇族
朝日新聞	1947/3/11	宮様廃業 転身の目当てをどこへ	皇族
読売新聞	1947/3/16	財産税 納付は百四十億 赤字を背負い込んだ某財閥	財産税
読売新聞	1947/4/1	“宮さま運転手第一号” 三笠宮 操縦試験に軽くパス	皇族
朝日新聞	1947/5/3	新憲法きょうから施行	新憲法
読売新聞	1947/8/24	皇族籍離脱に甘くない世間	皇族
読売新聞	1947/8/29	スクリーン 変る配役の顔ぶれ	安城家の舞踏会
読売新聞	1947/9/5	(広告)遂に完成！ 安城家の舞踏会	安城家の舞踏会
毎日新聞	1947/9/27	(広告)安城家の舞踏会 本日封切	安城家の舞踏会
読売新聞	1947/9/27	(広告)本日封切 安城家の舞踏会	安城家の舞踏会
朝日新聞	1947/10/5	映画評 安城家の舞踏会	安城家の舞踏会
朝日新聞	1947/10/10	ニセ摘発隊三人組 元伯爵の次男が一役	華族
毎日新聞	1947/10/14	きょうから「平民」 五十一方 皇室会議で決定	皇族
朝日新聞	1947/10/14	十一宮家きょう離籍 五十一方が新生活へ	皇族
読売新聞	1947/10/14	皇族・宮号を姓に きょうから一国民	皇族
朝日新聞	1947/10/15	天声人語(宮家に関する記事)	皇族
読売新聞	1947/10/16	元軍人皇族を追放 東久邇ら十一名	皇族
朝日新聞	1947/10/17	元皇族十一氏を公職追放	皇族
朝日新聞	1947/10/19	元宮様たち陛下にお別れ	皇族
毎日新聞	1947/10/19	両陛下とお別れの盃 臣籍降下卅三氏	皇族
読売新聞	1947/10/22	ぬかった梨本氏 お蔵の衣類をござり	皇族
朝日新聞	1947/10/30	久邇朝子嬢の結婚	皇族
読売新聞	1947/10/30	家探しの念願叶って 久邇朝子さんと島津氏結婚	皇族
読売新聞	1947/12/4	ホールに高松宮 “民衆のダンス”に拍手	皇族
朝日新聞	1948/6/4	清棲元伯爵の長男が盗み 家を飛出して転落の生活	華族
読売新聞	1948/6/4	清棲元伯爵の息 詐欺、窃盗で逮捕状 名門の子 語る転落の道	華族
毎日新聞	1948/6/4	愛に飢えた名門の息 ついに窃盗へ転落 父も姉も取り合わず	華族
朝日新聞	1948/6/13	清棲家隆、起訴猶予	華族
読売新聞	1948/7/12	高木元子爵(三笠宮妃実父)失踪	華族
毎日新聞	1948/7/12	高木氏(三笠宮妃実父)失踪	華族
朝日新聞	1948/7/12	八日夜から行方不明 高木元子爵	華族
毎日新聞	1948/7/13	手がかりなし ナゾの高木氏	華族
読売新聞	1948/7/14	高木元子爵の自殺説有力 太宰氏情死に衝撃？ 時勢にとけきらぬ深刻な悩み	華族
毎日新聞	1948/7/14	足どり尚不明 失そうの高木氏	華族
朝日新聞	1948/7/14	高木氏、覚悟の家出 厭世のノートや辞世	華族

新聞社	日付	見出し	キーワード
読売新聞	1948/7/15	高木氏の遺書発見 “探してはならぬ、自然に還元する” 滅びゆく旧貴族の苦悶	華族
毎日新聞	1948/7/15	高木氏の遺書発見 経済破綻による自殺か	華族
毎日新聞	1948/7/15	高尾山等を探す 三笠宮が語る高木氏の失踪	華族
朝日新聞	1948/7/15	窮乏から自殺行 高木氏、家族への遺書	華族
読売新聞	1948/7/16	與瀬か 浅間山か 高木氏 依然手がかりなし	華族
毎日新聞	1948/7/16	高尾山を捜査 高木氏の行方	華族
朝日新聞	1948/7/16	天声人語(太宰・高木氏の自殺に関して)	
読売新聞	1948/7/23	高木氏と塩尻(長野)まで同車 知人から邦子夫人へ新事実	華族
朝日新聞	1948/7/24	高木氏の死体捜査	華族
朝日新聞	1948/7/25	“高木証人”はホラ男	華族
読売新聞	1948/7/26	悩みは果てなし“華族商法” 夏枯れから閉店 繁昌するのはまず例外	華族
読売新聞	1948/7/28	こゝにも転落貴族 井伊元子爵の弟を検挙	華族
朝日新聞	1948/7/28	強盗になり損ね 井伊元子爵の三男捕る	華族
朝日新聞	1948/8/4	元子爵長男のサギ	華族
毎日新聞	1948/8/22	故大橋夫人生活苦の家出	上流階級
読売新聞	1948/8/23	宿命のダイヤ 大橋家のお家騒動 高木氏の失踪に共感	上流階級
毎日新聞	1948/8/23	都内にいるか 大橋未亡人の行方依然不明	上流階級
毎日新聞	1948/8/24	大橋未亡人帰る 七日間護国寺境内の知人宅に	上流階級
朝日新聞	1948/8/24	「須磨さん」みつかる	上流階級
朝日新聞	1948/9/11	高木元子爵か 高尾山中に白骨死体	華族
朝日新聞	1948/9/12	高木氏でない 高尾山中の死体	華族
読売新聞	1948/11/2	九條元公爵の令嬢家出	華族
読売新聞	1948/11/3	高木元子爵の死体発見 奥多摩の雲取山中で	華族
読売新聞	1948/11/3	九條賢子さんの行方判る	華族
毎日新聞	1948/11/3	高木本子爵の死体 雲取山の尾根で発見	華族
朝日新聞	1948/11/3	高木元子爵の死体 奥多摩山中で発見	華族
読売新聞	1948/11/4	高木氏の遺骨自邸へ	華族
毎日新聞	1948/11/4	足なれた駒島平 高木氏 身正し自然に還る	華族
毎日新聞	1948/11/4	落葉のなかに 発見現場	華族
朝日新聞	1948/11/4	山の林で首つり自殺 高木正得元子爵の死体収容	華族
毎日新聞	1948/12/30	話題の主・その後 名門の子の巻	華族
読売新聞	1949/1/9	養豚とバーのマダム 鍋島元子爵夫妻希望の設計	華族
読売新聞	1949/2/27	元子爵が板の間 老いと落魄から盗み	華族
毎日新聞	1949/2/27	元子爵が板の間稼ぎ	華族
朝日新聞	1949/2/27	食えぬ悲劇 元子爵が板の間かせぎ	華族
毎日新聞	1949/3/13	(広告)本日登場! お嬢さん乾杯!	お嬢さん乾杯!
読売新聞	1949/3/15	映画評「お嬢さん、乾杯!」	お嬢さん乾杯!
読売新聞	1949/10/4	高木家の悲劇 正得氏の死を解く “罪の甥”を苦に自殺?	華族
読売新聞	1949/11/21	元華族が横領	華族
読売新聞	1949/12/27	編集手帖(新語と流行語について/「斜陽族」の記述あり)	
読売新聞	1950/4/13	編集手帖(学習院について/「斜陽族」の記述あり)	
読売新聞	1950/5/12	よみうり時事川柳 斜陽族五月廿日が羨まし	
読売新聞	1950/10/29	王族から職人へ 元李鍵公がガリ版屋開業	王公族
読売新聞	1950/12/25	大橋図書館の末路 先代の苦心も水泡 没落招いた? 当主の愛欲行	上流階級
読売新聞	1951/4/8	元海軍少将の妻子がサギ	軍人
朝日新聞	1951/7/18	天声人語(「斜陽族」から「社用族」へ)	
朝日新聞	1951/8/27	元子爵二男が空巢	華族
朝日新聞	1951/12/3	斜陽夫もつい出来心 きのうの日曜・万引ばやり	華族
読売新聞	1952/11/28	我が家 久我美子	華族
朝日新聞	1953/3/2	二重橋前で自殺図る 元伯爵の長男重体	華族
朝日新聞	1956/9/4	元男爵らサギ 手形で六百万円	華族

※作成者が記事内容から判断し、分類したものを「キーワード」として挙げた。『安城家の舞踏会』『お嬢さん乾杯!』はいずれも没落華族を題材とした映画である。また、見出しのみでは内容が分かりにくいものは括弧内に概要を示した。

## 第二章 階級設定の曖昧さについて

はじめに

『斜陽』の主人公一家は、華族階級という設定である。しかし、構想（一九四五年十一月二十日）の段階では「自分の実家の津島家をモデルにし」た「没落する旧家の悲劇」として描かれる予定であり、主人公は地主階級の設定であったと考えられる。

第一章では、上流階級に関する新聞報道の調査を行い、なぜ『斜陽』の主人公一家の階級設定に変更が生じたかを時代状況の面から考察した。

そこで第二章では、『斜陽』本文における階級描写を分析し、主人公一家の階級が、華族よりも皇族を想定して描かれた可能性が高いこと、皇族に関する実際の報道に合わせて物語内の時間・展開が設定されていることを指摘したい。

具体的には、『斜陽』本文を分析し、主人公一家を華族と言う設定にしながらも、本文中では華族であることを明確にする表現を避けるとともに、彼らの階級が皇族であるかのように思わせるような表現が用いられていることから、太宰が意識的に主人公一家の階級設定を曖昧にしており、華族よりも皇族を想定して描いた可能性が高いことを指摘する。

さらに、皇族に関する実際の報道と物語内の時間が照応しており、戦後の皇族の動向や生活ぶりが、母・直治の最期やかず子の発言に影響をもたらしていることを示したい。

これらにより、太宰が意識的に『斜陽』の主人公一家の階級を曖昧にしており、華族という設定を用いながらも皇族を想定させようとする意図が見られるとともに、物語の展開が実際の皇族の報道に影響を受けていることを示したい。

一では、『斜陽』で華族を指す際に用いられる「貴族」という表現の意図を考えるとともに、階級を示す具体的な描写を分析し、主人公一家が華族であることを明確にするような表現が意識的に避けられていることを指摘する。

二では、「宮様」という言葉が使われている場面の分析から、主人公一家の階級が皇族であるかのように思わせるような表現が用いられていることを指摘する。

三では、物語の設定期間と、その時期に取りざたされた皇族に関する実際の報道を照らし合わせ、母・直治の最期やかず子の発言に、皇族に関する報道が関連していることを指摘する。

### 一・「貴族」という表現について

太宰は『斜陽』が『新潮』に連載されるひと月ほど前に『人民しんぶん』よりインタビューを受けているが、その際『斜陽』の主人公一家の設定について次のように答えている。

「題は？」

「斜陽、なゝめのひですね」

「どうゆうものでしょうか？」

「ぜんたいが娘さんの手記の形でつゞけられるんですが、ゆうべ書いたところに、人間は恋と革命のために生れてきたものだって、娘さんが思うところがあるんです、話はある没落貴族、それもほとんど皇族に近いくらいの華族が没落してゆく、その家庭の話なんです、その貴族夫人、つまり手記を書いている娘さんのお母さんなんか、いわゆる成上りなんかじゃなくて骨のずいからの貴族なんです、」<sup>〔一〕</sup>二

（傍線は引用者、以下同様）

注目したいのは、傍線部に示したように、太宰が『斜陽』の主人公一家を単なる華族ではなく「ほとんど皇族に近いくらいの華族」であると強調していることである。第一章で指摘したように、太宰が『斜陽』の登場人物を華族階級へと変更した時期に話題となっていたのが十一宮家の臣籍降下の決定であったことから、太宰にとって階級設定の意義は「華族」であることではなく、「皇族に近い」ことにあるのではないかと考えられる。

そこで、ここでは『斜陽』本文の階級描写を分析し、主人公一家の階級については華族であると明確に述べられている部分が非常に少なく、意識的に曖昧な表現が用いられていることを示したい。

はじめに、『斜陽』で多く用いられる「貴族」という表現の意図を考えていく。

『作家用語索引太宰治』第五卷（教育社、一九八九年）によれば、『斜陽』の中で「華族」という言葉が用いられているのはわずか二回である。内容も「じつさい華族なんてものの大部分は、高等御食とでもいつたやうなものなんだ」という直治のセリフと、「いまはもう、宮様も華族もあつたものではないけれど」というかず子の語りであり、いずれも直接的に自分たちのことを指してはいない。身分を表す言葉でかず子たち自身を表す場合には主に「貴族」が用いられている。

実際、『斜陽』の同時代評や先行研究を見ると、「日本では明治末期の通俗小説にしか描かれなかつた貴族の生活を太宰氏が描き出したといふことには意味が十分にあり」<sup>三</sup>という伊藤整の発言や「現実の日本の貴族の風俗を描いた部分が、いやに安手で、恥しささえ感じられるのです」<sup>四</sup>という奥野健男の発言など、文脈から判断するに貴族という言葉が華族と同義のものとして使用している傾向が多数確認できる。また、新聞記事においても同様の傾向が見られる<sup>五</sup>ことから、太宰が華族と同義のものとして「貴族」を使っていた可能性が考えられる。

しかし、太宰は『斜陽』の前に発表した「ヴィヨンの妻」『展望』一九四七年三月号）で主人公の夫・大谷を華族階級の人物として登場させているが、そこでは彼の出自が「四国の或る殿様の別家の、大谷男爵の次男」であることを示すとともに、「華族」という言葉を用いて表現しており、「貴族」という

言葉は使っていない。

なぜ、太宰は『斜陽』においてかず子たちの階級を「貴族」と表現したのだろうか。亀井勝一郎は「引用者注―太宰治が―みづから夢み、みづから創造しなければ存在しない種族に与へた名が「貴族」なのである」<sup>六</sup>と、「貴族」という言葉が実際の階級ではなく、太宰の理想像を表す言葉として機能していると指摘する。

高等御下宿と書いてある看板が本郷あたりによくあつたものだけれども、じつさい華族なんてもんのは大部分は、高等御下宿とでもいつたやうなものなんだ。しんの貴族は、あんな岩島みたいな下手な気取りかたなんか、しやしないよ。おれたちの一族でも、ほんものの貴族は、まあ、ママくらゐのものだらう。あれは、ほんものだよ。かなはねえところがある。(一)

これは冒頭の直治の台詞であるが、華族の大部分が「高等御下宿」であるのに対し、母は「ほんものの貴族」であると述べており、華族と貴族を使い分けていることが確認できる。

「貴族」という言葉は『斜陽』で十四回出てくるが、その内の九回は直治の冒頭の台詞および遺書で用いられている。また、その際直治が「高貴」だと考える母や上原の妻について語られることが多く、「貴族」が理想像を表す言葉として機能していた可能性は否めない。しかし、亀井が指摘したような意図で太宰が「貴族」という言葉を用いていたとするならば、わざわざ「しんの」や「ほんものの」という言葉を付け加えて(単なる)「貴族」と区別する必要はないと思われる。

また、「僕の周囲の貴族の中には、ママはとにかく、あんな無警戒な「正直」な眼の表情の出来る人は、ひとりもあなかつた事だけは断言できます」のように、上原の台詞や直治の遺書の一部で、単に階級を意味する言葉として「貴族」を使っている例も確認できるため、太宰が徹底して「貴族」に特有の意味を付していたとは考えにくい。

それでは、どのような意図で太宰は『斜陽』の華族を「貴族」と表現したのだろうか。

「貴族」と華族を同義のものとして扱う傾向が見られることは先ほど述べたが、一方で一九一九年という古い例ではあるものの、学習院を「貴族学校」と述べる記事(学習院の生徒から 米無日の実行を注文)『朝日新聞』一九一九年一月二十九日付他二件も確認でき、皇族・華族をまとめて貴族とする場合もあった。太宰は、華族だけではなく皇族を含めたために、「貴族」という言葉を用いたのでないだろうか。

ここで、『斜陽』の階級設定がどのような評価を得ていたかを確認しておこう。

伊藤整は『斜陽』について、「貴族階級の生活や性格が現在の不安な様相で鮮明に描かれ」た「一つの風俗小説」として「珍重した人が多いらしい」<sup>七</sup>と述べているが、当時の『斜陽』評を見てみると、華族への描写に対する批判が目立つ。

たとえば、「貴族の娘が山だしの女中のやうな言葉を使ふ」のに「閉口した」という志賀直哉の批判<sup>九</sup>は代表的なものである。

この他にも、「太宰君は、貴族は知らぬようだ」「ここに出てくる貴族というものは、貴族とはさもありなんといった実に通俗的な貴族だ。追いつめられていても、貴族はなお傲慢ですよ。こんなふうには貴族の女がたちまち寝てしまうというような血は日本の貴族にはない」<sup>十</sup>とかず子の行動に対して難色を示す高見順の意見や、「あれ（引用者注「母」）は小説の中でだけさうと思はせる力で書いてゐる」「如何にもありさうな貴族の夫人だ、だからイケナイ」<sup>十一</sup>という郡山千冬の言及は、華族の描写に対する批判であるといえよう。

また、時代は下ってしまうものの、河上徹太郎の『斜陽』は初めから私には受つけられなかった。「没落貴族と称する母娘が下品で厭味つたらしく、かといつてこの肩書にこだはらねば筋に意味がないし」<sup>十二</sup>という、『斜陽』の母娘の人物造形と、華族という「肩書」との間に生じる違和感の指摘や、三島由紀夫の「言葉つかひといひ、生活習慣といひ、私の見聞してゐた戦前の旧華族階級とこれほどちがった描写を見せられては、それだけでイヤ気がさしてしまつた」<sup>十三</sup>という批判もそれにあたるだろう。

このように、『斜陽』を華族階級の没落を描いた「一つの風俗小説」として受容し、『斜陽』における風俗描写を実在の華族階級と比較して批判する評論は数多くあつた。とくに、華族中心の学校であつた学習院に在学していた志賀直哉や三島由紀夫、白洲次郎夫妻の元に居候していた河上徹太郎のように、華族階級の人々と交流があつたと考えられる評者に多い評価である。

一方で、伊藤整は「日本では明治末期の通俗小説にしか描かれなかつた貴族の生活を太宰氏が描き出したといふことには意味が十分にあり、さういふものとしてこの作品が喜ばれたり批判されたりするのは、一九四七年においては当然のことである」としながらも、「風俗の描写としての正当さは、この作にはまるでないと言つてもいいやうなものだ」と、『斜陽』が華族の風俗を描くことを主題とした作品であるという考えを否定する。<sup>十四</sup>

実際、『斜陽』では登場人物が華族階級として設定されているものの、「爵位の提示自体がまったくなくさず」、「華族という設定は、じつは作品中ではほとんどその実体が示されていないのである」<sup>十五</sup>と根岸泰子が指摘するように、華族階級であることを示す書き込みは非常に少ない。

それにもかかわらず、当時の評論においては、『斜陽』を華族の風俗を描かんとした作品と捉えた上で評価しているものが多く、そうではないと判断したのは伊藤整と、「太宰治が夢み創造しようとした、人間の或る典型」に与えた名が「貴族」だったのであり、「現実存在したあの貴族への憧憬などと誤解してはならぬ」<sup>十六</sup>と述べた亀井勝一郎の意見くらいであつた。

また、太宰治自身も「如是我聞」（『新潮』一九四八年三〜七月号）において次のように述べている。

貴族がどうかのうのと言つてゐたが、（貴族といふと、いやにみなイキリ立つのが不可解）或る新聞の座談会で、宮さまが、「斜陽を愛読してゐる、身につまされるから」とおつしやつてゐた。それで、いいぢやないか。おまへたち成金の奴の知るところでない。（四）



この文章は志賀直哉の『斜陽』評価に対する反論であると読まれることが多いが、傍線部から、対象が複数人であることが読み取れる。

さらに、反論材料として挙げているのは華族の意見ではなく「宮さま」＝皇族の意見である。同時代において、『斜陽』の主人公一家を実在の華族と比較する評がいくつか確認できるが、太宰は皇族を含めて「貴族」と表現したのであり、それゆえ『斜陽』の「貴族」を単なる華族として捉えるすべての評者に不満を持ったのではないだろうか。

次に、具体的に階級を示す描写の有無を確認する。

根岸は『斜陽』について「階級制度を読者に意識させるような要素をできうるかぎり捨象した、いわば操作されたテキストである」<sup>17</sup>と指摘している。先述したように、『斜陽』の主人公一家に関しては、華族という設定でありながらも、具体的な階級を示す描写がほとんど見られない。「ヴィヨンの妻」の大谷のようにはっきりと出自が述べられることはなく、「光琳といふ画家」が「むかし私どもの京都のお家に永く滞在して、襖に綺麗な絵をかいて下さった」という文章や、「駒場の」「宮様」が「血縁つづき」であるという設定から推測するしかない。

むしろ、かず子たちが華族であることが証明される記述は、「おれたちのやうに爵位だけは持つていても」という直治の台詞にあるように爵位を持つているといふ点のみであり、具体的な爵位の提示すらされない。しかしそれは『斜陽』の登場人物すべてに該当するわけではない。直治の友人である岩島（伯爵）や柳井（子爵の次男）、かず子たちが住む山荘の以前の持主である「河田子爵」については、はっきりと爵位が提示されているのである。このことから、太宰が主人公一家の爵位のみを意識的に曖昧にしていることがわかる。

また、不思議なことに『斜陽』では主人公一家の姓が一度も提示されない。『斜陽』はかず子の手記という形式を取っているため、姓が提示されないのは当然とも考えられるが、状況説明の中で一度も出てこないのは不自然である。そしてこのことは、氏姓を有しない皇族を連想させる。

ここまで見てきたように、『斜陽』の主人公一家の階級は単なる華族ではなく、「ほとんど皇族に近い」華族」として設定されていた。太宰は彼らが「ほとんど皇族に近い」階級であることを強調したために、あえて華族であることを明確にするような表現を避けていたと判断できる。

## 二．「宮様」という言葉について

『斜陽』では、主人公一家が華族であることを曖昧化するだけにとどまらず、彼女たちの階級が皇族であるかのように思わせるような表現が用いられている。そして、その際に使われるのが「宮様」という言葉である。

「宮様」という言葉は『斜陽』本文中で七回使われている。その内の四回は、主人公一家と「血縁つづき」の「或る宮様」を指しており、それ以外の三回は、特定の皇族ではなく皇族一般を示す言葉として使われている。しかし文脈から判断すると、皇族を示す「宮様」という言葉が華族であるはずのかず子たちと結び付けられている。

二では、皇族一般を示す言葉として「宮様」が用いられる場面を分析し、主人公一家の階級が皇族であるように思わせる表現がされていることを指摘し

たい。

最初の二回は、かず子が火事を起しかけ、村の人々に謝りに行った際、「西山さんのお嫁さん」に叱られるという場面で使用されている。

ただ、前のお家の西山さんのお嫁さん、といつても、もう四十くらゐのをばさんだが、そのひとにだけは、びびり叱られた。

「これからも気をつけて下さいよ。宮様だか何さまだか知らないけれども、私は前から、あんたたちのままごと遊びみたいな暮らし方を、はらはらしながら見てゐたんです。子供が二人で暮しているみたいなんだから、いままで火事を起さなかったのが不思議なくらいのものだ。本当にこれからは、気をつけて下さいよ。ゆうべだって、あんた、あれで風が強かったら、この村全部が燃えたのですよ」(二)

傍線を引いて示したように、「西山さんのお嫁さん」はかず子たちを華族であると明言せず「宮様だか何さまだか知らないけれども」と表現している。このような表現を用いた理由として、「西山さんのお嫁さん」に代表されるような一般の人々にとつて、かず子たちの階級を判別するのが難しいということが考えられるが、かず子たちが華族という設定であるにもかかわらず、「華族だか何さまだか」ではなく「宮様」という言葉を当てはめているのは不自然であるように思われる。

また「ヴィヨンの妻」でも、料理屋の亭主が大谷との関係を説明する際「いまはもう、華族もへつたくれも無くなつたやうですが」と似たような表現を用いているが、そこでは「宮様」という単語は使われていない。

しかし、あの時に風が強かったら、西山さんのお嫁さんのおつしやるとほり、この村全体が焼けたのかも知れない。さうなつたら私は、死んでおわびしたつておつつかない。私が死んだら、お母さまも生きては、いらつしやらないだらうし、また亡くなつたお父上のお名前をけがしてしまふ事にもなる。いまはもう、宮様も華族もあつたものではないけれども、しかし、どうせほろびるものなら、思ひ切つて華麗にほろびたい。(二)

これは「西山さんのお嫁さん」の言葉を受けてのかず子の語りであるが、ここでも「宮様も華族もあつたものではない」と、「宮様」という言葉を交えて当時の時代状況を説明している。「西山さんのお嫁さん」の言葉を受けての語りであることを考えれば「宮様」という言葉が入るのは不自然ではないだろう。しかし、いずれの場合も華族であると断定せず「宮様」という単語を入れ込んでいることは注目したい点である。

最後の一回はかず子が「六十すぎた独身のおじいさんで、芸術院とかの会員」であるという「師匠さん」との「縁談」の場面で用いられている。

「このお別荘を、お売りになるとかいふ噂を聞きましたが。」

師匠さんは、意地わるさうな表情で、ふいとさうおつしやいました。私は笑ひました。

「ごめんなさい。桜の園を思ひ出したのです。あなたが、お買ひになつて下さるのでせう？」

師匠さんは、さすがに敏感にお察しになつたやうで、怒つたやうに口をゆがめて黙しました。

或る宮様のお住居として、新円五十万円でこの家を、どうかうといふ話があつたのも事実ですが、それは立ち消えになり、その噂でも師匠さんは聞き込んだのでせう。でも、桜の園のロパーヒンみたいに私どもに思われているのではたまらないと、すっかりお機嫌を悪くした様子で、あと、世間話を少ししてお帰りになつてしまいました。(四)

この文章から考えたいのは、傍線部に示したように「或る宮様のお住居として、新円五十万円でこの家を、どうかう」となっており、売るとも買うとも明言していないことである。

かず子たちが華族であるという前提で考えれば、「或る宮様」が自分の住居としてかず子たちの山荘を買い取ると読み取れるだろう。しかし、戦後皇族は新円切替や財産税徴収の影響により財政的に苦しい状況を強いられていた。『斜陽』の登場人物の階級が華族階級へと変更したと思われる一九四六年十一月二十日から一九四七年三月六日の間には、久邇宮が家を手放したこと<sup>十九</sup>や皇室に財産税がいくら課税されたかという問題<sup>二十</sup>などが報道されており、皇族が家を売る側に回っていたことは太宰も承知していたと思われる。

また、この場面は「私は、ことしの夏、或る男のひとに、三つの手紙を差し上げたが、ご返事は無かつた」という文章から一九四六年の夏に設定されていることがわかるが、一九四六年八月十九日付の『朝日新聞』では、財政困難のために梨本宮が別邸を売るという報道（崩れゆく封建制 梨本宮別邸売立に地元怒る）<sup>二十一</sup>が確認でき、物語内の設定期間においても皇族が家を買える状況にあつたとは考えにくい。

右に述べたような時代状況を鑑みれば、この文章は「或る宮様のお住居として、新円五十万円でこの家を」売、という解釈、かず子たちの家が「或る宮様のお住居」として売られるという文章に読み取れるのではないだろうか。

それに、もし別荘の買い手が「宮様」であるという噂があつたとかかず子が承知していたならば、「師匠さん」に対して「あなたが、お買ひになつて下さるのでせう？」と聞くことはないだろう。本文中に「どうかう」と書かれている以上、どちらであるとも明言はできないが、少なくとも「どうかう」として買うとも売るとも断言しないことにより、時代状況がわかつている者によつては後者の解釈になりうるような、どちらの可能性をも含ませた曖昧な表現にしているのではないかと思われる。

華族階級という設定を用いながらも徹底してその実体を示さなかつたことや、皇族を思わせるような曖昧な書きぶりは、太宰が意識的にほとんど皇族に

近い階級として『斜陽』の主人公一家を描こうとした結果の表現であったと言えるだろう。

### 三・皇族に関する報道と比較して

ここまで、太宰が『斜陽』の主人公一家を「華族」ではなく、ほとんど皇族に近い階級を想定して描いている可能性を指摘してきたが、そのように考えて物語を読んでいくと、物語の設定期間と、皇族に関する実際の報道が照応する箇所が三点確認できる。

一点目は母の結核が発覚し、亡くなるまでの期間が十一宮家の臣籍降下に関する議論が行われた時期と重なっていること、二点目は、直治の自殺の時期が十一宮家の臣籍降下決定の直後であること、そして三点目は「陛下もこんど解放された」というかず子の発言が、皇族の人間の解放に関する報道を受けてのものと考えられることである。以下、それぞれの場面を確認し、母・直治の最期やかず子の発言が皇族に関する報道とリンクしていることを指摘したい。

分析に入る前に、改めて皇族に関する報道の主な流れを簡単に確認しておく。

戦後、新聞では皇族の動向や制度の変更について定期的に報じており、なかでも十一宮家の臣籍降下に関してはさかんに報道されている。

一九四六年五月二十四日付の新聞には秩父、高松、三笠ら皇弟の宮家も含む十四宮家の特権が廃止されることが報道された。

また、同年九月一日付の『朝日新聞』には「皇族の臣籍降下 陛下も出席されて御熱論」という記事が掲載されている。ここでは、秩父、高松、三笠の三直宮家を除いた十一宮家の去就について語られており、臣籍降下に関しては「自発的請願が穩当」だと考えられていた。

しかし、皇室典範改正や臣籍降下に際しての保障に関する議論が進められていくものの「十一宮家側は自発的離脱の情願について意思統一」されておらず、「結局、天皇自ら十一宮家を集め、皇籍離脱を申し渡すこととなった」<sup>二一</sup>という。

十一月二十四日に新皇室典範・皇室経済法案の完成が報道された後、十二月五日に皇室典範改正案が「衆議院に上程され」<sup>二二</sup>臣籍降下が決定。「皇族一せいに臣籍御降下」『毎日新聞』一九四六年十二月二十日付、「明春、臣籍に降下」『読売新聞』一九四六年十二月二十七日付、「皇族の臣籍降下 市民の仲間入り」『朝日新聞』一九四六年十二月三十一日付」と各紙で報道された。当初は一九四七年二月ごろに臣籍降下をする予定だったが、実際に十一宮家が皇族籍を離脱したのは十月十四日であった。

それではまず、「お母さま」の発病から死にかけての場面について見ていきたい。

「お母さま」が発熱し、「村の先生」に診察を受けるのは「早くこの九月の、蒸暑い、謂わば残暑の季節が過ぎるといい」という文章からも明らかのように、一九四六年九月である。その後、「以前侍医などをしていらした三宅さまの老先生」に診てもらい、結核であることが判明する。「十月になったが」「お母さまのお熱は、やはり毎日夕方になると、三十八度と九度のあいだを上下し」、幾日かを経て「秋のしずかな黄昏」に亡くなっている。

母が発熱するのは九月であり、十一宮家の臣籍降下に関する議論が始まった時期と重なっている。また、秋に亡くなったとあることから、降下が決定す

る十二月には至っていない。

母の死にあたっては「ああ、お母さまのやうに、人と争はず、憎まずうらまず、美しく悲しく生涯を終る事の出来る人は、もうお母さまが最後で、これからの世の中には存在し得ないのではなからうか」と「日本で最後の貴婦人」であることが強調される。皇族の臣籍降下が決定する前に死んでいく母は、あたかも降下させられる皇族になぞらえられており、皇族という階級に殉ずる人物として描かれていると考えられる。

次に、直治の自殺の時期を確認する。

母の死後、「貴族という自身の影法師から離れた」と思っていた直治が、「僕は、貴族です」との言葉を遺して自殺する。「直治の死のあと始末をして、それから一箇月間」「冬の山荘にひとりで住んでいた」かず子が上原への最後の手紙を書いたのが「昭和二十二年二月七日」であることから、直治が自殺したのは一九四七年一月七日頃であると想定できる。

なぜこの時に直治は自殺するのだろうか。先述したように一九四六年十二月二十日以降、十二宮家の臣籍降下の決定が各紙で報道されるが、そこには降下の時期が「明春二月ごろに決定した」<sup>二五</sup>ことも明記されていた。このような状況と照らし合わせてみると、直治は臣籍降下の決定により皇族が一国民になってしまうという報に衝撃を受け、「人間は、みな、同じものだ」という言葉に反発し、降下が行われる二月より前に「貴族」として自殺したのではないだろうか。

さいごに、かず子の発言について考えていく。

「新聞に陛下のお写真が出てゐたやうだけど、もういちど見せて。」

私は新聞のその箇所をお母さまのお顔の上にかざしてあげた。

「お老けになった。」

「いいえ、これは写真がわるいのよ。こなひだのお写真なんか、とてもお若くて、はしやいでいらしたわ。かへつてこんな時代を、お喜びになつていらつしやるんでせう。」

「なぜ？」

「だって、陛下もこんど解放されたんですもの。」

お母さまは、淋しさうにお笑ひになった。それから、しばらくして、

「泣きたくても、もう、涙が出なくなつたのよ。」

とおつしやつた。

私は、お母さまはいま幸福なのではないかしら、とふと思つた。幸福感といふものは、悲哀の川の底に沈んで、幽かに光つてゐる砂金のやうなもので

はなからうか。悲しみの限りを通り過ぎて、不思議な薄明りの気持、あれが幸福感といふものならば、陛下も、お母さまも、それから私も、たしかにいま、幸福なのである。(五)

これは、母の死の直前に交わされる母とかず子の会話である。なぜここで「陛下」が唐突に現れるのかという問題については、かず子たちが天皇の藩屏である皇族にきわめて近い階級として設定されていることを考えれば、違和感は減少するだろう。

そして、そのことを踏まえて「だつて、陛下もこんど解放されたんですもの」という台詞について考えたい。なぜ、ここでかず子は「陛下は」ではなく「陛下も」と自分のことを含めて述べているのだろうか。そして「解放」とは何からの解放を指すのだろうか。

皇族の動向や生活ぶりが戦後さかんに取りざたされたが、とくに『朝日新聞』では皇族が国民と同じような生活をすることを示す記事や、皇族自身がそれを望んでいることを述べる記事が積極的に掲載されている。

記事と写真(引用者注)「満員電車に三笠宮」『朝日新聞』一九四六年三月二十日付)を見た人々が口を揃へて「お疲れでせう」「大変でせう」「ガソリンはないのでせうか」などと三笠宮殿下に同情申しあげたさうだが、袖すりあはす電車の中でしみぐとした国民的感情にひたつてをられる殿下御自身はこの同情の言葉に御不満で「国民は皇族の気持を知らなすぎる、気楽になつて御満足でせうとか、社会學の勉強になりませうと言つて呉れた人は二人しかゐない」と嘆かれてゐるほどだ<sup>二三</sup>

『朝日新聞』はこの記事の見出しを「皇族の人間の解放」とし、「皇族の中から臣籍降下の希望を洩らされる方が出たり、経済學の勉強がしたいと進學の途を求められる若い宮様があつたりする事實は、確かに皇族方自らが人間の解放と生活的自由の獲得を要望されてゐる証左であらう」と述べている。翌日の「天声人語」でも「皇室や皇族方は、今までのやうな楽な生活は許されないが、人間の解放には新しい感激を覚えてをられよう。人間社会から隔離された生き方は、人間として決して幸福とはいはれなかつた」と、「人間に降りて」<sup>二四</sup>くる皇族に対し肯定的な姿勢がうかがえる。

津島美知子によれば、太宰は「新聞は、朝日新聞だけを購読していたが、細かく読む方で、新聞記事はよく作品にとり入れていた」<sup>二五</sup>と言う。このことから、傍線部に示した台詞は『朝日新聞』の記事に影響を受けたものであり、「陛下は」ではなく「陛下も」となっているのは、かず子自身もまた「ほとんど皇族に近いくらいの華族」という階級から解放され「人間に降りて」きたのだ、ということの意味しているのではないかと考えられる。

また、この場面では母とかず子の間に決定的な差異が生じている。それは「解放された」という台詞を聞き「泣きたくても、もう涙が出なくなつた」と悲しむ母に対して、かず子は解放されたことを「お喜びになつていらつしやる」と考えていることである。この場面があるからこそ、母が階級に殉じて亡くなる人物として描かれるのであり、階級から解放され、人間に降りることを受け入れたかず子が「庶民中の庶民」<sup>二六</sup>である上原と結ばれ、「こいしいひ

との子を生み、育てる」という「道德革命」へと向かう契機となるのである。

## まとめ

太宰が『斜陽』において主人公一家を華族階級に設定したのは、皇族の臣籍降下に影響を受け、「ほとんど皇族に近いくらいの華族」の物語を描くためであったと考えられる。

鳥居邦朗は『斜陽』の成立には太宰自身の生家の没落から発想した「日本版『桜の園』」のモチーフと、太田静子の日記から得た「恋と革命のために」という第二のモチーフがあるとする。そして第二のモチーフについては「人間復活の理念」とも言い換えられている。太宰は第二のモチーフにこそ「力を置きたかった」ものの、「作者自身が自信を持ち切れぬところがあ」り、未完成に終わってしまったのではないかと指摘している。<sup>二七</sup>

第二のモチーフについては、これまでかず子のモデルとされる太田静子が妊娠したために、七・八章の展開を書かざるを得なかったという否定的な捉え方をされることが多かった。

しかし太宰は『斜陽』において、第二のモチーフを積極的に描こうとしたのではないだろうか。だからこそ皇族を想定した物語を描き、かずに「人間的解放」の主題を重ね合わせたのではないかと考えられる。母や直治の滅びを描きたかったこともあるのかもしれないが、滅びを描くだけなら、構想時の設定どおり、地主階級でも良いはずである。太宰は「人間復活の理念」を描きたかったからこそ、『斜陽』の主人公を臣籍降下によって一国民となってしまう皇族に近い階級に設定したのではないだろうか。

ただし鳥居が指摘しているように、「結果は、まさに『斜陽』という題名が示すごとく、『桜の園』モチーフのほうが勝ってしまった」のである。

## 第三章 『斜陽』受容における『桜の園』の影響

はじめに

ここまで、当時の人々が上流階級の没落の物語を求めていたことを確認してきたが、そのような物語の代表作として戦前から人々に親しまれてきたものに、チェーホフの戯曲『桜の園』がある。

第三章では、戦前から親しまれ、戦後ブームを巻き起こしたとされるチェーホフの戯曲『桜の園』が、『斜陽』を特権階級の没落を描いた悲劇として受容する要因の一つであったことを指摘したい。

一では、『斜陽』発表前後に巻き起こったとされる『桜の園』ブームと、『桜の園』が日本に定着した際、没落階級の悲劇として受容されていたことを確認する。

二では、『斜陽』発表前後に上演された三つの『桜の園』および昭和三十三年に来日・上演されたモスクワ芸術座の演出・劇評から、『斜陽』発表前後においても『桜の園』が上流階級の没落を描いた悲劇として受容されていたことを示す。

三では、『斜陽』の当時の感想や本文に『桜の園』を彷彿とさせる箇所が見られることから、『桜の園』の受容が、『斜陽』受容に影響を及ぼしていると考えられることを指摘したい。

### 一・日本における『桜の園』の定着

三好行雄は、当時『斜陽』を読んで「熱狂した」理由について、「没落の実感が」「増幅された形でいきわたったことにあると指摘しているが、その例を示す一つとして、「桜の園」が上演されて多くの観客を集めている時代」であったことを挙げている。

また、安藤宏も「演劇界を中心に、実は広範なチェーホフ・ブームがこの時期の日本に巻き起こっていた」<sup>二</sup>と述べている。『斜陽』発表前後に巻き起こっていた「チェーホフ・ブーム」とは、具体的にどのようなものだったのであるのか。

例として、一九四五年十二月に上演された合同公演の『桜の園』が人気を博したことと、一九四七年九月に『安城家の舞踏会』が公開されたことの二点が考えられる。

合同公演の『桜の園』は、一九四五年十二月二十六日から二十八日にかけての三日間、文学座と俳優座、東京芸術劇場の三劇団による合同公演として上演された。<sup>三</sup>

この公演は、戦後初めて観ることのできた新劇であり、「六回の公演で九六〇〇人の観客を集めた」<sup>四</sup>という。一九四五年十二月三十一日付の『朝日新聞』に掲載された土方与志の『桜の園』随感」でも「超満員の有楽座における「桜の園」の初日の舞台を見ながら」<sup>五</sup>とあることから、この公演が人気を博し



ていたことがうかがえる。

また、一九四七年九月二十七日に公開された『安城家の舞踏会』は、第一章で述べたとおり評判を呼んだ作品であったが、この映画の脚本は『桜の園』を下敷きにして書かれたものである。

一九四七年十月五日付の『朝日新聞』に掲載された「映画評」には『桜の園』を翻案したのだが、ロパーヒンの有名なせりふをそのまま失敬しているのは失笑させられる」とあり、『桜の園』との関連性について言及されていることや、キャストに、合同公演の『桜の園』にも出演していた森雅之・滝沢修といった新劇の舞台俳優が組み込まれていることから、鑑賞者にとっても『桜の園』を連想させやすい作品となっていたと考えられる。

この時期は、チェーホフ・ブームがあつたというよりも、『桜の園』のブームがあつたと考える方がふさわしいかもしれない。

さらに、一九四七年六月から十月にかけて『朝日新聞』で連載されていた石坂洋次郎の『青い山脈』には「このごろ、私いつも一人で胸を悩ませていることがあるのです。それは敗戦後の社会の激変とともに、私の家を見舞った『桜の園』の悲劇についてです」<sup>六</sup>という文章が登場するが、これ以前に『桜の園』に関しての説明などがないことから、右の文章は読者が『桜の園』を知っていることを前提に書かれていると思われる。ここからも、当時『桜の園』が人々に親しまれていたことがうかがえるだろう。

そして、『斜陽』もまた、『桜の園』に影響を受けた作品の一つである。『斜陽』が『新潮』に連載されることが決まった晩、太宰は、『斜陽』の構想として「日本の『桜の園』を書くつもり」<sup>七</sup>と明言している。猪瀬直樹は、新潮社が『斜陽』を刊行しようとしたのは「『斜陽』というタイトルとチェーホフの『桜の園』のテーマに重ねてみたい、という本人の主張を、時宜になつてゐる、つまり商売になるな、と直観的に受け止めていた」<sup>八</sup>と指摘しているが、もしそうだとすれば、この指摘もまた『桜の園』が当時いかに浸透していたかを示すものだとと言えるだろう。

それでは、『桜の園』は一体どのような物語として人々に受容されていたのだろうか。初演から終戦までの演出を見ていこう。

本題に入る前に、『桜の園』の概要を確認しておく。『桜の園』は、チェーホフ四大戯曲の最後の作品となっている。梗概は次の通りである。

桜の園に、女地主であるラネーフスカヤが帰ってくる。娘アーニヤと共に五年ぶりにパリから戻ってきたラネーフスカヤを、兄ガーエフ、養女ワリーヤ、そして農夫あがりの商人ロパーヒンらが迎える。彼女は六年前、夫を亡くし、その半年後には愛する息子が川で溺れ死に、失意のうちに外国で愛人と暮らしていたのだった。

華やかな過去の夢に溺れ、現実を直視できない彼女の常軌を逸した散財ぶり、愛人との関係にもピリオドを打つべく故郷に戻ってきたのだが、すでに代々受継がれた領地も、美しい桜の園も、借金返済のために手放さなければならぬところまできていた。土地を別荘地として貸出せば、今の領地を手放さずに済む、とロパーヒンが熱弁を振るっても、ラネーフスカヤもガーエフも聞く耳を持たない。

競売の日、桜の園はロパーヒンの手に渡る。貧しい農夫の身分から桜の園の地主にまで出世したことに感動するロパーヒン。アーニヤは泣き崩れる母を、新しい人生を生きていこうと慰める。ラネーフスカヤはまたパリへ戻り、ガーエフ達もそれぞれこの土地を去っていく。

『桜の園』は、一九一五年七月に、近代劇協会により初演されているが、「舞台全体の出来栄は芳しくなかった」<sup>九</sup>という。その後、一九二四年五月に新劇協会によっても上演されているが、『桜の園』が観客に受け入れられ、定着したのは、一九二五年二月に築地小劇場で上演された米川正夫訳・小山内薫演出のものだと考えられる。

ここで、小山内薫が『桜の園』の内容をどのように解釈していたかを確認したい。『桜の園』の演出者として『演劇新潮』一九二五年十一月号<sup>一〇</sup>には、次のような記述がある。

序幕は帰郷の興奮に始まって、疲労睡眠の静寂に終る。

第二幕は野外の静寂な雑話に始まって、若い男女の熱情的な場面に終る。〔…〕

第三幕は売られる邸宅の舞踏会（暗い明かるさ。明かるい暗さ）に始まって、買った物の極度の興奮と買はれた者の極度の悲哀との交錯に終る。

第四幕は「見せない涙」「隠された悲哀」に終始する最後の静寂な一楽章である。作者はこの一幕に、詩人の限らない心優しさと、科学者の冷静な認識との交錯を見せてゐる。

この記述から、小山内が『桜の園』をラネーフスカヤに重点を置いた地主階級の没落の悲劇として解釈し、演出していたことがうかがえる。

また、『コレクシヨン・モダン都市文化』第三巻に収録されている水品春樹『築地小劇場史』に「往年モスコウ美術座で実地に研究して来た」「美事な演出」とあるように、小山内は、初めて『桜の園』が上演されたモスクワ芸術座での舞台を忠実に再現しようとしており、演出法も「殆ど総てモスクワ美術座の型である」<sup>十一</sup>と述べている。

実は、チェーホフ自身はこの戯曲を「喜劇」と名づけていたが、モスクワ芸術座はそれを悲劇として上演していた。チェーホフは妻に対し「なぜ僕の戯曲はポスタアや新聞広告でああまで執拗にドラマと呼ばれるのだらう？ネミローヴィチやアレクセーエフ【スタニスラフスキ】は僕の戯曲のなかに、僕が書いたものでないものを見ている。僕は彼らふたりが一度も注意ぶかく僕の戯曲を読まなかったと断言できる」<sup>十二</sup>という書簡を送っており、モスクワ芸術座の演出に対して不満を抱いていたことや、演出者によって「ドラマ」として解釈されていたことが読みとれる。

『築地小劇場史』には、「これは二月一日に初日を出したが、往年モスコウ美術座で実地に研究して来た、小山内薫の美事な演出と作品そのものの有名とによつて、連日大入の盛況で、遂に五日間日延のレコードをつくった。全くこれは画期的な成功」<sup>十三</sup>であったとあり、この上演が非常に好評であったことがうかがえる。

水木京太は「『桜の園』を見る」（『演劇新潮』一九二五年三月号）で、この公演について「私見に依れば今度の演出は」「主として莫斯科美術座のそれに倣つたものゝやうに思はれた」と述べ、モスクワ芸術座との関わりを指摘するとともに、「チェーホフの澄んだ憂愁の空気をいつも行き亘らせてゐたのが、

これ迄日本の「桜の園」に求められなかった尊い成功である」と評価している。水木が、近代劇協会・新劇協会の『桜の園』を見物していたことを踏まえて考えると、築地小劇場による上演こそが、『桜の園』を定着させたと考えてよいだろう。

また、水木は小山内に対し、「私達にチエホフらしい「桜の園」を見せてくれ、纏った芸術的感銘を与えてくれた」とも述べているが、ここから『桜の園』が地主階級の没落の悲劇という解釈が、すでに流布していたと考えられる。

一方で、小山内は「貴族階級（リアネフスカヤ）の没落、資本階級（ロパヒン）の台頭、無産階級（浮浪人）の予言、その間に於けるインテリゲンチヤ（トロフィモフ）の存在位置——かうした点に新しいエンファシスを置いた」「新しい演出を企て」たいとも述べている。<sup>14</sup>しかし、氏は一九二三年に急死してしまい、この演出が果たされることはなかった。

小山内の死後、戦争によってロシアの作品が上演不可となるまでの間、『桜の園』は三度にわたって公演された。そのうち二度は小山内の演出が用いられており、氏の追悼公演にあたる一九二四年二月の演出に携わったという青山杉作は、「小山内先生の演出台本と、記録に従って、出来る丈け前の演出の線から逸れないやうに勉めたに過ぎない」<sup>15</sup>と述べている。

また、一九三七年二月に新築地劇団によって上演された『桜の園』も青山杉作が演出を担当しているが、ここでは、「桜の園」の新しい世代を荷ふ人達」に重点を置き、「新時代の姿を確然と浮びあがらせやうとした」と試みたという。しかし、「その試みの不適當であることは、稽古の途上で気づいた」とも述べており、その解釈が観客に伝わったとは言い切り難い。<sup>16</sup>

つまり、一九二六年二月の公演をもって定着した演劇『桜の園』は、敗戦を迎えるまで地主階級の没落の悲劇として受容されていたことになる。一九三七年における青山の演出に現れているように、敗戦以降に上演された『桜の園』には、地主階級の没落の悲劇という受容から脱しようという試みが見受けられる。

しかし、悲劇としての受容に、明確に異なる解釈が示されるのは、モスクワ芸術座が来日し、「リアネフスカヤからロパヒンに重点を置く演出に変化し、さらにトロフィモフやアーニヤに力点をおいた演出を見せた」<sup>17</sup>一九五八年十二月の公演であると考えられる。

## 二・戦後の『桜の園』の解釈

そこで、次に、『斜陽』発表前後に上演された三つの『桜の園』および一九五八年に来日・上演されたモスクワ芸術座の演出・劇評から、それぞれの演出者による解釈と、それに対する評価を確認していく。

具体的な演出方法などについては、菅井幸雄『チエホフ 日本への旅』に詳細が記されている。ここでは大まかに『斜陽』発表時から、流行していたと考えられる一九五一年頃までの『桜の園』がどのような解釈を元に演出されたか、それがどのように受け取られたかを見ていきたい。

戦後からモスクワ芸術座の来日公演までにかけて、日本で上演された『桜の園』には、先述の一九四五年十二月末の合同公演による『桜の園』、一九四八

年五月に新協劇団によって上演された『桜の園』。そして、一九五一年一月の俳優座による『桜の園』の三公演がある。それぞれ詳細を追っていく。

まず、一九四五年十二月末の合同公演について確認する。

この公演が人気を博したことは前に述べた通りであるが、演出者の解釈はどのようなものであったのだろうか。

演出を担当した青山杉作は、『桜の園 演出後記』で「我々は、今度の合同公演に際しても初演と同一の脚本に拠り、同様の演出に従っている」としつつも、「私は、この戯曲の主流を作す憂色を和らげ、喜劇的転換と交錯とを軽妙にし、戯曲全体の振幅を広げて、厚味と、ゆとりを盛り込まうと計った。そして更に、いつとはなしに濃くなつてゆく悲劇色をも追放しようと願つたのである」<sup>一八</sup>と、悲劇としての受容を脱するという「狙ひ」を述べている。

ところが、当時の劇評を読んでもみると、小山内薫への言及が多いことに気づく。たとえば、土方与志は「先生の数々の功績の中最も大きなものの一つ」として「外国の、特にモスクワ芸術座の諸演出を実に克明に日本の舞台に移植されたこと」を挙げ、「今日の『桜の園』こそ先生のこの功績の果実であり、その発展され、より完成された姿である」<sup>一九</sup>と述べているし、一九四五年十二月二十九日付の『東京新聞』の「劇評」にも「小山内薫の十七年目の祥月命日の翌二十六日に『桜の園』をみる感慨——そうしたさまざまな思ひを込めて、まるで新劇祭かのようにはずんだ期待で開幕を待つ廊下の人々をみながら、わたしは胸が一杯になる」<sup>二〇</sup>と書かれている。

このことから、合同公演の『桜の園』は、戦前上演された小山内薫もしくは築地小劇場への感慨をもつて鑑賞されたものだと考えられる。基本的な演出を小山内氏のものに拠っていることや、役者が昔の顔触れに近いものであったことがこの傾向の要因であろう。

また、青山が語った「狙ひ」も、観客に伝わったとは考えにくい。旭季彦は『雑考チエーホフ劇』（新読書社、二〇〇三年）において、この公演が「小山内演出体系を継続したもの」であることを指摘した上で、「ぼくの印象では没落してゆく貴族階級に対して観客の涙を誘う悲劇的な『桜の園』になっていた」という感想を述べており、戦前同様、地主階級の没落を描いた悲劇として鑑賞されている。

『雑考チエーホフ劇』には、新劇合同公演パンフレットの表紙および本文ページの写真が収められており、『桜の園』の梗概が確認できるが、この梗概もまた、ラネーフスカヤを主軸にした悲劇として読めるような書き方がされている。

次に、一九四八年五月二十九日から六月八日にかけて、新協劇団によって上演された『桜の園』<sup>二二</sup>について考えていく。

これは、三越劇場新劇祭のトップを飾る公演として上演され、「演劇的にも興行的にも成功」<sup>二三</sup>したという。この公演の演出を担当した村山知義は、「これまでの感傷的上演を極力克服しようとした」<sup>二四</sup>と述べており、「第一幕でいかにも重たげにラネーフスカヤの旅の荷をよろめきながら運ぶ下僕たちの姿に象徴されるように、彼一流のリアリズムで貫」<sup>二五</sup>かれていたという。

劇評をみると、村山の演出の「目的はある程度達成され」<sup>二六</sup>ているとしながらも、俳優の演技については厳しい批評が多い。

また、旭はこの公演の感想を、「全く悲劇的な要素を洗い落してしまつて、没落してゆく貴族ラネーフスカヤやガーエフに、一掬の涙をも許さなかったが、その半面ロパーヒンと貴族との対立関係が強調されたため、悲劇的な要素はなくなった代わり、作者の意図したような喜劇でもなくなつてしまつてい

た」<sup>二六</sup>と述べている。

三点目に、一九五一年一月五日から二十八日にかけて俳優座によって上演された『桜の園』<sup>二七</sup>について確認する。

この公演の演出を担当した千田是也は、これまで三度の公演で演じたトロフィーモフの解釈の違いから、チェーホフの戯曲は「いつも愛されて来たといふものの、その愛されかたはいつも同じだったわけではない」と、時代によるチェーホフの受容の違いに気付き、「自分の感じたままのチェーホフ劇をポツポツ舞台にのせはじめ」るようになったという。<sup>二八</sup>

それでは、『桜の園』は千田によってどのように演出されたのだろうか。『桜の園』演出後記に『桜の園』の台本には、作者がちゃんと「四幕の Comedy」と書いている。どうもこれは喜劇として演ずるのが一番自然である。他に仕方はないのである」と書かれていることから、彼は『桜の園』を、チェーホフの名づけたとおり喜劇として演出しようとしたようである。

ただし、喜劇として上演するためには、「この芝居の人物なり出来ことなりをただリアルに演じ」るのではなく、「チェーホフの高さからのある特殊な照明を与えなければ」ならないとし、演出に工夫を重ねている。<sup>二九</sup>

この公演は「三越劇場での二十四日間・四十回の公演で二六五五三名の観客が入った」という。「三越劇場の客席数は五四三であるから、百二十パーセントの入りだった」<sup>三〇</sup>とあり、観客の支持を得ていたことがわかる。

そして、旭の感想に「今度の俳優座の『桜の園』はぼくの印象では、二つ（引用者注―一九四五年十二月に行われた合同公演の『桜の園』と一九四八年五月に行われた新協劇団の『桜の園』の中間くらいのところにおさまった感じのそれであった。そしてどうやら作者の意図したような喜劇を模索したかに感ぜられるそれであった」<sup>三一</sup>とあることから、演出の意図も伝わっていたものと考えられる。ただ、「模索」の状態であると指摘していることには注意したい。

また、千田は『桜の園』ともなれば、やれ文豪チェーホフの畢生の名作だの、世界的大戯曲ということばかり目先にちらついて役者が、堅くなるから始末が悪い」「せめてお客が気楽に見てくれれば、役者の肩のしこりも少しはほぐれるのであろうが、新劇十八番の『桜の園』ともなれば、お客の方も大変四角ばつてしまうらしい」<sup>三二</sup>と苦言を呈していることから、喜劇としての解釈は受け入れられたものの、当時は未だ地主階級の没落を描いた悲劇であるという解釈が一般的であったのではないかと思われる。

さいごに、一九五八年十二月六日に行われた、モスクワ芸術座の来日公演について確認しておく。

この公演は、スタニスラフスキーが「一九〇四年の初演当時、作者のチェーホフを、満足させえなかった」<sup>三三</sup>ことを反省し、ラネーフスカヤに重点を置いた地主階級の悲劇という演出ではなく、新しい世代のトロフィーモフやアーニヤの行動に焦点を向けた作品として、また、チェーホフの名づけたとおり喜劇として演出されたものであった。

そして、この劇を見た菅原卓は以下のように述べている。

モスクワ芸術座の舞台は、作者チエホフの要求する「コメデイ四幕」になりきっている。純正喜劇の味を満喫させるコメデイ・ドラマそのものであり、これは、日本の劇場内での、最初の画期的な出来事だといわねばなるまい。農ド（奴）解放に伴う地主階級ラネーフスカヤ夫人の没落を描いた悲劇という印象は、日本の「桜の園」で絶対権をもっていた。<sup>三十四</sup>

この文章は、モスクワ芸術座の『桜の園』が「コメデイ・ドラマ」として完成されたものであったと評価されたことを表すとともに、『桜の園』で「絶対権をもっていた」印象が、昭和三十三年においても、ラネーフスカヤの没落を描いた悲劇であったことをも示していると言えるだろう。

ここまで、一九四五年から一九五八年にかけて、四つの『桜の園』の解釈と劇評を確認してきた。

戦後の『桜の園』においては、戦前に定着したラネーフスカヤの没落を描いた悲劇という解釈とは違う、新たな解釈を提示する動きが日本の劇団によっても何度か見られたものの、喜劇という新たな解釈を明確に観客たちに示すことができたのは、一九五八年におけるモスクワ芸術座の来日公演まで待たなければならなかったと言えるだろう。

このことから、『斜陽』が発表された一九四七年においても、『桜の園』はラネーフスカヤの没落を描いた悲劇として捉えられていたと考えられる。

しかも、一九四七年九月十六日付の『朝日新聞』に掲載された「青い山脈」に「預金は封鎖される、財産税は課される、土地は二束三文に買い上げられてしまう。」「」「桜の園」の悲劇は、私の家だけでなく、現在の日本では、到る所に生じているのではないかと思います」<sup>三十五</sup>とあるように、一九四七年前後の日本の状況と『桜の園』を重ね合わせている傾向が見られる。

『斜陽』が発表された一九四七年は、ここまで言及してきた期間の中でも、とくに『桜の園』が地主階級の没落を描いた悲劇として受け入れられやすかった年であったと考えられる。

### 三 『斜陽』受容への影響

それでは、そのことは『斜陽』の受容にどのような影響を与えたと考えられるだろうか。

『百年読書会』<sup>三十六</sup>で発表された『斜陽』の感想を見てみると、興味深い傾向がうかがえる。

〈改めて『斜陽』を読んでみた。ところが、私の記憶にあるストーリーは、お母さまが二人に見守られて亡くなる場面で、あとが切れているのである。これはどうしたことか〉

〈斜陽族という言葉が流行していた頃読んだ時は、優雅なお母さまを主人公として読んだ。これが『斜陽』かと思っていたが、今読み返して主人公は

かず子だったことに気づいた」

再読によつて、最後の貴族であるお母さまから、自殺した直治やシングルマザーとして生きるかず子に焦点が移った、という声がじつに多かったのです。三十七

これらの感想は、それぞれ七十代の女性によるものであり、初読時はいずれも『斜陽』および「斜陽族」という言葉が流行していた一九四八年前後だと思われる。

同様の感想が「じつに多かった」とあることから、当時の人々の多くが、語り手であるかず子ではなく、かず子の母を主人公として読む傾向にあったと考えられる。

確かに、当時においては、「日本で最後の貴婦人」<sup>三十八</sup>として描かれたかず子の母こそ、特権階級の没落の物語を求めていた人々の受容に沿った存在であると考えられる。

しかし、『斜陽』の語り手が一貫してかず子であることや、母の死後も、かず子の上京や弟である直治の自殺など、衝撃性のある出来事が描かれているにもかかわらず、その展開を無視する読み方が「じつに多かった」ことには、かず子の母が人々の受容に沿っていたこと以外にも何か理由があるのではないだろうか。

そこで考えられるのが、かず子の母を、読者が『桜の園』のラネーフスカヤと重ね合わせて読んでしまったのではないかということである。

太宰自身、『斜陽』構想時に日本の『桜の園』を書きたいと述べていたことは前述したとおりだが、柳富子は『斜陽』と『桜の園』の比較を通して、「おそらく太宰は、ラネーフスカヤに滅びと美とを見いだし、それを分析的に理解し、かず子の母のイメージの中にとり入れたに相違ない」と述べている。<sup>三十九</sup>確かに、柳が指摘するように、「経済観念が全然ない人間として描かれている点」、「貴族を意識せぬのびのびとした美しさ、気取りのなさ」の強調、「氣立てのやさしさ」という資質を付与している」ことなど、両者の共通点は多い。

また、『斜陽』本文には以下のような記述がある。

「このお別荘を、お売りになるとかいふ噂を聞きました。」

師匠さんは、意地わるさうな表情で、ふいとさうおつしやいました。

私は笑ひました。

「こめんなさい。桜の園を思ひ出したのです。あなたが、お買ひになつて下さるのせう？」

師匠さんは、さすがに敏感にお察しになつたやうで、怒つたやうに口をゆがめて黙しました。

或る宮様のお住居として、新円五十万円でこの家を、どうかうといふ話があつたのも事実ですが、それは立ち消えになり、その噂でも師匠さんは聞き込んだのでせう。でも、桜の園のロパーヒンみたいに私どもに思はれてゐるのではたまらないと、すっかりお機嫌を悪くした様子で、あと、世間話を少ししてお帰りになつてしまひました。(四)

右の文章のように『桜の園』を直接挙げているだけではなく、チェーホフの他の戯曲への言及や、作家の上原を手紙で「M・C」(マイ・チェホフ)と呼ぶなど、『斜陽』本文にはチェーホフおよび『桜の園』を彷彿とさせるような言葉が散りばめられており、読者が『斜陽』から『桜の園』を連想することは容易だったのではないかと思われる。

これらのことから、当時の読者は『斜陽』本文や母の描写から『桜の園』らしさを読み取り、『斜陽』をラネーフスカヤに似た「お母さま」の没落を描いた悲劇として受け取ってしまったのではないかと考えられる。そしてそのことが、母の死後の展開を無視する傾向を生みだしたのではないだろうか。

#### まとめ

第三章では、戦後から『斜陽』連載前後の時期を中心に、『桜の園』が上流階級の没落を描いた悲劇として受容されていたことを明らかにした。また、『斜陽』本文から『桜の園』を思わせる記述が存在することを確認した。

『斜陽』は「太宰治の名前をはじめ一般に印象つけた長編」<sup>四十</sup>であり、当時の読者の多くは、太宰治という作家に関する情報やイメージを持っていなかったと思われる。『斜陽』は、チェーホフ・プームの最中にいた読者たちによって、『桜の園』の影響を受けた一作品として捉えられ、ラネーフスカヤに似た母の没落を描いた悲劇として受容されてしまったのではないだろうか。



## 第二部 戦後の価値観をどう受け入れるか―源氏鶏太『三等重役』（一九五二年）―

### 第一章 「三等重役」のイメージの変遷

はじめに

第二部では、一九五二年度のベストセラー小説であり、『三等重役』という流行語を生み出した源氏鶏太『三等重役』について考察したい。

源氏鶏太は今ではほとんど知られていないが、一九四〇年代後半から七〇年代にかけて広く活躍していた作家である。サラリーマンを主人公に据え、会社の中の人間関係を中心に描いた小説を世に広めた、いわゆるサラリーマン小説の第一人者であると言える。――

このジャンルは日本独特のものであるとともに、源氏作品の世界観が弘兼憲史『島耕作』シリーズに代表される今日のサラリーマン漫画の起源となっているという指摘もあることから、日本の文学・文化を語る上において重要な作家であると思われる。

『三等重役』の分析から、流行語化・ベストセラー化した要因として三つの理由が浮かび上がってきた。

それは源氏が「三等重役」という言葉のイメージをマイナスからプラスのものへ変化させたこと、『三等重役』において源氏が独自の戦後派重役像を生み出したこと、そして独自の戦後派重役像を生みだすにあたって重要となる桑原社長の性規範が、純潔教育の大切さを訴え始める当時の状況において理想的なものであったことである。

第一章では、その中から最初に挙げた「三等重役」という言葉のイメージの変遷について論ずる。

一では、『源氏鶏太の略歴と『三等重役』の概要、『三等重役』という言葉の意味を確認する。『三等重役』という言葉が初めて使われた段階では戦後派重役が自称として用いていたのに対し、流行語となった段階では、戦後派重役を指す他称に変化していることを指摘する。

二では、『三等重役』という言葉が初出した『艶福物語』の分析をし、『三等重役』の印象を確認する。『艶福物語』では戦後派重役自らが「一等重役」や「二等重役」より下であることを強調するための蔑称として用いられていることを示す。

三では、『艶福物語』を経て『三等重役』を連載するにあたって、『三等重役』という言葉のイメージにどのような変化が加えられたかを見ていく。題として採用することによって自称から他称へ変化するとともに、源氏が意識的に「三等重役」という言葉がもっていたマイナスのイメージを薄めていることを指摘する。

四では、『三等重役』における「三等重役」の印象を分析する。『三等重役』という言葉に蔑みの要素があることは否定しないものの、その要素がでさうる限り薄められていること、戦後派重役の代名詞として用いられている傾向にあることを確認する。また、『三等重役』の比較対象が常に「四等か五等」の

「番外重役」であり、作品内では「三等重役」が一番上の存在として描かれていることを指摘する。

これらにより、『三等重役』では「三等重役」という言葉に積極的な意味が付与されており、それに伴って『三等重役』の戦後派重役・桑原社長が「名実共に立派な社長」<sup>三</sup>として描かれていることを示したい。

## 一・「三等重役」という言葉の印象

冒頭でも述べたが、現在源氏鶏太の名前を記憶している者はほとんどいないと言ってよいだろう。そこで、分析に入る前に源氏鶏太の略歴と『三等重役』の概要を確認しておきたい。

まず、源氏鶏太の略歴を主に『読売新聞』夕刊で連載されていた「出世のころ」<sup>四</sup>を元に確認していく。本稿ではとくに『三等重役』発表までを詳細に述べる。

源氏鶏太は一九一二年に富山市で生まれる。一九三〇年に県立富山商業高校を卒業して大阪の住友合資会社に入社し、会計課に勤務。戦後住友本社がGHQの財閥解体指令によって解散を命じられた際、「長年の経理事務の経験を買われて」残務処理を担当した。

一方で「十二、三歳のころから」小説や詩を創作しており、一九三五年には「あすも青空」を『サンデー毎日』の大衆文芸に応募、佳作入選している。一時期創作から離れたものの、戦後「生活のあまりの苦しさに懸賞金がもらえたらという気持ち」もあり、雑誌への投稿活動を再開する。

一九四七年『オール読物』に「たばこ娘」を投稿、掲載が決定し、以後会社勤めをしながら作家活動をするようになる。一九四九年『スタイル読物版』に「浮気の旅」を発表、初めてサラリーマンの世界を描き「自分の鉾脈を発見したような気がした」という。

一九五一年「英語屋さん」「颱風さん」「御苦労さん」により、第二十五回直木賞を受賞。その直後に『サンデー毎日』に連載された『三等重役』は多くの流行語を生むなど人気を博し、一躍人気作家になるとともに、サラリーマン小説の第一人者となった。一九五六年作家活動との兼業に限界を感じ、会社を退職。十返肇は、退職を機に「初期のサラリーマン・ユーモア小説から次第に脱皮し」「虚無的な感じがより強く漂いはじめた」<sup>五</sup>と作風の変化を指摘する。

また、晩年には「従来の明朗ユーモアに飽き足らなくなり」<sup>六</sup>ブラックユーモアを志向、現世に悔いを残して死んだサラリーマンの幽霊など、幽霊・妖怪が登場する小説を多数書いた。

次に、『三等重役』の概要を確認する。

『三等重役』は『サンデー毎日』一九五二年八月十二日号から翌年四月十三日号にかけて連載された小説である。『三等重役』の連載によって『サンデー毎日』の発行部数は「三十万部そこそこ」から「八十万部近く」<sup>七</sup>となり、一九五一年十二月に発行された『三等重役』が一九五二年度全国ベストセラーズ七位になる<sup>八</sup>など、当時爆発的な人気を誇った作品である。

全三十五話から成る一話完結型の連載小説で、公職追放された奈良前社長に代わり思いがけず社長の座についた桑原さんと老獺な人事課長・浦島さんを中心に、社内や家庭内の人間関係を通してサラリーマン生活の哀歓を描いた作品となっている。

源氏鶏太のサラリーマン小説では仕事についてはほとんど描かれず、主に社内における人間関係を描くことで成り立っており、『三等重役』もそれに該当する。桑原社長は人事課長の浦島さんとともに社員同士を結婚させることに励み、最終的には十一組の夫婦の仲人をする。<sup>九</sup>

また、桑原社長が女性から誘惑されるも肉体関係を結ぶことなく終わるという浮気未遂のエピソードも四話挿入されるなど、『三等重役』では恋愛や結婚、浮気といった男女関係の話題に紙幅を費やしている。ボーナスやへそくりに関する夫婦間での攻防も描かれるなど、社内および家庭内の人間関係を通して、サラリーマン生活の哀歓を描いた作品となっている。

それでは最後に「三等重役」という言葉の意味を確認する。

『日本国語大辞典』には「昭和二六年（一九五二）、源氏鶏太作の小説『三等重役』から広まったことば」<sup>十</sup>であると書かれている。確かに『三等重役』によって流行した言葉であるが、源氏作品で「三等重役」という言葉が最初に用いられたのは『サンデー毎日別冊』で発表された『艶福物語』である。『艶福物語』には「三等重役」の定義が次のように説明されている。

「重役にもいろいろあるんだ。僕なんか、まア、三等重役といふところだ。」

「あら、重役さんにも汽車みたいに等級があるの？」

「それがあるんだよ。一等重役といふのは親の代からの資本家で、生れながらの重役だ。ところが、平社員時代から将来を約束されてあて、所謂幹部教育を受け、重要ポストを渉り歩いた結果重役になったやうな人は、まア二等重役だ。戦争前の重役はたいていこれで、曾和さんなんかこれにあたる。」

「ちやア、三等重役といふのは？」

「……………」

「ねえ、いうてよ。」

横山さんはいひたく無かった。しかし、こゝまでいつてしまったからには、三等重役の説明だけを省略できるもので無い。横山さんは憮然とした面持でいった。

「戦争に負けたおかげで、思ひがけなく浮び上ることの出来た僕なんかをいふのだ。したがって、重役とは名ばかりで、収入は社員当時とそんなに変らんのだ。」

ここで説明されているように「三等重役」とは、公職追放の影響によって重役が足りなくなったことで浮かびあがることの出来たサラリーマン重役を指す。この言葉は源氏の造語ではなく、「引用者注―源氏の勤める」会社の三等重役である高橋淡氏が、自ら莞爾としてそれを名のり、私に教えてくれた」<sup>±</sup>言葉であると言う。資本家にあたる「二等重役」、エリート社員の「二等重役」の下に該当する重役であるために「三等」という言葉が用いられている。『日本国語大辞典』では「経営はまかされていても資本の実権はない重役」とあり、基本的な意味は今と変わらない。しかし、「艶福物語」や源氏が教えてもらった時点での「三等重役」が、サラリーマン重役自身が用いる言葉（自称）であるのに対し、『日本国語大辞典』に掲載された二つの用例では、「三等重役」ではない立場の人間がサラリーマン重役を指す言葉（他称）として使用されている。

『現代用語の基礎知識』一九五四年版には「小会社のなり上り重役や、サラリーマン重役などを皮肉るのに三等重役を名をもつてし」<sup>±</sup>たとあり、自称から他称への変化が一九五三年の段階で生じていたことがわかる。

自称から他称へという変化は「三等重役」という言葉のイメージを考える上で重要なものだと考えられるが、一体どの段階で変化したのだろうか。分析の結果、流行語化の過程で変化したのではなく、『三等重役』連載時に源氏が意識的に変化させていることが明らかになった。ここからは、時系列に沿って「艶福物語」および『三等重役』における「三等重役」の印象の変遷を見ていきたい。

## 二、「艶福物語」における「三等重役」

ここでは「艶福物語」で「三等重役」がどのような言葉として使われているか分析する。「艶福物語」における「三等重役」は、「二等重役」と自分を比較し自嘲するための言葉として機能していると言える。

分析に入る前に、「艶福物語」の内容を確認しておく。

パージの影響で思いがけず重役に就いた横山文平さんは、得意先のK商事から招待された赤坂の待合で芸者・豆太郎に再会する。十年前横山さんが接待係をしていた際、豆太郎に頼まれて重役の曾和さんとの仲をとりもつた過去があったが、曾和さんとは終戦と同時に切れて、「女中と芸者の合の子みたいな勤め」をしているという。

横山さんは豆太郎に言い寄られ、月五千元で世話することになる。毎週土曜の午後を豆太郎のアパートで過ごし、かつて彼女が曾和さんに仕込んだという小唄の練習に励む日々を送る。

「曾和さんの女であつた豆太郎に惚れたこと」で「重役としての自信」が付き、「曾和さんに似て」きた横山さんであつたが、公職追放解除によつて曾和さんが戻ってくることが決まると、豆太郎に「あなたとの仲は今日かぎりにして、曾和さんにあたしをとりもつて」と頼まれる。

曾和さんの祝賀会の日二人の仲をとりもつことを決めた横山さんは、酔つた勢いで豆太郎から習つた小唄を披露する。横山さんは十年前と同じように、曾和さんを豆太郎が待つ部屋へ案内するが、「もう、わしのやうな年寄の出る幕ではなささうぢやないか。あとは君にまかせる」と、「いかにも曾

和さんらしい、わッはッはッ、と豪傑な笑ひ声」を残して去っていく。それを見た横山さんもまた、「こんな女との浮気はごめんだ」と、思わず「わッはッはッ」と笑ってしまふのであった。

「艶福物語」では「三等重役」という言葉が六回用いられている。一覧は次の通りである。

- ①「重役にもいろいろあるんだ。いつてみれば、僕なんか、まア、三等重役といふところだ。」(横山さん)
- ②「ちやア、三等重役といふのは？」(豆太郎)
- ③しかし、ここまでいつてしまつたからには、三等重役の説明だけを省略できるもので無い。(語り手)
- ④「どうせ、わしは三等重役だよ。」(横山さん)
- ⑤ここで本物に復帰されては、またもとの真正正銘の三等重役に戻るよりしかたがない。(語り手)
- ⑥まるで、あなたは所詮三等重役よ、といはれたやうな気持だった。(語り手)

(丸括弧内の人物は話者を示す)

「艶福物語」における「三等重役」の使われ方には三つの特徴がある。一点目は「三等重役」自身が使う言葉であることだ。①と④の話者はこの物語の「三等重役」・横山さんである。また、「艶福物語」の語り手は横山さんと非常に密着しており、いずれも横山さんの気持ちを代弁していることから、③⑤⑥も横山さんが話者であると考えてよいだろう。

二点目は必ず否定的な意味合いで用いられることである。豆太郎が「三等重役」の意味を問う②を除き、「三等重役」という言葉は常に否定的な言葉として用いられている。

一つずつ説明していくと、①は「僕なんか」と自分自身を軽んじていることから、「三等重役」が評価の低い重役を意味する言葉であることがわかる。③では「三等重役」の説明を躊躇する様子が描かれており、「三等重役」が「一等重役」「二等重役」と比較した際に説明し難い意味を持つ言葉であることがわかる。また、④⑥は否定的な意味の語句を伴って用いられることの多い「どうせ」や「所詮」という副詞とセットになっている。最後に⑤では「本物」が「復帰」した場合に「もとの真正正銘の三等重役に戻る」と述べており、「三等重役」が本物の重役と見なされていないことがわかる。

ここで注目したいのは、「艶福物語」では「三等重役」という言葉自体に否定的な意味合いが多く含まれており、それを強調するための言葉が伴っていることだ。後述するが『「三等重役」では、「三等重役」に対して否定的な評価・印象を述べるといふ形がとられている。

そして三点目は一すでに述べたように、「二等重役」「二等重役」の下に該当する言葉であることだ。

「艶福物語」の戦後派重役である横山さんは、常に元重役の曾和さんと自分を比較し、曾和さんに追いつこうとする人物として描かれているが、「艶福物語」

において「三等重役」の比較対象は常に「二等重役」であり、「三等重役」という言葉は自らがそれより下であることを強調するための蔑称として用いられていると言える。

### 三.『艶福物語』から『三等重役』へ

「艶福物語」で用いられた「三等重役」という言葉と題材に注目したのは当時『サンデー毎日』編集長をしていた辻平一であった。辻は『文芸記者三十年』（毎日新聞社、一九五七年）の中で『三等重役』について次のように回想している。

〈この題名は、いかにも、ドギツイ感じがした。しかし、世間には当時、そうよんでもふさわしいような、大物は追放されトタンに重役に昇進したサラリーマン重役がすくなくなかった。どこの会社にもいることだった。これがサラリーマン諸君の、興味の対象になっていることは、充分に予想された。だから、いくらかドギツイけれども、「三等重役」という題名を、源氏さんに承知してもらった。〉

〈重役にあてつけがましい感じがしたのは、私とて、源氏さんと、変りがなかった。

「いやな題名だね」

といわれるかもしれないし、その時のことも考えておく必要があるかもしれない。

「うちの社には、三等重役なんか、ひとりもいらつしやいませんよ」

という返事ぐらいでは、釈然とはしないだろうから。しかし、さすがに、この題名に文句をつける重役はいなかった。〉

辻は一話完結型の物語にすることと題を『三等重役』とすることを条件に、源氏に『サンデー毎日』への連載をもちかける。二つの条件に対して源氏は次のように思ったという。

私は、やってみようと思った。が、「三等重役」という題は困るといった。かりにも私は、現職のサラリーマンである。そういう人間が重役の上に三等をつけるなんて身のほど知らぬということになる。「…」『艶福物語』のときには、この言葉なんの反響もなかった。が、辻平一氏は、これをおぼえていたのだ。私は、いろいろと考えたあげく、あえて「三等重役」でいこうと決心した。そのことでしかれたら会社をやめればいいのである。作家にならそれぐらいの決心が必要だと思った。<sup>十三</sup>

これらの回想から、源氏も辻も「三等重役」という言葉に否定的な印象を抱いていることがわかる。源氏が勤める住友系の不動産会社の重役のみならず、

当時毎日新聞社の社長であった本田親男もサラリーマン重役にあたることから、二人が相当な覚悟を持ってこの言葉を題にすることを決定した様子がうかがえる。

「艶福物語」で「なんの反響もなかった」にもかかわらず、源氏がこの言葉を題とすることを躊躇したのは、使用者の変化が言葉の性質をも変化させてしまうことに気付いたからだろう。

題にするということは作者が「三等重役」という言葉を使用することであり、重役自身が自嘲気味に使う自称から重役でない人間が重役を非難する他称へと変化してしまう。自嘲から皮肉への変化を感じ取ったからこそ、「三等重役」という言葉を用いることに相当な覚悟を必要としたのではないだろうか。そして源氏は『三等重役』を連載するにあたり、「三等重役」の定義を変更している。『三等重役』連載開始の一週間前に発表された作者の言葉には次のように書かれている。

三等重役といっても決して蔑称したのではなく、たとえば三等席のように大衆に一番親しみのある、戦後派の重役さんの意味です。勿論、急に出世したので、ちよつとぐらい困った点があるかもしれませんが――。十四

「急に出世した」「戦後派の重役」という基本的な意味は変わらないものの、源氏は「三等重役」という言葉が蔑称であることを否定している。さらに、程度の低さを表す言葉として用いられていた「三等」に親しみやすさというプラスの意味を付加している。

井上ひさしは当時の状況として「x等」という言い方が日本人に親しい言い方だったこと、マッカーサーが記者団に語った「日本は四等国に転落した」という言葉によって「四等国」が流行語になっていたことを挙げ、「四等から三等への格上げ」<sup>十五</sup>を感じさせると述べている。「x等」という言葉への親しみを利用して源氏が「三等重役」にプラスの意味を加えたことは前述したが、「四等国」という言葉が流行・浸透していたことによって、プラスの意味が付加されたのではないかと思われる。

ここまで、「艶福物語」から『三等重役』へと移るにあたって、源氏が「三等重役」という言葉が持っていた否定的な印象を薄めるとともに、積極的な意味を加えていることを確認した。最後に、『二等重役』では「三等重役」という言葉がどのように用いられているのか確認していく。

#### 四.『二等重役』における「三等重役」

『二等重役』では計十回「三等重役」という言葉が使われている。一覧は次の通りである。

①この三等重役め、といへ返してやりたいくらいであった。(浦島課長・第一話)

②「何んだい？また、うちの三等重役さんが、訳の分らんことでも云いだしたのかい？ 放つとけばいゝよ。」（浦島課長・第五話）

③「いやいや、浦島さん。あなたはうちの社長のことを、いつも三等重役なんておっしゃるが、社長が三等なら、ほかの重役たちは四等か五等、いくなれば番外重役ですよ。」（若原君・第五話）

④かつて秘書の若原君から、社長が三等重役なら、ほかの重役たちは四等か五等、いくなれば番外重役である、と酷評されたその番外さんたちは、（語り手・第十四話）

⑤「ほう、三等重役、東京を罷り通る、というところだな。」（浦島課長・第十四話）

⑥「どうも、うちの三等重役には困るね。」（東京の会社員・第十四話）

⑦「三等重役って、何かね。重役にも、東京では汽車みたいに等級があるのかね。」（桑原社長・第十四話）

⑧「うん、社長か。要するに、三等重役さ。何んにも取得がないね。つまらん男だ。」（塩野君・第二十三話）

⑨「うん、桑原社長かね。あれは要するに、三等重役さ。何んにも取得が無いね。つまらん男だ。」（略）（野見山君・第二十三話）

⑩「三等重役、バンザイ」（南海産業社員・第三十五話）

（丸括弧内は話者と話数を示す）

『三等重役』における「三等重役」の特徴を、「二」との比較に基づき三点挙げる。一点目は『三等重役』の戦後派重役である桑原社長より下の立場の人物が使っていることだ。

『艶福物語』から『三等重役』へと移るにあたり、「三等重役」という言葉が自称から他称へと変化したことは前述したが、その際に、どの立場の人物が使うのかという問題が発生する。『三等重役』では④と⑦を除き、桑原社長よりも下の立場である課長や平社員によって用いられている。重役自身が使っていた「艶福物語」と違い、社長自身は「三等重役」という言葉を知らないという設定（⑦）になっている。

二点目として、否定的な要素が薄まっていることが挙げられる。「艶福物語」では単体で否定的な意味を持ち、それを強調する言葉が補われていたが、『三等重役』では「三等重役」単体で否定的な要素を強く持つものは①の「この三等重役め、といい返してやりたいくらいであった」という文章のみであり、②「訳の分らんことをいいだす」⑤「罷り通る」⑥「困る」⑧⑨「なんにも取得がないね。つまらん男だ」のような否定的な評価を示す言葉が後につくことで否定的な印象となまっていることがわかる。

三点目は四等・五等のような「番外重役」の上に該当する言葉として使われることである。「艶福物語」と『三等重役』の二作で「三等重役」の違いが決定的なのは、誰と比較するのかという問題である。「艶福物語」が一等・二等に該当する重役と比較されていたのに対し、『三等重役』では③④のように四等・五等といった「番外重役」と比較され、常にその上に該当する言葉として使われている。『三等重役』にも「艶福物語」で挙げられたような一等・二等



に該当する戦前派重役は登場するが、彼らが「〇等重役」と表現されることはない。

また、『二等重役』内で唯一「三等重役」の定義が示されるのは、第十四話「東京を罷り通る」での「それはですね、社長。汽車だけは一等に乗らんと承知しないくせに、実力は三等並みの重役のことなんです。東京に多いんです」<sup>十六</sup>というセリフのみである。

これは「艶福物語」と異なる定義であるとともに、その説明を聞いて若原君に小突かれる浦島さんの様子から先の説明とは違う意味が存在することを表している可能性が高いが、正確な定義が『三等重役』で述べられることはない。正確な定義を述べるには「二等重役」「二等重役」の説明が不可欠であるが、『三等重役』ではあえてそれを避けているのではないだろうか。三等重役が蔑称として成り立つような場面・表現を回避していると言えるだろう。

ここまで見てきたように、『二等重役』における「三等重役」は、その言葉自体に蔑みの要素があることは否定しないものの、その要素はできる限り薄められ、大衆と同じ立場から誕生した戦後派重役を象徴する他称として用いられている。

「三等重役」の比較対象は常に「四等か五等」の「番外重役」であり、物語内では「三等重役」が一番上の存在として描かれている。「平取締役」<sup>十七</sup>であり曾和さんに敵うことのない「艶福物語」の横山さんに比べ、桑原さんは社長という設定であり、他社の戦前派重役にも慕われる存在として描かれている。このことから『三等重役』では戦後派重役自体を優れた存在として描いていると言える。

『二等重役』では「三等重役」という言葉に積極的な意味を付与しており、それに沿った重役像を描いているのではないだろうか。

## まとめ

第一章では「三等重役」が初出した作品である「艶福物語」と、その物語をきっかけに誕生した『三等重役』における「三等重役」という言葉の印象を比較した。

「艶福物語」で戦前派重役と比較した際の蔑称として用いられた「三等重役」は、否定的な要素をできる限り排除して積極的な意味を加え、戦後派重役を象徴する他称として用いられることによって当時の人々に広く用いられる言葉へと変化した。

『サンデー毎日』では一九五二年二月十四日号から「三等席」というタイトルで劇評の連載を開始しているが、このことは『三等重役』の人気ぶりを表すとともに、『サンデー毎日』が親しみやすさを強調する形で「三等」を用いていることを示すものだと言えるだろう。

また、「三等重役」という言葉のイメージが変化したことによって、源氏の描く戦後派重役像も変化した。第三章および第四章で詳述するが、「艶福物語」や『二等重役』では妾を持つことが重役のステータスであるという価値観が示される中、桑原社長は四人の女性から誘惑されながらも肉体関係を結ぶことはなく、家庭を大切にす愛妻家として描かれる。

『二等重役』では、浮気を遂げられないということを通して桑原社長の純潔性が強調されるが、性道德の頹廃から純潔教育の重要性が叫ばれ始めるようになった当時の状況において、桑原社長のような男性像は好意的に受容されたと考えられる。

## 第二章 流行語「恐妻」について

はじめに

源氏鶏太『三等重役』をきっかけに流行した言葉には、「三等重役」の他に、妻に頭の上がらない夫を意味する「恐妻家」がある。

辞典や同時代評において、「恐妻」という言葉自体がこの頃につくられたという考えが確認できるが、強い妻とその妻を恐れる夫というモチーフが昔から多くあるにもかかわらず、「恐妻」という言葉が一九五〇年代に初めて出てきたというのは不思議である。

そこで第二章では、「恐妻」という言葉がいつ頃出てきたかを再検討する。今回は調査の範囲が限られており、言葉の起源がどこにあるかははっきりと示すことはできなかったが、調べた結果、一九二四年の時点で使われている言葉であることが確認できた。また、戦前から使われていた「恐妻」と戦後に使用・流行した「恐妻」の用例をそれぞれ詳しく見ていくことで、戦前の「恐妻」と戦後の「恐妻」の差異がどこにあるかを考えたい。

一では、辞典や同時代の資料を通して、「恐妻」という言葉が流行した際に発明されたものと思われるというのが通説であるものの、流行時においても新語か否かという点については曖昧であり、再検討の必要性があることを示す。

二では、戦前に「恐妻」が使用された三つの用例を示し、先行研究において最も古いと考えられていた一九三八年以前より既に使われていたこと、戦前の「恐妻」は妻側の問題（妻の恐ろしさ）が明確であるのが特徴であり、恐ろしい妻であるが故に妻に逆らうことができない夫を「恐妻家」「恐妻病」と表していることを指摘する。

三では戦後の用例を示し、戦後の「恐妻」は妻に問題が設定されるのではなく、夫の後ろめたさにより妻を恐れるという意味合いに変化していること、妻を大事にする夫を指す「愛妻家」という言葉と表裏一体のものとして用いられていることを示す。

### 一・「恐妻」という言葉の起源

宮本小次郎「恐妻・愛妻家列伝」(『サンデー毎日』一九五二年十二月二十八日号)によれば、「一九五二年の日本で一番世間をにぎわしたものは「恐妻」であり、「新聞、雑誌映画、放送、レコード等々日本のあらゆる分野」で流行したという。

また、井上ひさしは『ベストセラーの戦後史』(『文藝春秋』一九八八年一月号)の中で『三等重役』について、「恐妻家の生態をこれほど微細にわたって描出した小説は初めてだった」と、「恐妻家」の流行に『三等重役』が大きく貢献したことを述べている。

確かに、後に検証するように「恐妻」という言葉は『三等重役』連載中の一九五二年三月頃から新聞で多く使われるようになる。さらに映画「続三等重役」(一九五二年九月四日公開)の主題歌で「とかなんとかおっしやって やっぱり奥様こわいんデしょ」のリフレインが印象的な「恐妻節」(三木鶏郎作詩)の流行や、「恐妻時代」(一九五二年十月三十日公開)、「恐妻キュット節」(一九五三年五月二十七日公開)といった「恐妻」を冠した映画が公開される

のもこの頃である。これらのことから、「恐妻」という言葉の流行が一九五二年にあったこと、「恐妻」が流行するきっかけとなった作品が『三等重役』であることが読み取れる。

ただし、尾崎秀樹が「恐妻」の流行と『三等重役』の関わりを指摘しつつも「恐妻族」という言葉の発祥については未調査<sup>二</sup>であると述べるように、言葉の流行と発祥は別の問題である。

「恐妻」という表現が用いられることはないものの、妻を恐れる夫を題材にした話は狂言や落語においても確認でき、流行した一九五二年以前からその言葉が存在した可能性もあると思われる。しかし、現在刊行されている流行語辞典および辞典では、流行時にできた言葉であると考えられているようである。

たとえば、米川明彦『明治・大正・昭和の新語・流行語辞典』（三省堂、二〇〇二年）では「恐妻」という言葉は一九五二年の項に載っている。

大宅壮一の造語。この年、大宅のもとに群馬県の青年団幹部が訪れ、群馬県を象徴するような観光名物を考えてほしいと依頼した。大宅は親友で同県出身の阿部真之助（のちのNHK会長）がいつも妻にいじめられていることと、同県がかあ天下で有名なことから、「恐妻碑」を建立することを提案した。

米川は参考資料として先に引用した「恐妻・愛妻家列伝」を挙げている。そこに「恐妻碑」のエピソードが掲載され、大宅壮一が「この騒ぎの火つけ役であり、勧進元であり、演出者である」と紹介されていることから「大宅壮一の造語」という説を採ったようである。

『日本国語大辞典』第四卷（小学館、二〇〇一年）には「恐妻」は「夫が妻をおそれること」とあり、用例を徳川夢声、林麟、辰野隆によって書かれた『随筆寄席』（一九五四年）から引用している。また「恐妻家」は「妻をおそれる人。妻に頭のあがらない夫」と書かれており、用例で一番古いものは『三等重役』からの引用である。

用例は「恐妻」も「恐妻家」も一九五〇年代のものを採用しているが、『日本国語大辞典』では「恐妻」の欄に「語源説」という項目を設け、日置昌一『ことばの事典』を参照に、「徳川夢声が、共済組合をもじって恐妻組合といったことから」生まれた言葉であると補足しており、徳川夢声による造語であるという説を採っている。

『ことばの事典』（大日本雄弁会講談社、一九五五年）では先述した徳川夢声の説を「昭和十三年の春ごろ」のことであると書いており、そうであれば一九三八年の時点で既に存在した言葉であるということになる。この説は「恐妻」の流行時、夢声自身によって何度か語られたエピソード（確認できた限りで一番古いものは『読売新聞』一九五二年八月十六日付の「忙月忙日」）であり、それを参照して書いた可能性が高い。

また、同時代の資料を参考にすると『現代用語の基礎知識』一九五四年版（自由国民社、一九五三年）では「恐妻病」という項目で紹介されている。「妻

に頭の上らぬ夫を指して言う」「阿部真之助、源氏鶏太等により広まった」とある。この場合は「広まった」とあるため起源を述べている訳ではないと考えられるが、ここでは大宅・夢声いずれの名も出ていない。さらに流行時「恐妻」について語られた資料も見てみたが、戦前から存在したという意見と戦後に発明されたという意見の両方が存在し、流行時から言葉の起源（新語か否かという問題）は曖昧であったようである。

これらの資料からは「恐妻」という言葉の起源を特定することはできない。流行以降に語られたエピソードが挙げられているのみで、「恐妻」という言葉の用例という形では存在しないためである。そのため、用例によって再検討することが必要であると考えた。

起源を特定することができれば一番よいが、今回の目的はそれよりも「恐妻」が流行時に作られた新語であるか否かを明らかにすることにある。戦後の「恐妻」流行の背景にはアメリカの家庭観・夫婦像の影響があると考えられるが、そのような思想を受け入れるために新しく言葉を作ったのか、以前からあった言葉に組み込んだのか、ということが論者の大きな関心であるからだ。

そして後者の場合、流行以前の用例と比較し差異を明らかにすることで、ミッヨ・ワダ・マルシアーノが示した「日本のメディアに浮遊した「恐妻」「恐妻家」という言説・表象が戦後的であるとされる漠然とした社会の心性、あるいはこれら意識的に誇張された表象に内在する時代性」<sup>三</sup>がどのようなものかを探る手がかりになるのではないかと考えている。

実際に調べた結果、「恐妻」という言葉の起源がどこにあるかを特定することはできなかったが、一九二四年より既に存在していた言葉であることが明らかになった。以後、使用された年代順に詳しい用例を挙げる。

## 二・戦前の「恐妻」の用例と特徴

ここでは、戦前の「恐妻」の用例にどのようなものがあるかを確認し、分析していく。今回は国立国会図書館デジタルコレクションを用いて調査を行った。調査は決して十分なものであるとは言えないが、今回の調査により少なくとも一九二四年には使用されている言葉であったことがわかった。

まず、今調査の範囲で「恐妻」という言葉が使われていた最も古い作品は三田村鳶魚『公方様の話』（雄山閣、一九二四年）であった。この作品は徳川歴代將軍に関する話が十篇収録されているが、「春日局の焼餅競争」という話の中に「二代將軍は恐妻家」という項がある。

前の項で秀忠の妻・江子が「嫉妬で名高い女」であることが示された後、秀忠の唯一の庶子である正之の存在が「御台所を憚って全く秘密にされ、江子の生前には父子の対面さへなかつた、思へば二代將軍も随分な恐妻家である」と書かれており、「恐妻家」という言葉が使われていることが確認できる。「恐妻家」についての説明がとくにないことから、当時「恐妻」という言葉が一般的に使われていたのかもしれない。また、妻の恐ろしさは示されているものの秀忠が妻に頭が上がない様子が描かれているわけではないため、ここでは「恐ろしい妻を持つ夫」という意味で使われていた可能性も考えられる。

次に古いものは、佐々木邦「恐妻病者」『面白俱樂部』（一九二六年四月）という短編である。主人公の同僚の一人である「相馬君」とその妻の夫婦関係が話の主題となっている。主人公は会社帰りに飲みに行った際、「七時半になるとソーダ水を呷って脱鬼のやうに帰って行く」相馬君を見て、同僚たちと次

のような会話をしている。

『そんなに細君がやかましいのかい？』

と僕は多少知らないでもなかったが、初耳のやうに訊いて促した。

『逆もお話にならない。それに前身を洗へば御主人筋だから頭が上らないんだね。』

『御主人筋でなくても、あれちや手に余る。大きいんだからね。僕たちは口で負けても腕づくで勝つけれど、相馬君は組み伏せられてしまふぜ。恐妻病にかゝるのも無理はないよ。』<sup>四</sup>

ここでは、現在の使われ方と同じように妻を恐れる夫を指す言葉として「恐妻病」という言葉が用いられていること、妻を恐れる理由が妻の体の大きさにあることが確認できる。

佐々木の作品では当時のサラリーマン家庭を舞台に、亭主閑白ではない対等な夫婦関係を築いている家庭が多く描かれている。佐々木は「恐妻病者」発表前後にも「夫婦者と独身者」『主婦之友』一九二四年一月〜十二月号）や「主権妻権」『婦人倶楽部』一九二五年十月〜翌年九月号）において妻に頭の上がない夫を描いているが、彼らを表現する際には「恐妻」という言葉が用いられることはない。このことから佐々木は、妻が家庭の実権を握っている家庭の夫に用いるのではなく、字義通り、妻を恐れる夫を意味する言葉として「恐妻病」という言葉を用いていると考えられる。

最後に、平山蘆江『人間道場』（岡倉書房、一九三四年）に収録された「恐妻人情話」である。貞淑で儉約家の妻を持つ夫が妻に遊びを教える話（「貞淑地獄」）や、妻に給料の安さを指摘され、貯金を切り崩して出世したふりをする夫の話（「家持の花嫁」）、堅物の役者に代わり客先回りをし、家に帰らない妻に対抗して浮気をする夫の話（「時計からくり」）、妻の待つ家に帰るのを恐れる酔っ払い夫たちの嘆き（「三人上戸」）、浮気の代償に金をせびられる夫の話（「二心同体」）といった夫婦を題材にした話が五篇収録されている。

この話ではタイトル以外に「恐妻」という言葉が使われることはないが、「恐ろしい女房」「女房が恐い」といった言葉が用いられるとともに、いずれの話にも妻の恐ろしさを示す特徴と夫が妻を恐れる様子が描かれている。ここで掲げられる「恐妻」は、「恐妻家」「恐妻病」のように下に体言を伴っていないこともあるが、妻を恐れる夫を指すというよりは、恐ろしい妻自身を指す言葉である可能性が高い。

ここまで見てきたように、戦前に「恐妻」という言葉が使われているのが確認できたのは、右の三作品のみであり、次に「恐妻」を冠した作品が現れるのは一九四九年である。国立国会図書館デジタルコレクションでは書名および目次を元にした検索となるので、本文のみで使われている場合は拾い出すことができない。そのため、一九二四年のものが一番古いと断定することはできないが、これにより徳川夢声が使用したという一九三八年以前から既に使われていたことが明らかになった。

「恐妻」という言葉は現代と同じような意味合いで使われているように思われるが、これらの作品には、なぜ妻を恐れるかについて、妻の嫉妬深さや身体的要素、過剰な儉約・束縛といった妻側の問題が明確に示されているのが特徴である。恐ろしい妻であるが故に妻に逆らうことができない夫を「恐妻家」「恐妻病」と表しているのである。これは後に示す戦後の「恐妻」と明らかに違う点であると言える。一方、単純に妻が家庭の実権を握っている状態を示す場合には、「嬖天下」が多く用いられている。こちらは一九二〇年代から三〇年代にかけて、まんべんなく使われていたようである。

### 三・流行時の「恐妻」の用例と特徴

ここでは、戦後の「恐妻」の用例を確認する。主に近藤日出造によって使用された一九四九年の用例と、『三等重役』を発端とする一九五二年以降の用例に分けて説明をする。

まず、阿部真之助が「今週の話題」(『サンデー毎日』一九四九年六月二十六日号)で「恐妻」についての話題を取り上げている。冒頭部は次の通りである。

恐妻クラブというものが組織されると、新聞が報じていた。近藤日出造が会長に推挙されたら、女房の許可がなければ、うけられないといつて断つたという。さすがに会長たるべき貴族を示したものである。

ここで「恐妻クラブ」について補足をしておくと、「民芸」という新劇団体の後援会を作ることになった際、このメンバーなら助け合いの「共済会」ではなく、妻を恐れる方の「恐妻会」の方ができそうだといいことで盛り上がり、その時に出席していた近藤が恐妻会長に選ばれた、というエピソードがあったとのことである。その影響により、この年には映画・演劇関係の雑誌において「恐妻」という言葉を用いた記事が数点確認できる。

また阿部は、恐妻は「現代日本の悩み」であるが「恐妻」という事実は、現代に始まったのではなく、遠く神代に人類のそもそもの発端から、現われている現象なのである」と述べ、イザナギ・イザナミやアダムとイヴ、ソクラテスや孔子を「恐妻家」の例として挙げ、恐妻という事実は昔からあるが「現代において恐妻現象が、かくだんに顕著になつてきたこと」が問題で、その原因は「女がかくだんに強くなつてきたこと」にあるようだと言っている。

この記事で注目したのは次の二点である。一点目は、「恐妻」が単に妻が家庭の実権を握っていることを示す言葉となつていることである。佐々木は「主権妻権」で「哲学者の家庭はソクラテス以来妻権即ち主権で、女房が全権を握つてある」<sup>五</sup>と述べており、ソクラテスのような「女房が全権を握つてある」家庭状況と、妻の恐ろしさによって逆らえない「恐妻病」の家庭を区別していたが、阿部は前者の家庭状況を「恐妻」とあるとしている。

二点目は、下に体言を伴わない場合にも夫を指す言葉となつていることである。戦前は「恐妻」のみで用いる場合には妻を指す可能性が考えられる言葉であったが、戦後は下に体言を用いなくても夫を指す言葉として機能している。明らかに妻に問題のあった戦前の「恐妻」たちとは違い、戦後は普通の女

性が「恐妻」の対象となったこともあり、言葉の性質が変化したと思われる。

その後、恐妻クラブの会長に推挙されたという漫画家の近藤日出造が、『恐妻会』《婦人倶楽部》一九四九年十一月〜一九五〇年十月）という題の小説を連載する。しかしこの作品は恐妻と関係の薄い物語が展開される中、最終話で突如恐妻会結成のエピソードが差し込まれるというものであり、物語内で恐妻の定義などが述べられているわけではない。のちに近藤はこの連載を振り返り、阿部と大宅に恐妻会会長という「名誉職を、あつという間に奪い去られた」ことが「恐妻会」なる処女小説を連載した「きっかけであり、『僕が目途としたものは、小説の内容ではなく、『恐妻会』の題を一年間雑誌に掲げることで『近藤―恐妻会の関係』を読者に根付かせることが目的だったと述べている。六

『婦女界』一九四九年十一月号では「四十男が浮気を語る放談会」という題で、徳川夢声、藤浦洸、近藤日出造、田村泰次郎による座談会が組まれている。この座談会は本誌に「妻子のある中年男に恋をする、そして非常になやんでいるというような投書が沢山あつた」ことから企画されたものである。その中で近藤たちは「浮気をするのは、中年男の通有性」であるとしながらも、「女房を愛してる」ために浮気はしないと述べるとともに、次のような発言をしている。

妻を愛し、尊敬するあまり、恐妻会員になるということ

記者 いろ／＼お話を伺っていますと、今日お集りの先生がたは、実に愛妻家ばかりお揃いですね。

藤浦 なにしる恐妻会のメンバーでネ、噂によると近藤氏が会長で、僕が副会長なんですネ

徳川 僕らのほうは、ちよつとずれますが、十年ほど前に、恐妻組合というものがあつたでしょう。これに對抗して、われ／＼も作ろうというので、会長が小林一三か、阿部真之助がいいだろうというので、つまりですナ、世間で男らしい奴こそ、家庭における恐妻な男であり、田満とは、妻を恐れるということから発して、そういう組合を作ろうとしたことがありましてナ。

近藤 女房を尊敬し得るという亭主ですネ。

徳川 おそろゝのあまり、浮気ができん、僕の如きは……（笑）

田村 外でうまいことをしようという気持が、相当あるんじゃないですか、恐妻なんていわれていて……。

この座談会では女房を恐れるために浮気ができないとする一方で、女房を愛しているから浮気をしないと述べており、「恐妻家」であることと「愛妻家」であることを結び付けている。ここからは妻を恐れる原因が、戦前の用例に見られた妻側の恐ろしい特徴・要素によるものではなく、妻を愛し、尊敬しているが浮気もしたいという夫自身の葛藤・後ろめたさによるものと変化していることがわかる。

ここで結び付けられている「愛妻」という言葉も、元々は「愛している妻」を指す言葉であつたが、一九二八年頃から女性誌などで夫が「妻を大事にす

ること」を意味する言葉として用いられるようになったようである。『日本国語大辞典』の「愛妻家」の項には「妻を人並み以上に大切にする人。いくぶん、からかう気持を伴って用いられることが多い」とあるが、「恐妻家」とセットで語られていることからその傾向が見てとれるだろう。

ここまで、一九四九年の三つの用例を確認した。戦後「恐妻」という言葉・モチーフが注目され始めたのはこの頃からだと考えてよいだろう。この時期の「恐妻」は戦前の用例とは違い、妻の恐ろしい要素が示されることはない。夫側の後ろめたさから無条件に妻を恐れる夫を指す言葉となっている。さらにここでは「恐妻」であることを「女房を愛してる」ことや「妻を尊敬し得る」と結びつけている。発表媒体が女性誌であることから、この座談会における妻賛美がリップサービスである可能性は否定できないが、後にそこに描かれているような傾向を受け継ぎ、物語を通して確立したのが『二等重役』である。

『二等重役』で「恐妻家」という言葉が初めて用いられるのは第二十二話「新年お目出とう」(『サンデー毎日』一九五二年一月六・十三日合併号)である。『三等重役』では、登場人物のほとんどが妻に頭の上がらない夫として描かれているが、第二十二話以前はその状態を「嬖天下」と表現していた。このことから、『三等重役』における「恐妻家」が「嬖天下」と同義であることがわかる。

また、第二十二話では、「何、愛妻家とは即ち、恐妻家なんだから、どっちでもよろしい」というセリフで初めて「恐妻家」という言葉が登場する。『三等重役』もまた初登場の時点で「恐妻家」と「愛妻家」を結び付けている。さらに『三等重役』では、一九四九年の時点では曖昧であった「恐妻」の定義付けを第二十六話「恐妻家番付」(『サンデー毎日』一九五二年二月十日号)の中で行っている。

そもそも恐妻家とは何んぞ、という議論になった。それは愛妻家のことである、と前頭筆頭の高野営業部長が主張した。すると、桑原社長がいちばんの愛妻家ということになる、おかしいでは無いか、と異議を申し立てる者が出てきた。新婚の良人は、愛妻家ではあるが、通常、恐妻家では無い。してみると、恐妻家とは、家庭は絶対に破壊したくない、しかし、ちよつとした浮気なら内証でしてみたい、ヘソクリもうんとつくりたい、とまさに虎視眈々たる、そんな不逞な良人どものことでありそうだ。

ここでもやはり源氏は「恐妻家」と「愛妻家」を結び付けている。浮気心などからくる後ろめたさにより妻を恐れる気持ちはあるが、それは妻を愛する気持ちから現れてくるものだとしていることから、源氏はむしろ「恐妻家」を「愛妻家」の派生として見ていと言っているように思う。『二等重役』における「恐妻家」の定義は、一九四九年に語られた考えに基づくものであると思われるが、そこに出来た考えをより直接的に、強固に結び付けており、読む側にわかりやすい考えに変化させたとと言える。

そして一九五二年に『三等重役』で「恐妻家」という言葉が積極的に使われるようになると、新聞でも「恐妻」という言葉が用いられるようになる。一九五二年三月三十一日付の『読売新聞』では、女房に怒られるのを恐れた夫が狂言強盗騒ぎを起こすという事件が取りざたされている(「話の港」)が、一



九五一年の時点ではまだ「恐妻」という言葉は用いられていない。「二」で述べた徳川夢声「忙月忙日」（一九五二年八月十六日付）が『読売新聞』で「恐妻」が使われた最初の記事であり、それ以降積極的に用いられるようになる。

ただ、「恐妻」についての話題は通常の記事で扱われるよりも読者の投稿において言及されることが多かったようである。『読売新聞』の場合、とくに俳句の投稿で「恐妻」が用いられる例が多く確認できた。そしてその傾向は『朝日新聞』においても確認できる。『朝日新聞』で最初に「恐妻」という言葉が用いられたのは一九五二年三月十五日付の「ぼくも一言」、その次に用いられた一九五二年五月四日付の「ひととき」でいずれも読者投稿欄である。それだけ当時の人々にとって関心の大きい話題だったということだろう。

また、「ひととき」の冒頭は「恐妻組合」などというものはユーモア小説にでも書かれて以来広がったのかどうかは知らないが」と始まっており、『三等重役』と「恐妻」の関連を当時の人が認識している様子もうかがえる。その後、『朝日新聞』一九五二年十一月二十一日付の「今日の問題」には、「恐妻と愛妻」という題で、日本愛妻会結成についての文章が載っている。

「日本愛妻会」と称するのが結成され、「心なき男性の」■（引用者注―判読不能）した恐妻会に対抗して、目覚めたる良人族として、かよわき女性に愛の手をさしのべん」というのを、その主旨とするようだ。「恐妻会」などといったところが、細君に頭があがらないこと、あるいは、頭があがらないように見せかけることによって、原稿かせぎや講演かせぎをやるのを主旨としているようなところもないではないが、結局はこれも愛妻の一つの型と見るべきであろう。

ここでは、日本愛妻会が恐妻会に対抗する機関として結成されているのに対し、「恐妻」は「愛妻の一つの型と見るべき」だとしている。先述した宮本小次郎「恐妻・愛妻家列伝」でも日本愛妻会の話題が取り沙汰されているが、宮本もまた「愛妻会」というのは、明らかに「恐妻」の一変種である」と述べている。さらに、丸木砂土も『殿方草紙』（要書房 一九五三年）で「恐妻」について次のように述べている。

妻恐るべし、などというほど恐ろしい日本の女は、決しておりはしません。妻が恐ろしい、という意味は、妻愛すべしという意味と同じで、ただ女房が可愛いというのを、阿部、大宅良先生、小野（引用者注―佐世男）画伯あたりはテレくさいもので、妻恐るべし、と逃げているので、恐妻、実は愛妻であることに間違いありません。旦那様のおノロケに過ぎないのです。

このような愛妻と恐妻が表裏一体であるという考えは、この後も新聞などで多く語られている。このことから、源氏や近藤らが示したような「恐妻家」＝「愛妻家」という考えが当時の人々に受け入れられ、浸透していたことがわかる。

阿部や近藤らは、「恐妻」となる原因を、妻側に明らかな欠点や問題を設定することから、「中年男の通有性」である夫側の浮気心などによる後ろめたさ・葛藤へと切り替えることにより、多くの夫婦に当てはまるものへと変化させた。また、源氏は『三等重役』において、これまで「嬖天下」という言葉で表現していた妻が家庭の実権を握っている状態を表す言葉を「恐妻家」へと切り替えるとともに、「恐妻家」を浮気心やヘソクリを作りたいといった後ろめたさを持つ「愛妻家」の言い換えであるとした。

「恐妻」という言葉は戦後多くの夫婦にあてはまるものとなったことに加え、「恐妻家」と「愛妻家」が表裏一体のものであるという考えが当時の人々の共感・関心を呼んで広く受け入れられたことにより、流行語化したのではないだろうか。

## まとめ

ここまで見てきたように、「恐妻」という言葉は一九二四年には既に使われていた言葉であり、流行した一九五二年に作られた新語ではないことが明らかになった。また、戦前と戦後の用例を比較した際、戦前の「恐妻」は妻に明確な問題がある家庭において使用されるという限定的なものであったが、戦後の「恐妻」は、妻が家庭の実権を握っている状態を示す言葉であり、「嬖天下」の同義語として用いられていることがわかった。夫が妻を恐れる理由も浮気「心」に過ぎず、それ故多くの夫婦に該当する言葉となり、流行したと言える。

さらに、戦後の「恐妻」のもう一つの特徴は「愛妻家」と結び付けられ、表裏一体のものとして扱われていることである。これは戦前の「恐妻」には見られなかった傾向であり、そこにワダが指摘する「恐妻」「恐妻家」という言説・表象が戦後的であるとされる「理由があるのではないかと考えられる。一でも述べたように、「恐妻」の流行の背景には、アメリカの夫婦像・家庭観の影響があると思われる。

当時流布されたアメリカの家庭像は、まさに妻が家庭の実権を握っている状態であり、それを昔から日本に存在した家庭像である「嬖天下」や「恐妻」という言葉を用いて表現することで、当時の人々に新しい思想を受け入れやすいようにしたのでないだろうか。とくに『三等重役』が定義付けた「恐妻」には、アメリカの夫婦関係の影響が色濃く感じられる。『三等重役』と戦後民主主義的な要素との関わりについては、第四章で詳しく考えたい。

## 第三章 『二等重役』における戦後派重役像

はじめに

源氏鶏太『三等重役』は戦後、財閥解体や公職追放の影響で重役が足りなくなったことによって浮かびあがることの出来たサラリーマン重役（以下、戦後派重役と記す）を描いた一話完結型の連載小説である。

「二等重役」というタイトルを聞く限りでは、戦後派重役を皮肉った内容が描かれているように思われるが、『三等重役』の戦後派重役である桑原社長は最終的に「名実共に立派な社長」として描かれている。

第三章では、『三等重役』の桑原社長が何をもって立派な社長として描かれているのかを考察する。桑原社長は四人の女性に誘惑されるものの肉体関係を結ばない貞操堅固なキャラクターとして描かれる。「浮気は男の甲斐性」という価値観が堂々と示される中、純潔でありつづけることで部下や戦前派重役に評価されるという展開になっていることを指摘したい。

一では、先行研究から『二等重役』が戦後派重役を肯定的に描こうとしている作品であることを確認する。そして戦後派重役が部下や戦前派重役に評価されるためには、戦後派ならではの新しい価値観の提示が必要となることを指摘する。

二では、桑原社長が女性に誘惑される四場面を分析する。『三等重役』では重役の浮気を容認する価値観が示されるにもかかわらず、桑原社長が一貫して肉体関係を結ばないことを確認する。また、純潔でありつづけることが、部下や戦前派重役に評価される戦後派ならではの価値観として描かれていることを示す。

三では、当時の性をめぐる状況を整理し、純潔教育の重要性が訴え始められた時代であることを確認する。その中で桑原社長の性意識がどのように受け止められたかを考えていく。

### 一・戦後の価値観をどのように肯定するか

尾崎秀樹は、源氏が初めて戦後派重役を主人公に据えた、プレ『三等重役』ともいえる短編「艶福物語」（『サンデー毎日別冊』一九五一年三月）と『三等重役』を比較し、二作に描かれた戦後派重役像の違いについて言及している。

第一章でも述べたが、「艶福物語」は、戦後重役の座にいた横山さんが、パージ中の重役・曾和さんの愛妾であった豆太郎に再会し、豆太郎と愛人関係を結ぶことで重役としての能力や自信をつけていくものの、曾和さんの追放解除が決まると、豆太郎から曾和さんの元に戻りたいと告げられるという内容である。

尾崎は「艶福物語」が戦前派重役に及ばない「二種の負け犬」として戦後派重役を描いているのに対して、『三等重役』は戦後派重役の「イメージ更新を

はかつて「二」と指摘する。いずれの作品も戦後派重役を表す際に「三等重役」という言葉が使われているが、第二章で指摘したように、「三等重役」が蔑称として成り立っていた「艶福物語」に比べ、「三等重役」では親しみやすさが強調されており、「三等重役」という言葉の印象の違いからも、戦後派重役を肯定的に描こうとする様子がうかがえる。

また尾崎は、「(引用者注)戦後派重役は」何の経営管理的能力もないのにトコロテン式に重役の地位におさまった人々ではなく、むしろ、各社の取締役ないしアッパー・ミドル・マネジメント層のうちで有能な人材と目されたが故に、退陣するトップ層が後事を全面的に託した人物だと考えた方が正当である」<sup>三</sup>という野田一夫の意見に触れ、「三等重役」は戦後派重役を、戦前派重役と対等に渡り合うことのできる「新しい人間像(企業家像)」<sup>四</sup>として描こうとした作品だと述べている。

確かに、『三等重役』の桑原社長は「戦争中は総務部長をしていた」人物であるとともに、奈良前社長から「わしのページ中は、特別にこの会社の経営を君に預けるようなつもりである」<sup>五</sup>と直々に指名されたという設定であり、野田が示した「有能な人材」に当てはまると言える。

しかし、源氏は『二等重役』連載開始とほぼ同時期に執筆された「ラッキーさん」『オール読物』一九五二年十月号)の中で、「自分のお金を持つてる資本家」こそが本物の重役であり、「サラリーマン重役なんて、資本家の都合で、いつ何時、首になるかわから」ないと述べている。また「艶福物語」でも、戦後派重役である横山さんが戦前派重役の曾和さんに敵わない最大の理由は資金面にあった。

このことから源氏は、単に仕事の能力が優れているだけでは、戦後派重役が戦前派重役をこえることはできないと考えていたことがわかる。

また、「艶福物語」の主人公である横山さんは、上司の愛妾である豆太郎と愛人関係を結ぶことで重役としての自信をつけていく。これはいわば戦前派重役の模倣をする、ということであるが、上司の追放解除が決まると、豆太郎は横山さんのもとを離れていく。源氏は、戦前派重役の模倣をしても戦前派重役には敵わないことをも示していたと言える。

戦後派重役を肯定的に描くためには、戦後派重役ならではの新しい価値観を示し、それによって戦前派重役と対峙することが必須であるが、尾崎はその内容までは明らかにしていない。

それでは一体、桑原社長はどのような価値観をもって部下や戦前派重役から「名実共に立派な社長」として認められるのだろうか。

真実一郎は、『サラリーマン漫画の戦後史』(洋泉社、二〇一〇年)で源氏作品の特徴を次のように述べている。

そもそも源氏鶏太の小説では仕事をする場面はほとんど描かれない。多くの場合、主人公は総務部や経理部といった社内業務部署に勤務しているという設定で、何かを創造したり、特定のスキルを身につけたりするような描写は出てこない。描かれるのはもっぱら社内の派閥争いや社内恋愛のゴタゴタといった人間関係だ。

だからこそ、登場人物の人柄が生きてくる。人柄が良ければ、上司と女の後ろ盾を得ることが出来て、ドンドン出世出来る。人柄が良ければ、派閥

に入らなくても誰かがちゃんと評価してくれる。人柄が良ければ、バーやクラブでママに好かれ、貴重な企業情報が入ってくる。仕事の成果よりも人柄がものをいう過剰な「人柄主義」が、源氏鶏太作品の大きな特徴だ。

仕事をする場面がほとんど描かれないという真実の指摘は『三等重役』においても例外ではなく、桑原社長が勤める南海産業がそもそも何を扱っている会社であるかさえ説明されることはない。そうなる、その中で桑原社長が「名実共に立派な社長」であると読者に認めさせるためには、具体的な仕事の成果以外での評価基準が必要となる。また、脳溢血で倒れた奈良前社長の娘が経営する美容院を会社を挙げて応援し（第八話、社員のために街のボスと闘う決意を見せる（第二十七話）など、桑原社長の人柄の良さが表れたエピソードも多く描かれているが、その中でとくに注目したいのは、桑原社長が男女関係においてきわめて誠実な存在として描かれていることである。桑原社長は、重役が愛妾を持つことが容認される価値観の中、純潔を貫くことで高潔さを示し、社員や戦前派重役から評価されていく。

## 二『三等重役』における誘惑場面の分析

桑原社長は、全三十五話を通して四人の女性から誘惑されている。それぞれの場面を詳しく分析し、桑原社長がどのような性意識の持ち主として描かれているかを検証したい。

### 【1】スタンドバー『ニューヨーク』のマダム

『ニューヨーク』のマダムは、第一話と第七話、第二十一話に登場する。今回はその中から初登場の第一話と、桑原社長を誘惑するシーンが描かれている第七話を分析する。第一話では、追放解除による奈良前社長の会社復帰が噂され、真相を聞くために奈良邸へ向かった秘書の若原君を、桑原社長が『ニューヨーク』で待っているところにマダムが登場する。

「どないしはったの？ 何んや、元氣ないわね、社長さん。」

と、マダムが顔を寄せてきて、お酌をしてくれた。マダムは美人であるばかりでなく、身体も堂々としていた。その堂々としていたところが、また、魅力的であった。マダムには目下、月に三万円の旦那を物色中との噂があった。そういう噂は、この酒場をはやらせるひとつの原因になっていたかもしれない。桑原さんは財政的な考慮から、せめて二カ月ぐらいなら、マダムの旦那になつてみたいような気持を持っていた。当市の名門、しかも第一流の実力を有する南海産業の社長さんなら、それくらいことは許されそうである。しかし、思えば、桑原さんの社長としての位置は、今やまさに累卵の危機に瀕しているのであった。

「いや、わしは極めて元氣旺盛じゃよ。」

「あら、そうかしら。では、あたし、たのもしい思っわ。」

とマダムが意味ありげな眼つきをした。

「でも、深い考えごとをしていたんだ。」

(第一話「追放解除の旋風」・傍線引用者(以下同様))

桑原さんは「マダムの旦那になってみたいような気持」を持っており、マダムも桑原さんに対して「意味ありげな眼つき」を送っている。しかし、この段階では桑原さんの社長の座が「累卵の危機に瀕してい」たため、マダムとの関係が進展することはない。

また傍線部のように、語り手によって、重役であれば浮気を容認するという価値観が示されている。『三等重役』は三人称小説で、登場人物の考えや行動に対して意見を述べるタイプの語り手が設定されており、中でも桑原社長の行動や考え方が特殊であると思われるような意見や情報を述べることが多い。

第七話では、マダムが桑原社長に店の改装費を借りに来るところから始まる。桑原社長は思わず二十万円を貸してしまうが、社員から絶対回収することを伝えてほしいと言われ『ニューヨーク』に行ったところに浮気をもちかけられる。

マダムはその堂々たる身体でしなだれかかり、桑原さんの手を握りしめている。桑原さんは気分的にも、それから姿勢の上からも身動きもできんようであった。しかも、これほどの女から、これほど情熱的に口説かれて、もし素ツ気なくしたら、それこそ男冥利を知らんということになるだろう。もとより、桑原さんは木石ではないのである。だから、過去において浮気をしてみたいと思っただことはしばしばあった。しかしながら、桑原さんは今日まで奥さん以外の女を知らないのである。それはたいへん崇高なことのよう思うのだが、時には、せつかく男に生れた甲斐がないようにも考えられるのであった。

(第七話「マダムと女房」)

傍線部からは「据え膳食わぬは男の恥」という価値観に加え、第一話でも示された浮気を「男の甲斐性」として是認する価値観が読みとれる。

『三等重役』の連載によって『サンデー毎日』は二倍以上発行部数を伸ばし、一九五一年十二月に刊行された単行本『三等重役』が一九五二年度のベストセラーになったことから、『三等重役』が当時の読者に熱狂的に受け入れられた作品であることを勘案すると、右に挙げた価値観は当時常識と言えるものだったと考えるよいだろう。その中で、桑原社長は「奥さん以外の女を知らない」男性として描かれている。

桑原社長の正確な年齢は作中で明示されていないが、第七話で「初老」と表現されていることから、四十歳をこえていることは確実である。渋谷知美『日

本の童貞』によれば「新妻にささげる『宝』として結婚まで童貞を固守する」といった童貞を美德とする感覚は、一九六五年頃まで残存したという。それでも、実際に自分の妻が初体験の相手であった者は一九二一年前後で一割ほど<sup>六</sup>であり、桑原社長は当時としても珍しい存在だったと考えてよいだろう。

マダムと浮気の計画を立てた桑原社長は一人白浜温泉へと向かい、マダムを温泉へ向かわせる旨の電報を若原君に送るが、それを人事課長の浦島さんに見られてしまう。それを見た浦島さんは「おお、すると、こんどは社長浮気の巻か？」と「いったんは笑ったのであったが、急に考え深い顔にな」り、マダムに二十万円を貸す約束をしたという話を思い出す。そして、マダムの代わりに社長夫人を温泉へ向かわせるよう手配する。

この場面を見るに、浦島さんは会社への損害がなければ社長の浮気を容認したと考えてよいだろう。ここからも、浮気を是認する価値観が当時存在していたことがうかがえる。

その後、桑原社長はマダムの到着を心待ちにする一方で「長い間奥さんを温泉へ連れていかなかった」ことを思い、「半ば後悔するような」気持ちを噛みしめる。結局やってきたのは社長夫人だったので社長は驚くが、「喜んで奥さんを眺めていると、悪い良人にはなれない、と思」う。温泉から帰った桑原社長は元気がなかったが、浦島さんに温泉の感想を聞かれると「いつもの桑原さんらしい会心の笑み」を浮かべ、「君もいっぺんぐらい平常の罪ほろぼしに、奥さんを、どっかの温泉へ連れてってやれえ」と述べるといった、奥さんを思いやる描写が目立つ。

マダムとの関係においては積極的に浮気を実行に移そうとするが失敗し、最終的に家庭に回帰する様子が描かれている。

## 【2】 前川靖子（第十四話・第十五話）

前川靖子は十年前まで南海産業の社員だったが、東京でキャバレーの女給をしている。桑原社長は第十四話で東京へ出張に行った際に靖子さんと出会い、「明日の晩、一人で来て頂戴」と誘われる。

「さてきて、どうしたものであろうかのう。」

何も迷うことなんか無いはずのものであった。十年前に南海産業にいた女が、キャバレーの女給になっている。桑原さんが昔のよしみで、一ト晩、彼女を畳屋にしてやるだけである。にもかかわらず、桑原さんが今夜もし出かけていったら、昨夜の彼女のただならぬ風情からして、何んとなくそのままではすみそうもない、あるスリルを予感しているのであった。だから、このまま宿に帰ってしまえば、万事、無難なのである。しかし、せっかく東京へ来ているのだし、この千載一遇のチャンスに万事無難では、あまりにも男として腑甲斐ないではないか、という自分で自分を叱咤激励する気持だ。って十分にあるのだ。

（第十五話「東京エレジー」）

桑原社長は浮気をすることに對し、【1】と比べて消極的であるが、浦島さんや若原君が女性と一緒にいるのを見て「社長たる者が、こんなところをウロウロしているようでは、だらしがなさすぎる」と、社員への對抗意識から靖子さんの元へ行く決意をする。斎藤駿は「源氏の小説にあつてはセックスはむしろ仕事への自信を強める機能として捉えられる」<sup>セ</sup>と指摘するが、『三等重役』における女性関係もまた、性欲によるというよりステータスシンボルとして機能している部分がある。

桑原社長は銀座のホテルで靖子さんと落ち合うが、「良人を一カ月ほど入院させるため」の病院代として二万円を貸してほしいと頼まれる。その話を聞いた桑原社長は肉體関係を結ぶことなく「靖子さんに、無償で五千円をやつて」ホテルを出る。「よくよく、浮気に縁が無いように出来ているらしい」と腹を立てた桑原社長だったが、帰り道に浦島さんが女性に振られるのを見て「急に何かしら嬉しくなつて」しまう。

ここからも、やはり今回の浮気が社員への對抗意識から実行されたものであることがうかがえる。また、有楽町駅のホテルで紙包みを提げた若原君と出会った桑原社長は「浦島君、大変である。わしは家内や娘に土産を買つて帰ることを、すっかり忘れとつた」「明日は昼のうちに土産を買ひに出よう」と家庭に思いを馳せる。

前川靖子との関係においては、浮気を実行に移そうとするものの、家庭の存在を知つて思いどまるとともに自分の家庭を思うという、家庭を大切にする人柄が強調されている。

### 【3】立野鶴子（第五話・第二十話）

立野鶴子は奈良前社長の愛妾である。第五話で、奈良前社長が脳溢血で倒れて以来手当が途絶え、困つていると相談に来る。桑原社長は「鶴子さんには往年の色彩が残っている。これで何か水商売でもはじめたら、食べていくぐらいのことは出来るかもしれない。桑原さんは奈良さんへの恩返しの意味で、会社から何らかの名義で若干の出資をしてもいいと思」い、料亭『鶴の家』を開業させる。

第二十話では、人事課の忘年会の会場に『鶴の家』を利用することになる。これもまた鶴子さんから新生活運動の影響で客足が途絶えたので忘年会に使つてほしいと頼まれ、「前社長のため」と賛成したことによる。忘年会を終えた浦島さん達は酔つ払つて倒れてしまった社長を置いて帰つてしまう。

「うん、それもある。ところで、浦島君。君たちは昨夜、社長たるわしを『鶴の家』に忘れていったではないか。」

「あッ、そうでしたかな。」

「あッ、そうでしたかな、やあらへん。おかげで、わしはひどい目におうたぞ。ええか、昨夜、わしは別室で寝かされていて、ハッと気がついたら、『鶴の家』のおかみが、わしの寢床の中に、もぐり込もうとしたり。もちろん、わしは愕然として、こら、奈良前社長と思ひ違ひするな、というてやった。すると、おかみがいふことに、どうか今夜から奈良さんの身代りになつてくんはなれ。何をいうか、わしは奈良さんの女に手をつけるほ



ど忘恩の徒やあらへん。立派だわ、ますます惚れぼれしてくるわ。こら、よせ、はなせ。何んというてもダメだ。まア、お固いこと。あたり前である。仕方おまへん、では、時期を待ちます。時期とは何んだ。はい、奈良さんが死にはる時です。そうしたら、もう、遠慮いりまへんやろ。ひどい奴ではないか。しかし、誤解するんじゃないぞ。わしも昨夜のうちに無事に帰ったんだからな。」

「さすがは社長、立派です。」

「そうである。しかし、浦島君。わしは昨夜、つくづく考えたんだが、わしもあんなババアに惚れられるとは、余ッ程の艶福家に違いないぞ。」  
そういつて、桑原さんは、あきれている浦島さんの前で、ふッふッふッ、と笑ったのであった。

(第二十話「愚息と忘年会」)

このエピソードが前の二つと決定的に違うのは、桑原社長が積極的に誘惑を拒否していることである。これは奈良前社長の愛妾であることが一番の理由だと思われるが、それによって桑原社長の「ヒューマニティック」な面が強調されている。

また、第二十一話には桑原社長と浦島さんが病床の奈良前社長を訪ねる場面がある。鶴子さんの話題になり、「相当な浮気もんだから」「しつかり監視してくれ給え」と頼まれる。桑原社長は浦島さんから、もし浮気をしていたら「前社長に顔向けがなりませんでしたよ」という評価を受けるが、あえてこのシーンを入れることで、桑原社長が鶴子さんからの誘惑を拒否したことが評価されるという構成になっている。

#### 【4】 おこま(第二十二話)

おこまは、第十四話に登場した南海産業の取引先・東京ミシンの藤山社長の愛妾である。第二十三話では桑原社長が藤山さんから「販路拡張と視察」を兼ねた博多旅行に誘われる。「特別に秘書を二人連れていくから、貴殿も気の利いた秘書を一人同行されては如何」との手紙を受け取った桑原社長は浦島さんを同行して大阪で待ち合わせるが、その時藤山さんが「秘書」として連れてきたのがおこまさんであった。

「うちの社長は、あれでなかなか貞操堅固でしてね。要するに、恐妻家なんです。」  
すると、おこまさんが答えた。

「あら、そんなことおっしゃると、女は、意地でも誘惑してやりたくなるもんですわ。」

「え、あなたがですか？」

「いえ、女いっぱんがよ、ほッほッほ。」

(第二十三話「初旅九州路」)

おこまさんの場合は単純な興味から桑原社長を誘惑しようと考えており、経済的援助を必要として関係を結ぼうとしたこれまでの女性たちとは少し異なる。博多に着くと、そこには藤山社長の夫人が控えており、桑原社長は藤山さんの頼みを引き受け、おこまさんを夫人と偽って旅行することになる。その夜、同じ部屋で寝ることになった桑原社長はおこまさんに誘惑されるものの応じない。

ここで注目したいのは、そのような社長の様子を目の当たりにした浦島さんが「しかし今度の旅行で、私はいよいよ社長を立派だと思ふようになりまして、戦前派の社長でも、女にかけてダメなのはダメですね」と評価していることである。「貞操堅固」であることが戦前派重役をこえるための評価につながっている。

次の日の夜も、桑原社長とおこまさんは同じ部屋で寝ることになる。

「おこまさんは、明日から、どうなされます？」

「熊本に知ったひとがいますから、ついでにいつてみるつもりよ。でも、桑原さんがどこかへ連れていつて下さるなら、あたし、どこへでもお供するわ。ほんまよ。」

「いやいや、どうぞ、熊本へお出で下さい。」

そういつて、桑原さんは寢床の中に入った。正直にいうならば、桑原さんといえども、このまま木石であるためには、一大勇猛心が必要なのであった。

「ねえ。」と、おこまさんが鼻を鳴らした。桑原さんは一生懸命に眼を閉じている。

そのとき、襖がそつと開かれて、寝巻姿の藤山さんが入ってきた。「…」

「ねえ、今夜もこんな飯櫃の前で断食する気なの？ よう。」

と、おこまさんは寝返りを打って、またしても鼻を鳴らした。しかし、桑原さんは返辞をしない。しばらくたつて、おこまさんは大きな溜息をついた。

「桑原さんて、ほんまに無器用な男だわ。でも、いいひとねえ。」

博多の夜は、しんしんとふけていつた。

## （第二十三話「初旅九州路」）

ここでは桑原社長が必死で誘惑に打ち克とうとする様子と、その反応へのおこまさんの評価が書かれている。おこまさんによって「いいひと」だと言えることにより、貞操堅固であることが評価されるべき点であることが強調される形になっている。

第二十四話の冒頭で、桑原社長は藤山さんとの旅行を振り返り、次のように述べている。

腫れぼったい顔をしているが、しかし、機嫌は悪くなかった。なぜなら、桑原さんにとって、東京ミシンの藤山社長の信頼に応えて、見事に義理を立て通したということが、男子の本懐のように思われてならなかったのである。あのような場合、ちよつとつまみ食いをしたからとて、あとは要領よく口を拭つて素知らん顔をしていたら、結局、つまみ食い得であつたのだ。

「しかし、わしは心を鬼にして、この貞操を護り通したのである」

誰にも彼にもたやすく出来る、というわけのものでは無い。一種言うべからざる難行苦行であつた。だから、桑原さんとはにかく、何か一仕事をやりとげたあとのように大満足であつたのである。

#### （第二十四話「博多武勇伝」）

傍線部のように、語り手が「つまみ食い」を推奨することで桑原社長の行動の特殊さを浮かび上がらせ、それによつて社長が「難行苦行」を成し遂げたことを強調している。

おこまさんとの関係において桑原社長は、【3】と同じように積極的に誘惑を拒否し、貞操を護り通している。そしてそれが部下や戦前派重役である藤山社長、誘惑した女性自身から評価される点につながっている。

四つの分析から言えることは二つある。一つ目は「据え膳食わぬは男の恥」という価値観や、浮気が「男の甲斐性」であるという価値観が常識的に存在することである。

桑原社長が貞操堅固な人物として描かれるのに対して、戦前派重役である奈良前社長、藤山社長、三好社長（第二十四話に登場）にはそれぞれ愛妾が存在し、経済的援助をするかわりに肉体関係を結んでいる。また、南海産業の戦後派重役や一部の社員も浮気や不倫を実行している（第五話・第六話）。そのような重役が当たり前に存在する中で、決して女性の誘惑に 대응せず、しかし経済的援助は惜しまないという桑原社長のキャラクターは非常に特殊なものだと思われる。

もう一つは、桑原社長の抱く「貞操堅固」であるという特性が「立派」だと評価されることである。貞操堅固であるにもかかわらず、女性に惚れられたという気持ちや浮気心を抱くのは一見矛盾しているように感じられるが、そのような心情が描かれるのは、元々欲望がないのではなく、誘惑に耐えたい気持ちがあるが応えないことこそが「立派」だ、という評価につながるためだと考えられる。

元々、源氏は作中で「主人公が清潔であること」<sup>九</sup>をモットーとしており、男女関係においてだらしない人物は報われない傾向にある。一つ目の特徴で挙げた藤山社長、三好社長は第二十八話で愛妾の存在がばれて夫人に家を追い出されてしまう。第五話で浮気をした重役たちも浮気相手から妊娠したという手紙を受けて狼狽し、社長に処置を頼むはめになり、第六話で不倫をしていた社員も社長によって異動させられてしまう。

『二等重役』では重役であるにもかかわらず貞操堅固であるということが、戦後派重役が部下や戦前派重役から「名実共に立派な社長」として認められ

るための新しい人間像として描かれているのではないだろうか。

また、桑原社長は仲人魔という設定で浦島さんとともに社内の人間を結婚させることに励み、最終的に十一組の仲人をつとめることになる。これは「南海産業株式会社では、戦前、社内結婚は勿論のこと、社内恋愛までもが、厳重なお家の法度となっていた」<sup>+</sup>とあるように戦前は許されない行為であった。社内結婚を推奨することもまた戦後ならではの規則だといえる。健全な社内結婚を奨めることに矛盾を感じさせないためにも、桑原社長は妻以外とは関係を持たないキャラクターとして描かれる必要があったのかもしれない。

### 三、『二等重役』連載前後の性をめぐる状況

桑原社長のようなキャラクターは当時どのように受け止められていたのだろうか。『サンデー毎日』の読者欄「交歓室」にある二つの意見を紹介しておく。

「三等重役」はとても面白いのである。ことに二十二話「新年おめでとう」では、桑原社長が女性に対して初めて男の恐しさを味わせるあたり、わがはいといえども、オールうれしき限りである。ついてはもう一度なんとかして女性をちぢみ上げさせ、かつまた、あの不器用な社長の貞操を一度破らせてみたいものである。

そして自分の間は、若原君と青子さんは結婚させぬように。何故なれば、この二人がハッピーエンドになるなれば、小説そのものも終りになりかねまじき心地がするからである。いうなれば、わがはいは五十話、百話までも読みたいからである。（島根県八束郡八雲村熊野・山崎芳夫）

（「交歓室」『サンデー毎日』一九五二年二月十七日号）

二月二十七日号「交歓室」山崎氏の「あの不器用な社長の貞操を一度破らせてみたいものである」との提案は、実に怪しからぬ発言である。言うなればかかる発言は、わが人格高潔、立派なる南海産業社長を冒瀆し、侮辱するものなのである。さらに言うなれば、社長の貞操破棄は山崎氏のおそるる小説そのものの終焉を意味する公算がすこぶる多いのである。かかることは断じていかんのである。オールいかなのである。言うなれば、わがはいはアラビヤナイトの向うを張って千一話まで読みたいのである。（高知県幡多郡市下川口村下川口・沖本撫尾）

（「交歓室」『サンデー毎日』一九五二年三月二日号）

読者もまた桑原社長の貞操問題に興味を持ち、『二等重役』において貞操堅固であることが「立派」であるという価値観を感じ取っていた。当時としては特殊とも考えられる桑原社長の純潔性が積極的に受け入れられた背景には、性をめぐる当時の状況が関わってくると思われる。最後に、敗戦後から『二等重役』連載前後の性をめぐる状況を確認しておきたい。<sup>十二</sup>

一九四五年八月、日本政府の後押しによりR A A（特殊慰安施設協会）が設立する。これは一般婦女子の純潔を守るための性の防波堤として作られたものであるが、一般婦女子もまた、貧困を背景に次々と売春させられていく。ところが、米兵の間に性病が蔓延したため、GHQは一九四六年一月二十一日「公娼廃止に関する覚書」を日本政府に提出する。同年二月に娼妓取締規則が廃止され、R A A施設は閉鎖されたものの、同年十一月十四日、吉田茂内閣は「特殊飲食店街」（通称、赤線）と称する地域に娼家を集め営業を許可することを決定。赤線は売春防止法が施行される昭和三十三年まで存在し、政府が半ば公認する形で売春が行われていた。

一方で、「敗戦後の『風俗対策』つまり治安対策の一環として」<sup>±</sup>純潔教育施策が展開されていく。一九四七年一月、文部省社会教育局長は「純潔教育の実施について」を都道府県に通知。同年六月に純潔教育委員会が発足し、一九四九年二月には委員会によってまとめられた「純潔教育基本要綱」が発表される。この段階での「純潔」は「性的健康であることを条件として、結婚前には性的交渉のないこと、結婚後は夫婦間以外に性的交渉のないこととした、かなり道徳的なものであった」<sup>±</sup>という。一九五〇年に委員会は純潔教育分科審議会として再編され、翌年には『男女の交際と礼儀』を編集、発行した。ただ、田代美江子が指摘するように「純潔教育施策が、純潔教育の具体的内容を提示したのは50年代に入ってから」<sup>±</sup>であり、一九五五年頃まで純潔教育の位置付けや内容ははっきりと定まっていなかった。（純潔教育施策の展開については、第四章で詳述する。）

そのような状況に対し、『サンデー毎日』は積極的に性に関する問題を扱ってきた。一九五〇年の性に関する特集は次の通りである。

〈マンガ・ルポルタージュ「東京の谷間」（10月8日号）は、獅子文六の小説「自由学校」で有名になったお茶の水の土手の住人たちを紹介し、アベックに占領される「皇居前広場」の「朝から夜まで」（6月25日号）を同じくルポしているし、「ノガミの夜」（8月13日号）では、その後の上野公園のあやしげな様子を写真で見せている。いずれも歪んだ戦後風景の一点描であった。〉

〈それらの世相とはいささか次元を異にするが、伊藤整訳の『チャタレー夫人の恋人』の発禁、起訴事件が起きている。

「文学における猥せつの限界」（7月16日号）で、東京高等検察庁検事の馬屋原成男は、石坂洋次郎『石中先生行状記』、ノーマン・メーラー『死者と裸者』と一緒に『チャタレー夫人の恋人』を取上げて、発禁処分 of 当然性を強調している。確かにこれらは、当局の取締まり強化の突破口として敢行したかに見える。そのほか『学生と性生活』（11月5日号）、「アベックの生態」（11月12日号）で、戦後の男女の新しい交際と解放的になった関係を取上げているのも注目される。〉<sup>±</sup>

『三等重役』連載中にも『サンデー毎日』は性に関する問題を扱っている。「戦後派（アプレ）総決算」（一九五一年八月二十六日号）、「日本版」春のめざめ」（一九五一年一月二十日号）、「敗戦の置土産 混血児と戦災孤児の現地報告」（同年四月六日号）の三回である。とくに「日本版」春のめざめは、香川県で相次いで発生した中学生の妊娠中絶事件について取り上げ、その中で性教育の徹底を訴えている。

そしてその中で『三等重役』は（浮気心は持っていない）純潔であり続ける男性像を描き続けた。しかも、『サンデー毎日』で「日本版」春のめざめ」が特集された一九五二年一月二十日号に掲載されたのは、奇しくも第二十三話「初旅九州路」であり、おこまさんとの間で貞操を護り通す桑原社長の姿、そしてそのような人格を「立派」「いいひと」として評価する内容になっている。そこに描かれた人間像は当時の状況において理想的とされたものであり、まさに『サンデー毎日』の主張に沿った物語であったと言えるよう。

#### まとめ

『三等重役』は浮気を男の甲斐性として認める考え方が存在する中で、決して浮気をせず純潔でありつつける重役を肯定的に描いた。それは戦前派重役が持ちえなかった、戦後派重役ならではの新しい価値観である。『三等重役』以前の源氏作品では戦前派重役が社員の不遇を救い、正しい方向に導いていく役割を担っていることがあるが、貞操堅固な桑原社長が社内結婚を推奨し、社員たちを正しい恋愛・結婚へと導いていくという構成は、これまでの源氏作品で戦前派重役が担っていた役割を改編して当てはめたものだと言えるだろう。

また、桑原社長の持つ性意識は、「遅々として進まぬ」正しい性教育「の不足」を指摘し、純潔教育の重要性を改めて叫び始める当時の状況において、きわめて理想的なものであったと思われる。道徳的な性意識が積極的に受容されようとした時代であったこともまた、『三等重役』が人気を博した理由の一つとして挙げられるのではないだろうか。

#### 第四章 恐妻と貞操―『三等重役』に描かれた戦後性―

はじめに

『三等重役』が戦後社会の中で果たした文化的役割を考える上で、この小説が奇しくも一九五一年九月のサンフランシスコ講和条約調印の直前に連載を開始し、翌年四月条約発効とほぼ時を同じくして連載終了する事実を見逃すことはできない。『三等重役』の連載および流行時期は、GHQによる占領統治が終結し、日本が独立への道を歩み始める時期と一致している。

『二等重役』が、「戦後民主主義の気分を反映させることによって爆発的人気を獲得してきた」ことは間違いないと思われるが、一体何を描くことで「戦後民主主義の気分を反映」させたのだろうか。

鈴木貴宇は、『二等重役』で戦前（法度となっていた社内恋愛および結婚が推奨され最終的に十一組もの夫婦が誕生することに注目し、「源氏作品の戦後民主主義的な要素は、この「社内恋愛の推奨」にある」と指摘した。今回はそれに加え、「社内恋愛」の導き手であり手本となる桑原社長の夫婦観・性意識にも「戦後民主主義的な要素」が含まれていること、そしてむしろこの点こそ大事な要素であることを指摘したい。とくに「恐妻家」という設定はその最たるものである。

恐妻という流行語を広めたのは『三等重役』であるが、恐妻という概念は当時の日本家庭の実態を指すというよりも、アメリカ的・民主的な家庭観を日本人が受け入れやすいように言い換えたものではないかというのが本論の主張である。

そこで第四章では、桑原社長に与えられた「恐妻家」という設定の分析を通して『三等重役』に描かれた戦後性を明らかにしたい。『三等重役』は「恐妻家」という設定を用いることによって当時の人々が憧れた民主的な夫婦生活を受け入れる際の矛盾を埋める作業を行い、戦後民主主義的な価値観を受容しやすくするための橋渡しをした作品であると言える。

一では先行研究の確認を通して、戦後の人々が民主的な夫婦関係に憧れを抱いており、そのような夫婦観を日本で違和感なく受け入れるための思想として「恐妻」が用いられたことを指摘する。

二では、本文における「恐妻家」という設定の分析を通して、この小説がどのようにして恐妻と民主的な夫婦関係を結び付けていったかを明らかにする。『三等重役』では「恐妻家」を「愛妻家」「貞操堅固」という特徴と結び付けることで、日米間の夫婦観の差異を埋める働きをしていることを示す。

三では、桑原社長に課された「貞操堅固」という設定の戦後性を、純潔教育における「純潔」と照らし合わせることで明らかにする。

##### 一．アメリカ的夫婦観と「恐妻」

『三等重役』に描かれる夫婦は、ほぼ全篇を通して妻に頭の上がない夫、「恐妻家」として描かれている。宮本小次郎「恐妻・愛妻家列伝」（『サンデー

毎日』一九五二年十二月二十八日号)では、一九五二年に恐妻という言葉・モチーフが「新聞、雑誌映画、放送、レコード等々日本のあらゆる分野」で流行し、『三等重役』は「恐妻時代出現に大きな役割を果たした」と書かれている。

第二章で明らかにしたように、新聞で恐妻が用いられるようになるのは一九五二年三月頃からであり、恐妻をテーマにした映画やレコードの出現も『三等重役』連載終了以降であることを考えると、この作品が契機となり恐妻ブームが起きたことは間違いないだろう。

恐妻というモチーフについては、たとえば「この小説が全国の家庭でひそかに進行していた権力交代劇をはっきりと表面に浮び上らせた」<sup>三</sup>という井上ひさしの意見に代表されるように、日本の家庭において「権力交代劇」が実際に起こっており、それを源氏が写し取り表面化したという認識が一般的である。

しかし近年ミツヨ・ワダ・マルシアーノは平林たい子「恐妻家論」(『中央公論』一九五五年四月号)を参考に、夫と同等もしくは夫よりも強い妻という「女性像は当時の雑誌・新聞によって普及されたアメリカ漫画の夫婦のあり方に影響されたもの」であり、「実際の家庭内の構造や要因からの直接的な反映ではな」と指摘した。<sup>四</sup>

ここで平林の「恐妻家論」を中心に恐妻について考えてみたい。「恐妻家論」とは巷に流行する「恐妻家」像と日本の家庭の実態の落差を論じた文章である。

平林は世間に流布する「恐妻家」像の例の一つとしてチック・ヤング作の四コマ漫画『ブロンディ』を挙げている。『ブロンディ』は、ブロンディという妻とダグウッドという夫を中心に、アメリカの中流家庭の生活を描いた漫画である。日本でも『朝日新聞』(一九四九年一月一日付)〜一九五一年四月十五日付)および『週刊朝日』(一九四六年六月二日号)〜一九五六年十二月三十日号)で連載された。

吉見俊哉が「四〇年代末になると、漫画や広告などのマス・メディアを通じ、人びとはごく身近なものとしてアメリカンな生活像を取り込んでいくようになり、その中でも『ブロンディ』が「戦後日本人の「アメリカ」への憧れを早くから象徴していく作品となった」<sup>五</sup>と指摘するように、一九四九年『朝日新聞』に掲載されたことで『ブロンディ』は広まり、アメリカ文化の象徴として戦後日本人々に好意的に受け入れられたようである。

とくに一九五〇年にはブロンディ関連の映画が立て続けに三本公開<sup>六</sup>された。いずれも製作年が一九五〇年以前であることから、これらの映画は『朝日新聞』に漫画が掲載されたことによって需要が高まったために公開されたものと思われる。

さらに映画の解説においても「チック・ヤング原作の漫画は、アメリカは勿論、戦後の日本にも紹介されて今では老若男女の間にあまねく知られている」<sup>七</sup>と紹介されている。

また、岩本茂樹は掲載時の『ブロンディ』が当時の読者たちにどのように評価されているかを分析し、次のように結論付けている。

当時の人々は特に夫婦関係の妻の位置に最も強い関心を寄せたわけである。そのことから、明確に述べてはいないが、『ブロンディ』に描かれた夫婦関



係から、ぼんやりと「民主的」なもののイメージを見ていたのではないか。夫の位置からは妻が勝利をおさめる家庭が日本において現実化することに居心地の悪さを示しつつも、読者としてはその関係をすこぶる明るく捉えていた。<sup>八</sup>

当時の人々は『ブロンディ』を通して、夫婦の関係に見られる言葉にならない「民主的」なものを強く求めていたと言う。平林が「恐妻家」像を語る際、ジグスやダグウッドといったアメリカ漫画に描かれる夫たちと比較していることから推察できるように、恐妻がアメリカ漫画の夫婦像に影響を受けているのだとすれば、このような「民主的」な夫婦関係への憧れが恐妻ブームを生んだと言えるだろう。実際、当時の「恐妻家」という言葉には「男女同権をみとめる民主主義者」の意味が含まれていたと報告されている。<sup>九</sup>

一方平林は、家庭において妻が権力を握っている状態が日本において騒がれるのは「世間にまだいかに根強く、夫は、尊大にしておるべきものという考え方が残っている証拠」であり、もし日本に恐妻家がいるとすれば、アメリカ漫画の夫たちのように「妻をいたわる」気持ちからそうなったのではなく、「妻の貞節に価しない自己の不品行」という弱味があるために妻を恐れなければならないのだと指摘している。

確かに平林が指摘するように、日本における夫婦の実像と、アメリカ漫画に描かれる夫婦像には隔たりがある。アメリカの夫婦像を知ることによって「民主的」なものを求める感情は生まれても、日本でそれをそのまま受け入れることは不可能である。

しかし、だからこそ恐妻という思想が生まれたと言えよう。恐妻とは女性ではなく男性を指す言葉である。第二章で指摘したように、この言葉は大正時代には既に使われており、当時は妻に明確な問題がある家庭において使用されるという限定的なものであったが、一九四九年の用例では、「恐妻」となる原因を妻側に明らかな欠点や問題を設定することから、夫側の浮気心などによる後ろめたさ・葛藤へと切り替えることにより、多くの夫婦に当てはまるものへと変化させている。平林が言うように日本では「夫が、尊大であるのを妨げる倫理も、経済的基礎も普遍化していない」ために、夫が「不品行」を理由に自らへりくだることで相対的に妻の位置を高め、「民主的」な夫婦関係を築くという形である。

つまり、恐妻とは当時の日本家庭の実態を表した言葉ではなく、日本の夫婦の関係性を対等にしようとする思想の元に生まれた言葉なのであり、夫の「不品行」は日本において違和感なく民主的な関係を成り立たせるのに不可欠な条件だったと言える。

ただし一九四九年の段階では、夫の「不品行」を条件に対等になろうとする動きは見られるものの、恐妻と民主的な夫婦関係を直結させているわけではない。<sup>十</sup>

井上は『三等重役』を「恐妻家の生態をこれほど微細にわたって描出した小説は初めてだった」<sup>十一</sup>と評価しているが、やはり戦後漠然と共有されていた民主的な夫婦関係へのあこがれを恐妻という思想と結びつけて日本人が受け入れやすい形へと書き換え、物語を通して確立していったのはこの小説が最初であると思われる。

それでは『三等重役』がどのようにして「恐妻家」という設定と民主的な夫婦関係を結び付けていったのか、本文の分析を通して明らかにしていきたい。

## 二・『二等重役』に描かれる「恐妻」像

『二等重役』では、最初から恐妻という言葉を使っていたわけではなく、一九五二年一月六・十三日合併号掲載の第二十二話で「嬖天下」から「恐妻家」へと切り替わる形になっている。ただし、源氏自身が連載終了後『二等重役』の根本精神は、恐妻病であつたようです<sup>±</sup>と述べているように恐妻ムードは初期から描かれていた。

とくに、桑原社長が民主的・アメリカ的な価値観に重きを置く社長であるという設定と妻に頭の上がない夫であるという設定は、第二話から第四話にかけて積極的に語られている。

まず第二話「仲人第一号」では、戦前には許されていなかった社内恋愛・結婚を推奨する桑原社長の様子が描かれる。次の引用は社長に社内結婚を考えている社員がいないか聞かれ、浦島さんが答える場面である。

「早速、調査してみましよう。」

「それも早いほうがええな。どうだ、浦島君、昔の社長と違って、わしはなかなか話せるやろが。」

「民主的ですよ。社長は。」

「そうや、その通りや、わッはッは。」<sup>±</sup>

ここからわかるのは鈴木が既に指摘しているように社内恋愛・結婚の推奨が「民主化」の指標として現れ<sup>±</sup>ていることと、桑原社長が「民主的」であることに肯定的な人物として描かれているということである。また、第二話の終盤では頼り甲斐のない男性との結婚を渋る女性社員に対し、浦島さんが「何んといっても女にとって最大の魅力は、財産と嬖天下だ。泳げんぐらい屁の河童さ」と説得する。

この時点では「嬖天下」を使っているが、家庭において妻が実権を握っている状態を女性が結婚するにあたっての「最大の魅力」であるとしている。この場合説得するという目的はあるものの、作中の男性がそういった夫婦関係を受け入れていることには注目しておきたい。

第三話「海の家」の冒頭には、桑原社長が夫人を海水浴に誘うもののスクエアダンスの指導に行くと断られてしまい、娘も出かけているためひとりぼっちになってしまうという場面があり、亭主閑白とは言い難い社長の家庭内の様子が描き出されている。

そして、第四話「社員家族慰安大会」は社員たちが社員家族の慰安大会について話す場面から始まり、その中でなぜ慰安大会が開かれることになったかを説明している。

「秘書の若原の話では、アメリカさんにそんな会社があるんだって。奥さん、貴女もウチの社員です、という見出しで新聞に出ていたんだそうだ。社

長がそれを読んで、すっかり気に入って、愚妻に相談したところ、よろしおまつせ、ぜひやりなはれ、ということになったんだそうだ。」

「なるほど、うちの社長さん、大いにアメリカ式を見習うてはるのやな。そう云えば、嬢天下のところも、よう似てはる。」<sup>十五</sup>

この会話からわかるのは、まず第二話と同じように桑原社長が「アメリカ式」の価値観を積極的に取り入れようとする人物であること、社長の家庭が「嬢天下」であること、そして「嬢天下」が「アメリカ式」の家庭環境として位置づけられていることの三点である。

このように、『三等重役』では社内恋愛・結婚の推奨に加えて家庭において妻が実権を握っている状態であることが戦後民主主義的な価値観として挙げられ、桑原社長はそれらを積極的に受け入れている人物として設定されていることが確認できる。

また、桑原社長は自由恋愛を推奨する一方で「道ならぬ恋愛関係」には断固反対し、不倫をしていた社員を解雇しようとする（第十一話）といった、きわめて道徳的な意識の持ち主として描かれている。自身も女性からの誘惑を受け、「据え膳食わぬは男の恥」という価値観や浮気を男の甲斐性としては認める価値観の中で葛藤するものの、家庭に思いを馳せることによって浮気を回避するという場面がいくつか見られる。（第三章参照）

次に『三等重役』において「恐妻家」という言葉が出現し、その定義が確定するまでを確認したい。『三等重役』では「恐妻家」という言葉を「愛妻家」「貞操堅固」という特徴と結び付け、第二十六話で「恐妻家」の定義付けを行っている。

第二十二話「新年お目出とう」には、秘書の若原くんが浦島家を訪問し、夫妻と会話をする場面がある。

「……」それとも、青子さんが世界中で、いちばん好きだ、と認めるかね。たとえば、僕がこの奥さんがいちばん好きであるようにだ。」

「あなた、それはあたしたちの場合、いちばん恐ろしい、の間違いではございませんの？ はっきり、仰言つたほうがよくつてよ。」

浦島さんはまたしても渋い顔をしなければならなかった。

「何、愛妻家とは即ち、恐妻家なんだから、どっちでもよろしい。どうだね、若原君、認めるかね。」<sup>十六</sup>

ここで初めて「恐妻家」という言葉が登場する。言葉の説明はとくにないが、字義や直前の会話から「恐妻家」が妻を恐れる夫を指していることは推測できるだろう。「嬢天下」が状況を示す言葉であるのに対し「恐妻家」は夫を指す言葉であり、男性が自らの家庭状況を説明する際に適していたことが、表現を切り替えた理由の一つとして考えられる。それに加え源氏は「恐妻家」を「愛妻家」であると言い換えている。

第二十三話「初夢九州路」は、桑原社長が取引先の社長である藤山さんと博多に行くことになり、旅行中に藤山さんの愛妾・おこまから誘惑されるという話であるが、博多へ向かう途中浦島さんがおこまに「うちの社長は、あれでなかなか貞操堅固でしてね。要するに、恐妻家なんです」と話す場面があり、「恐妻家」と「貞操堅固」であることを結びつけている。ここで言う貞操堅固とは、妻以外の女性とは肉体関係を結ばないという意味であり、「恐妻家」と

セットにすることによって、家庭の存在が浮気をしない理由となっている。ここまで「恐妻家」の具体的な説明がない状態で「愛妻家」「貞操堅固」であることと「恐妻家」が結び付けられている。それによって両者が厳密には同義でないにもかかわらず、イコールであるかのように感じられる。そして第二十六話「恐妻家番付」では、「恐妻家」の定義を次のように説明している。

そもそも恐妻家とは何んぞ、という議論になった。それは愛妻家のことである、と前頭筆頭の高野営業部長が主張した。すると、桑原社長がいちばんの愛妻家ということになる、おかしいでは無いか、と異議を申し立てる者が出てきた。新婚の良人は、愛妻家ではあるが、通常、恐妻家では無い。してみると、恐妻家とは、家庭は絶対に破壊したくない、しかし、ちよつとした浮気なら内証でしてみたい、ヘソクリもうんとつくりたい、とまさに虎視眈々たる、そんな不逞な良人どものことでありそうだ。それだから、女房殿がよけいに恐いのだ。七

『三等重役』では「恐妻家」を、新婚期を除いた「愛妻家」であるとした。連載当初から繰り返し描かれているように浮気心やヘソクリをつくりたいという願望は存在し、その願望を抱く後ろめたさから妻を恐れるものの、「家庭は絶対に破壊したくない」ためにそれを実行することは決してない夫たちである。源氏は「恐妻家」という言葉を獲得することによって、初期から描き続けてきた夫たちの特徴を一言で表すことができたと言える。

まとめてみよう。注目したのは二つの点だ。一つは、「恐妻家」が男性自身によって語られる言葉である点、もう一つは貞操堅固と結び付けられている点である。

一点目は『三等重役』以前にも見られる傾向である。当時浮気が男の甲斐性としては認められていた中で、ひととびに浮気をしない夫を描くことは難しいが、男性自らが「恐妻家」を名乗り浮気願望への後ろめたさから妻を恐れる気持ちを表明することは、男性自身が「浮気をしてはいけない」という規範を受容したことを示している。このことは当時の男性にとって大きな変化だったといえるだろう。

また、浮気願望を抱くものの、「貞操堅固」であることを理由に物語内では決して浮気が行われることがないということも重要なポイントである。アメリカ漫画に描かれるような民主的な夫婦関係を築くためには、最終的に「不品行」があつてはならないからだ。さらに、「恐妻家」＝「愛妻家」という構図が示されることや、妻に頭が上がらないながらも家庭を大切にする桑原社長の様子を連載当初から執拗に示すことによってアメリカ的な夫婦関係へ近づけていると言える。

以上見てきたように、『三等重役』では物語内で「恐妻家」の筆頭として挙げられる桑原社長を戦後民主主義的な価値観を肯定する人物として設定するとともに「愛妻家」「貞操堅固」といった民主的な夫婦関係を成立させるために必要な条件と結び付けることで、「恐妻家」に「男女同権を認める民主主義者」の意味を付加することができたのだろう。

ただし、「恐妻家」が男性自身によって語られることに象徴されるように、ここで言う「男女同権」はあくまで男性目線の「男女同権」でしかない。

第三十話「理想の結婚」では同じ職場で共稼ぎをし、家事も平等に行う「男女同権」の結婚生活を送ろうとする社員の話が描かれているが、妻の花子さんが浦島夫人の説得により「奥様稼業専門」になって「ときどき、ヒステリーを起し」つつ、夫を「掌の上で」「あばれさせてやること」が「妻の幸福」だとして退職するという結末になっており、「恐妻家」の家庭こそが理想の家庭として示されている。あくまで仕事は夫、家事は妻という分担を推奨しているのである。

『ブロンディ』の受容にあたり、アメリカの夫婦関係に憧れながらも「夫の家事労働」は避けたいとする男性読者の意見が散見できる<sup>19</sup>が、源氏もまたそのような男性の思いを読み取っていたのかもしれない。

### 三・男の「貞操」と純潔教育

『三等重役』では、「不品行」を恐れずに堂々と愛人関係を結ぶ戦前派の重役たちに対し、桑原社長が決して浮気をせず、「貞操堅固」でありつづけることが部下や戦前派重役からの評価に繋がっている。つまり、『三等重役』では戦前派重役に対抗できる戦後派の新しい価値観として「貞操堅固」であることが採用されているのである。

ここでは桑原社長に設定された「貞操堅固」の新しさを、当時見直しが叫ばれていた純潔教育における「純潔」との整合性を通して明らかにしていきたい。

第二十三話「初夢九州路」『サンデー毎日』一九五二年一月二十日号掲載）では、先述したように桑原社長が「貞操堅固」であることを理由に取引先の社長の愛妾・おこまからの誘惑を退けるといふ話が書かれている。

実はその一月前に掲載された第二十話には脳溢血で倒れた奈良前社長の愛妾・鶴子に言い寄られるという場面があり、第二十一話で浦島さんにその話を振られた際、社長は「しかし、わしは道心堅固であつたぞ」<sup>20</sup>と述べている。おこまと鶴子の状況が似ているにもかかわらず、なぜ源氏は浮気を断る理由を「道心」から「貞操」へと変化したのだろうか。

西村伊作は「貞操と純潔は今日でも必要か？」（『りべらる』一九五一年八月号）という文章の中で貞操の定義を次のように述べている。

貞操は「男女に等しく要求せらるべきものであるが、現在の用法では主として女子に関していはれる語となつてゐる」だから男は貞操や純潔などを守らなければならないことはない。「……」今日でも貞操というものは女の方だけに強制されて居るような風になつて居る。

ここには当時貞操が主に女性に関して使う言葉であつたことが示されている。『三等重役』以前にも瀧井孝作「良人の貞操」（一九三二年）や吉屋信子『良人の貞操』（一九三七年）のように男性に対し貞操という言葉を用いる作品が確認できるが、これらは、その言葉が当時当たり前のものとして使われていた

というよりは、読者の違和感を喚起するために用いられたものであり、男性に対し貞操を使うことに違和感があるという状況は戦後も変わっていないようである。

その中で『三等重役』は中年男性である桑原社長に対し意識的に貞操という言葉を用いながら、社長が浮気心を抱きながらも決して肉体関係にはおよばない様子を描いている。これには男性と貞操という一見結びつかないものを結びつけることによって笑いを生み出す、という目的があったと思われる。

また、貞操は性に関する道徳と言ひ換えることも可能である。女性から受けた誘惑を自らの意志によって退けるという話が補助的なものであった第二十・二十一話に比べ、第二十三話はそれが主要な話題となっていたこともあり、「道心」という漠然としたものから「貞操」へと絞り込んだのかもしれない。

そして、「貞操堅固」という言葉が初めて登場した第二十三話が掲載された『サンデー毎日』の巻頭では、「日本版」春のめざめ<sup>4</sup>として、中高生の妊娠問題を通して純潔教育の見直しを提起する特集が組まれていた。それは香川県で起きた中学生の妊娠中絶事件の概要および詳細と保護者へのインタビュー、純潔教育委員会委員である山室たみの意見の四部で構成されている。

この特集は、直接的には同事件が前年の十二月十三日に『毎日新聞』に掲載されたことを受けて『サンデー毎日』でも取り扱った形であるが、導入部に「文部省も、純潔教育基本要綱<sup>5</sup>を練り直して、今年からいわゆる「性コース」なるものの積極的指導を全面的に展開するという」と説明されているように純潔教育の見直しを図る動きがあったことが特集を組んだ背景にあると思われる。そのような特集とともに『三等重役』で桑原社長の「貞操堅固」な様子が描かれるのは、果たして単なる偶然なのであるのか？

ここで、改めて純潔教育施策の展開について確認しておきたい。敗戦後まもなく治安対策の一環として純潔教育施策が進められる。一九四七年一月に通知された「純潔教育の実施について」を契機として純潔教育委員会の発足（同年六月）、「純潔教育基本要項」発表（一九四九年二月）、また一九五〇年十一月には男女の正しい交際やエチケットをまとめた『男女の交際と礼儀』が発行され、具体的な指導方法が示された。

ようやく「純潔教育」の方針が固まっていく一方で、当時「オトナの良くない行い」に影響を受けたことによる「婦女暴行いせつ的」な「男女あそび」<sup>6</sup>が子供たちの間で広がっており、一九五二年二月八日付『朝日新聞』には「少年少女の性問題」が「国会はじめ各方面に大きくとりあげられ」、文部省が純潔教育のあり方を再検討することになったという記事<sup>7</sup>が掲載されている。

『三等重役』が連載されていた時期はまさに、大人の生活態度に影響を受けた少年の性犯罪が増加したことによって純潔教育が注目され、そのあり方が再検討され始めていた時期と重なっていると言えよう。

中年男性の貞操を描いた『三等重役』と青少年を対象とした純潔教育は一見関連がないように思われる。しかし純潔教育が掲げる「純潔」の定義は奇妙なことに「恐妻家」であるがゆえに「貞操堅固」である桑原社長の特徴にあてはまるのである。

一九四九年六月、委員会により発行された『純潔教育基本要項附性教育のあり方』には「純潔教育基本要項」とともに、医師安藤画一によって書かれた「性教育のあり方」が添えられている。そこで示された「純潔」の定義は次の通りである。

純潔は乱交の反対で、性的交渉に対する制約であり、結婚を条件とするわけです。いいかえれば、性的交渉は結婚当事者間におけるもののみを純潔と認めるのであります。

結婚前の純潔——この場合は、性的交渉の欠如を意味し、男性の純潔を童貞と呼び、女性の純潔を処女と呼ぶ。

結婚後の純潔——この場合は夫婦間以外に性的交渉のないことを意味し、純潔であることを男女ともに貞操と呼ぶ。<sup>二五三</sup>

ここで掲げられた「純潔」の意味合いは、一般に使われる「純潔」と微妙に異なっている。『日本国語大辞典』では「純潔」を「異性と性的な交わりがなく、心やからだだけがれていないこと。また、そのさま」としており、用例として北村透谷「処女の純潔を論ず」（一八九二年）や国木田独步「節操」（一九〇七年）などを挙げている。<sup>二五四</sup>ここで掲げられているように、童貞および処女であることが、本来「純潔」と言うべき状態なのである。

それに対し、安藤は「純潔」を「結婚前の純潔」と「結婚後の純潔」に分けているが、後者の意味での用法は現行の『日本国語大辞典』には取られておらず、この意味での純潔は戦後のごく一時期に使われていたことがわかる。

純潔教育委員会は、純潔教育の方針を固めるにあたって「純潔」という言葉の意味を拡張し、結婚後の性的交渉を規制した。それによって一夫一婦制を成立させるための性規範へとつながったと言える。そして純潔教育で示された「結婚後の純潔」は、「恐妻家」であるがゆえに「貞操堅固」である——家庭の存在を理由に妻以外の女性と肉体関係を結ばない——桑原社長の特徴と合致している。

これらのことから、家庭の存在を理由に「貞操堅固」である桑原社長の姿は、まさに一夫一婦制の枠組みを成立させるために貞操を護る男性の姿であり、純潔教育における「純潔」の体現者であると言える。戦後、源氏は大人の生活態度に影響を受けた少年の性犯罪が氾濫し、純潔教育の重要性が叫ばれていた時代の要請に応じて、第二十三話で「純潔」を実践する大人の姿を描いたのだろう。

また近年、斎藤光は純潔教育の初期条件の設定にGHQが関与していたこと、それによって街娼の出現防止という文部省側の元々の目的に加えて男女平等という理念が純潔教育に組み込まれることになったことを指摘した<sup>二五五</sup>が、当時女性にのみ強制されていた「貞操」を護り通す桑原社長の姿からも「男女平等」の姿がおぼろげながら読み取れるのではないだろうか。

## まとめ

『二等重役』では全篇を通して、妻を愛し家庭を大切にするという要素を強調しつつ、家庭において妻に頭が上まらない桑原社長の姿が描かれている。そしてそのような姿は当時民主的・アメリカ的とされる夫婦関係に近いものであった。

源氏は『三等重役』を連載していく中で「恐妻家」という言葉を獲得したことによって、「愛妻家」であることや一夫一婦制を成立させるための「貞操堅

「固」といった民主的な夫婦関係に基づいた価値観を、日本人が受け入れやすい形に書き換えることができたのではないかと思われる。ストレートに「愛妻家」や「貞操堅固」を掲げるのではなく、恐妻を緩衝材とすることでリアリティを持たせ、日本人に受け入れやすくしたのである。そしてそれは民主的なものに憧れ、欲望した当時の人々に好意的に受け入れられたと考えられる。

ただし、恐妻の流行によって現実に日本で民主的な夫婦関係が成り立ったとは言い難い。一で紹介した「恐妻・愛妻家列伝」では恐妻家と言われている文化人を類型化しているが、そのほとんどは「自己の不品行」の露呈によって恐妻家とならざるを得なかったか、カムフラージュとして恐妻家を名乗っている人物だとされる。また、平林の指摘にもあったように、「夫は、尊大にしておるべきものという考え方」が残っていたからこそ、そうではない状態を描くことによって笑いやゴシップの対象となっていたとも考えられる。

『二等重役』もユーモア小説であるため、右のような要素が当てはまることは否定できない。しかし、本文の分析からも明らかであるように『二等重役』では民主的・理想的な面をより強調した恐妻が描かれていると思われる。源氏は後年、現実の男性との差異を認識しつつも、「清潔」な主人公を描くことをモットーにしていると述べている。<sup>二六</sup>

また、一で挙げた「恐妻・愛妻家列伝」では源氏も恐妻家の一人に挙げられているが、そこでは「女房を大事にした方が家庭円満、天下泰平、諸事好都合」というので、女房を適度に崇めて、夫婦相和している「律義型」の恐妻の「模範的実例」と紹介され、『二等重役』連載終了後には、「源氏鶏太先生を囲んで独身サラリーマン座談会」(『婦人生活』一九五二年七月号)や「たのしい職場を築くための座談会」(『オール生活』一九五二年八月号)といった座談会を通して、どのように正しいサラリーマン生活、夫婦生活を送るかを指導する立場を担うなど、源氏は作品に描かれたような「模範的」な「恐妻家」を実践する人物として位置付けられていく。当時の人々もまた、源氏の描く恐妻像を理想的な夫婦像として捉えていたために、源氏に指導者の役割を期待したということだろう。



## 第三部 階級差をどのように描くか―石原慎太郎『太陽の季節』（一九五六年）

三島由紀夫『美德のよろめき』（一九五七年）――

### 第一章 動機なき行為者をいかに描くか―『太陽の季節』論――

はじめに

石原慎太郎『太陽の季節』（『文学界』一九五五年七月号）は、一九五六年一月に第三十四回芥川賞を受賞し、同年三月に新潮社より発行された単行本は三十万部を売り、一九五六年度ベストセラーズ第一位となった。

文壇内では『太陽の季節』をめぐる、多くの文学者・評論者が雑誌や新聞において論争を展開した。また一方で「慎太郎刈り」という髪型が流行するなど作家自身がもてはやされ、当時の青年が「太陽族」と呼ばれるようになるなど、『太陽の季節』は作品のみならず作家や当時の社会を巻き込む一大ブームとなった。

先行研究は右に挙げたような文壇内の論争やブーム形成といった、作品外部についての論考が目立ち、作品内部を検証している論は決して多くはない。

第一章では、『太陽の季節』の語り手と主人公・竜哉の描かれ方の分析、処女作「灰色の教室」（『一橋文芸』復刊第一号、一九五四年十二月）との比較から『太陽の季節』を考察する。

一では、作品論を中心とした先行研究の分析を通して、語りに着目する必要性があることを確認する。

二では、『太陽の季節』における語り手の特徴と竜哉の描かれ方を考察する。語り手の特徴は「くか」という形を多用することによって竜哉たちの価値観に不確定さを表明しつつ分析や解説を繰り返していくこと、竜哉の考えをめぐる過剰に解説を加えるものの、断定はしないことの二点である。また、竜哉が感情や行動の意味付けを、他者を介さなければ行えない、「考えない」人物として描かれていることを指摘する。

三では、石原慎太郎の処女作である「灰色の教室」と『太陽の季節』を比較し、『太陽の季節』の語りの饒舌さが「灰色の教室」には見られないこと、いずれの主人公も行動することに意味があると考えられるものの、作品内の役割がそれぞれ異なることを指摘する。

これらにより作品読解の必要性を促すとともに、『太陽の季節』が、「灰色の教室」の手法や価値観を受け継ぎながらも、石原作品に頻繁に描かれる行為者讚美思想の体現へ一歩踏み込んだ作品であることを示したい。

## 一・先行研究の分析

二〇一二年、栗原裕一郎と豊崎由美によって「いつも心に太陽を―慎太郎で巡る現代日本文学 60 年史―」というトークイベント<sup>一</sup>が開催され、石原作品の再検討が行われた。栗原が「強烈な存在感を放つてい」るにもかかわらず、「石原の文学が正面切つて扱われたことはごくわずかしかない」<sup>二</sup>と指摘するように、『太陽の季節』発表から六十年近く経過した現在においても、作品そのものが検証されることは多くない。

先述したように、先行研究の多くは作品を取り巻く外部状況の検証・整理にとどまり、近年ようやく『太陽の季節』に関する作品論のほとんどが芥川賞選考時の毀誉褒貶を起点とする現況を一手に集約し、作品の内部を論じるまでの手続き<sup>三</sup>がまとめられたと言つてよい。また、ベストセラーとなった要因が「太陽の季節」が若者の代弁者であると評価されたこと<sup>四</sup>よりも「単なる性風俗的な興味」<sup>四</sup>にあると考えられていたことも、これまで作品内部の検討があまりなされなかった理由の一つであるだろう。

確かに、『太陽の季節』を取り巻く外部の状況が作品の評価や受容に与えた影響は大きいと思われる。しかし『太陽の季節』には、「太陽族」という新語を用いて表現しなければならないような、既存の言葉にはあてはまらないある種の新しい青年像が描かれていた（もしくは描かれているかのように演出されていた）<sup>五</sup> ことには注目すべきだろう。

それでは、先行研究の中から作品の分析を中心とした論をいくつか見ていきたい。

斎藤美奈子は『妊娠小説』において、『太陽の季節』の読後感を「不良少年文学」ではなく「非行防止教育の副読本」のように感じると述べ、その原因が「語り手の「意見」が随所に挿入される点」にあることを指摘している。また、「解説」や「意見」に固執してきた語り手<sup>六</sup>が物語終盤で突如「その両方を放棄」してしまうという「豹変」ぶりについても指摘<sup>五</sup>しており、ここから語り手の特殊性が見てとれる。

また、稲垣広和は拳闘や親子関係という「小説内に配置されたアイテム（小説要素）」の検証を通して、小説内の竜哉たちの行動や価値観は「思春期の若者としては常識的」であり、特別な青年像が描かれているわけではないと述べている。それにもかかわらず彼らが特殊なものとして受容される理由について、「当時の一般的な生活実感からはかけ離れた」若者の経済状況・生活が描かれていることにあると指摘する<sup>六</sup>が、語り手による竜哉の印象操作についても考えていく必要性があるだろう。

さらに、中村三春は語り手の特徴を次のように述べている。

感情の物質化・経済化という性行について、テクストの語り手は再三再四、人物たちの思考を代弁する以上に、また、あたかも主張するかのよう、冷静に、しかし饒舌に語る。もしこれがこの物語内において既に基本原理となっていたら、これほどまでに叙述する必要はなかっただろう。むしろ、それが新たなトピックとして提起されるからこそ、ここまで執拗に述べられるのだろう。<sup>七</sup>

ここでは、語り手の特徴とそれによる作用が的確にまとめられている。『太陽の季節』では、竜哉の行動に対し、語り手が分析と意見（それはたいい「倫理的で分別臭い」「ハものである」）を挟みこむことによって、竜哉が特殊な存在として浮かび上がるという構造になっている。中村は竜哉が「自分で言うほど物質化・経済化されているわけでもない」人物である、とも指摘しているが、そもそも竜哉自身が感情の物質化というものを意識しているかについては疑問である。

そこで今回は、語り手と主人公・竜哉の描かれ方を分析することで、『太陽の季節』という作品の独自性を検証したい。

後述するが、感情の物質化については語り手が若者の価値観を代弁する形で一方的に言及していることであり、そのような価値観を竜哉が持ち合わせているとは断言されていない。また竜哉は、自分の感情や行為の動機を規定しない「考えない」人物として描かれている。竜哉は、自身の行為を他の人物や語り手が判断し、解説することを通してでなければ、心理描写ができない人物として設定されているのである。

## 二・語り手および竜哉の描かれ方の考察

ここでは『太陽の季節』の分析を通して、語り手の特徴を斎藤と中村の論に沿いつつ確認・検証するとともに、竜哉がどのような人物として描かれているかを考察する。<sup>九</sup>

### 【1】語り手の特徴

『太陽の季節』は三人称小説であり、登場人物の考えや行動に対して意見を述べるタイプの語り手が設定されている。その語りには二つの特徴がある。まず一つ目は、斎藤が指摘しているように、語りの中に「くか」の多用が目立つことである。本文より主な文例を挙げる。

①何故彼は、最初英子を抱き上げた時の、あの未知の喜びを大切にしなかったのだろうか。

②その屈辱すらが彼には新しいことではなかったか。

③行為の内でも自分を掴むと言うことは、それが抵抗される時に於いてこそ明確になるのではないか。

例示したように『太陽の季節』では、語り手が解説をする際には「くか」という形（具体的には「ころうか」（十九回）、「くなかったか」（七回）、「くないか」（三回）の三種類）が用いられており、全二十九回使用される（ただし、その内の三回は人物の気持ちを地の文で述べている形である）。後述するが、『灰色の教室』では「くか」という形が用いられているのは約半分の十五回であり、このことから『太陽の季節』では意識的に「くか」という表現が用いられていることがわかる。

斎藤は語り手の意見の多くが「うろうか」なる疑問系の皮をかぶって登場」する理由について「暗に読み手の賛同を要求する」<sup>+</sup>ためであると述べている。しかし、読者が基本的に語り手の判断基準に沿って物語を読み進めることを考えれば、賛同を求めることのみが目的である場合、断定の形であっても十分成り立つのではないかと考えられる。

また、斎藤は「うか」の形について「疑問形の皮をかぶって」と表現しているが、「か」という終助詞には、疑問の意を表すだけではなく、反語や念を押す気持ちを添える場合など、さまざまな用法で用いられる。『太陽の季節』においても用法はそれぞれ異なるが、ただ、「うか」を用いて述べられることのほとんどが、語り手が確定的に述べられない事項であるということとは共通していると言えるだろう。

竜哉をしばしば「少年」「子供」と表現し、「大人」の目の高さから「子ども」の行動を見おろした発言<sup>+</sup>を繰り返す「大人達のモラル」に基づいた価値観を持つ語り手は、竜哉たちの価値観に不確定さを表明しつつ、分析や解説を繰り返していく。むしろ不確定さをあえて表明することによって、断定の形を取るよりも、作中人物の価値観が既存の価値観と異なるものであるということが強調されていくと言えるだろう。

次に、斎藤が「説教臭い」と表現し、中村が「饒舌」と指摘する語り手の解説の過剰さについても確認しておきたい。語り手は竜哉の考えをめぐって、時に過剰なまでの解説を加える。たとえば次のような場面である。

“やはり、俺もこいつを嫌いじゃないんだ”

彼にはこのような行為を尽してでなければ自分に合一したと納得し満足することが出来ないのだろうか。この残忍な方法は、それでも狂気じみた愛の一つであるのだろうか。

いや、彼はそこまで思ってもいないのだ。ただ、竜哉は、自分の好きな玩具を壊れるまで叩かなければ気のすまぬ子供に過ぎないのではなからうか。そして、愛し得た女とは、玩具の我が身に甘んずることが出来るものなのかも知れぬ。

(傍線引用者・以下同様)

石原作品では、人物の気持ちを語り手を通さずに表示し、引用符を用いて表すことが多い。同時期に発表された他の作品では、人物の気持ちが地の文にそのままはめ込まれることも少なくないが、『太陽の季節』にはその傾向はほとんど見られず、多くは語り手による解説がセットになっている。それは行為についても同様であり、竜哉自身が何故そうしたかについては描かれず、語り手の解釈が示されるだけである。

また、傍線で示したように、『太陽の季節』では竜哉の感情の起因を探ろうとするも、打ち消す描写がいくつか確認できる。そしてその形式は全て、「当の自分にもわからないのだ」と結論づけられる。これは、竜哉を行為に理由を伴わない、考えない人物として描こうとしているためであると思うが、このことから、竜哉の行為の理由は語り手によって当てはめられているに過ぎないと言ってしまうだろう。

時に竜哉の考えは、彼と同年代の若者の傾向を代弁することで補填されることもある。

彼にとつて、この猥雑な都会の中で、恋などと言うものは考えも及ばぬことであつた。仮りに一瞬でもそうした憧れを彼が抱いたにせよ、竜哉の周りを通り過ぎた女達は、玄人であれ素人であれ、少年の心のあどけない芽をたちまち無慚に摘み取つてしまふだけではなかつたか。英子自身もそうした女の一人でないか誰か言えよう。

この年頃の彼等にあつては、人間の持つすべての感情は物質化してしまうのだ。最も大切な恋すらがそうでなかつたか。大体彼等の内で恋などと言う言葉は、常に戯画的な意味合いでしか使われたことがない。この言葉は多少くすぐったく、馬鹿馬鹿しい余韻しか持ち得なかつた。それは同じ仲間の内で、驚くべし、未だ女を知らぬ友人に対する揶揄の文句に屢々はさまれるのだ。ある者は言つた。

「あいつは恋なんかしてるから女は知らねえよ」

この場合、竜哉が「恋」を知らないのは、恋という感情を物質化しているためだと語り手は解釈し、その根拠として「彼等」の例を根拠として挙げている。また、同場面では続けて彼らの母子関係や友情、モラルについても語られている。このような箇所が『太陽の季節』が若者の代弁者であると評価された所以であるだろうが、それが竜哉にそのままあてはまるとは言い難い。

「彼等」の価値観が示された後、竜哉の親子関係について述べられるが、語り手は竜哉について「彼等の例に漏れはしない」としながらも、それと合致するのは「彼は母親には甚しく甘つたれつ子であつた」点のみであり、竜哉と「彼等」の価値観が同一であると断定することはない。ここから、語り手が竜哉の考えを断定的に述べることに非常に慎重である様子がうかがえる。

ただし、トランペット吹きと英子の関係について「嫉妬ととらず屈辱と感じた」という叙述が「はた目からは嫉妬と言うべき類であることを示唆する」<sup>十二</sup>ように、また、英子に対する数々の仕打ちが、結局は英子が指摘するように竜哉が女性を「素直に愛する」ことができないが故の行為であるように、語り手の解説を除き、竜哉に関する叙述のみに目を向けて考えてみれば、「純潔な少年小説、古典的な恋愛小説としてしか読めない」<sup>十三</sup>であり、竜哉の行為や感覚は決してわかり得ないものではないだろう。

むしろ、竜哉は恋愛に限らず自分の感情や行為への意味付けを行わない人物として描かれているのであり、竜哉の一連の行為に特殊さや残虐さを読み取り、強調しているのは語り手である。

これらのことから、『太陽の季節』における竜哉や彼を含む若者の新しさは語り手によって形成された部分が大きいと思われる。中村が指摘するように、語り手の述べる事項が「基本原理」ではなく「新たなトピックとして提起される」<sup>十四</sup>からこそ、語り手は彼らの行為や価値観について不確定さを表明しながら執拗に述べているのであろう。

また、語り手と作中人物を同じ目線にするのではなく、語り手が「大人」、竜哉たちが「子供」という関係を明確に形成しているのも、竜哉たちの価値観が未知のものであるということを表明したいがためであると考えられる。そういった語りの操作によって、竜哉たちの価値観が特殊なものとして強調されていると言えるだろう。

## 【2】竜哉の描かれ方

一で、竜哉自身が感情の物質化を意識しているかについて疑問が残ると述べたが、その理由は、竜哉が「考える」人物ではなく、「感じる」人物として描かれている点にある。『太陽の季節』では竜哉の気持ちが表示される際、感じるという言葉が十三回用いられているのに対し、考えるという言葉は三回しか用いられていない。また、竜哉は英子とのやり取りにおいてしばしば自分の感情を振り返り「考える」ことがあるが、それらはいずれも結論にいたらず、わからないままで終わってしまう。

後になってこのことを彼は英子に話して聞かせた。彼女は愉快そうに手を打って笑った。それを見ると彼も釣り込まれて嬉しくなり、もう一度満足したのだ。

「あーら、竜哉、あんた妬いてたのね」

彼女はそう言うと、新しい発見をしたように又笑ったのだ。

“俺は妬いていたのだろうか”が、そんなことはどうでも良い。

“俺は奴を殴り倒して痛快だった。英子は笑っている。これでさっぱりしたんだ”

あの男を殴った時、自分が本当に何を感じていたかは彼にもわかりはしない。そんなつまらぬ詮索で、あの行為に後からどんな意味を持たせたとところで何になろう。彼はただそうしかったから思い切り行って満足するのだ。彼にとって大切なことは、自分が一番したいことを、したいように行っただけだ。何故と言う事に要はなかった。行為の後に反省があつたとしても、成功したかしなかったかと言うことだけである。自分が満足したか否か、その他の感情は取るに足らない。それ故彼は、“悪いことをした”と自らを咎めることがなかった。彼には罪を冒すことが有り得ないのだ。が人々はその行為の形により彼を判断する。彼はその内容によって自分をとらえる。

傍線部に示されるように、竜哉が行動する際は「自分が一番したいことを、したいように」行っただけで、そこに明確な理由はない。英子が「笑っている」のを見て自分も「嬉しく」なる、とあるように、竜哉の感情は常に外部からの刺激によって与えられるものである。また、自らの行為の動機においても、行為後の他者の反応を元にとらえる人物として描かれている。

竜哉が外部からの刺激（他者の反応）を通してでなければ自分を掴み取るこのできない人物であることは、冒頭の表現からも読み解くことができる。

竜哉が強く英子に魅かれたのは、彼が拳闘に魅かれる気持と同じようなものがあつた。

それには、リングで叩きのめされる瞬間、抵抗される人間だけが感じる、あの一種驚愕の入り混った快感に通じるものが確かにあつた。

磯田光一は、この文章について受身の助動詞が多いことを指摘するとともに、それが「つねに「自己」にたいする「他者」を前提とした」<sup>15</sup>ものであることを示す。中村が指摘するように、この文章は決して「文法的に見て規範的ではない」<sup>16</sup>が、作者は受身表現を多用することで、竜哉の人物像を示したかったのではないかと考えられる。後述するが、拳闘部員であることも、作者が描こうとした竜哉の人物像を示す重要な要素であると思われる。

さらに、竜哉が行為に及ぶ動機も、「したいこと」をしているというよりは、「アメリカの拳闘映画」や「活劇映画」などといった外からの刺激に影響を受けるか、そうでなければ無意識的に行われることが多い。本文中には、竜哉の行動を示す際「思わず」や「慌てて」といった衝動的な様子を表す言葉が挟まれる場面がいくつか確認できる。

また、「何故か」という無意識的な言葉とともに竜哉の感情が表される場面も七箇所確認できる（そしてそれは全て英子とのやりとりの中でもたらされる）。このように、竜哉は徹底して考える前に行動する存在として描かれている。「行為の内自分を掴むと言うことは、それが抵抗される時に於いてこそ明確になるのではないか。少なくとも竜哉にはそう感じられる」という文章に示されるように、自発的に考えることが出来ない竜哉は、外部からの刺激（他者の反応）によってしか自分を掴みとることができない。

このような「正しいかどうかかわからないが、自分のしたいことを、すべてを賭けて行なってみる」<sup>17</sup>という人物像は石原作品において理想的なものであり、その傾向は「灰色の教室」の段階から確認できる。『太陽の季節』もまた、そのような「自分が一番したいことを、したいように」行う人物の描出を目的として描かれたのではないだろうか。

ここまで見てきたように、『太陽の季節』に描かれる若者の価値観は、それ自体が特殊なものとして存在するというよりも、語り手によって特殊なものとして強調されていることがわかった。このことから、『太陽の季節』は語りの操作が確認できる作品であり、語りの特殊性に着目しつつ、作品内部を詳細に検証していく必要があると思われる。

また、主人公である竜哉は外部の刺激によって感情が生成され、感情や行動の意味付けも他者を通さなければ行えない、「考えない」人物として描かれている。これまで、『太陽の季節』に描かれる新たな若者像は、語り手によって直接的に示される「感情の物質化」が中心に考えられることが多かったが、竜哉に与えられた知的なものを否定する「考えない」人物像は、石原作品において繰り返し描かれてきたものであり、石原作品を再検討する際重要な要素である、と言えるのではないだろうか。

### 三、「灰色の教室」との比較

ここでは石原慎太郎の処女作である「灰色の教室」の主人公・義久の描かれ方を確認し、『太陽の季節』の竜哉と比較していきたい。十

再度確認するが、「灰色の教室」は一九五四年十二月、『一橋文芸』復刊第一号に発表された。そこに描かれた檉野のエピソードを元に「太陽の教室」が描かれたことや、「灰色の教室」の主人公・義久と美知子の間に描かれる、男性が女性を踏みにじることによって愛情を確認する関係性や、最終的に女性が妊娠し、中絶もしくは流産するという物語の展開が『太陽の季節』の竜哉と英子に類似していることから、「灰色の教室」を手がかりとして『太陽の季節』に描かれた要素を検証する必要があると考えた。

義久の描かれ方を見ていく前に、語り手の問題について、簡単に述べておきたい。「灰色の教室」も、『太陽の季節』と同じく三人称小説であり、登場人物の考えや行動に対して意見を述べるタイプの語り手が設定されている。また、「二」で述べたように「灰色の教室」の語り手も、『太陽の季節』同様「くか」の形を用いることで若い世代の新しい価値観を浮かび上がらせている。

ただし、「灰色の教室」と『太陽の季節』はほぼ同等の文章量であるにもかかわらず、「くか」の形が用いられるのは『太陽の季節』の約半分にあたる十五回である。しかも、そのうちの八回は地の文に示された義久の思いの中で語られるため、語り手自身によって「くか」の形が用いられるのは全部で七回ということになるだろう。繰り返すが、このことから語り手が不確定さを表明しつつ断定していくという手法は、『太陽の季節』において意識的に用いられただものだと言えるだろう。

「灰色の教室」では不確定な表現があまり用いられないかわりに、地の文において義久の考えや思いが断定的に述べられる場面が多く見られる。考えずに行動する竜哉に比べ、義久は嘉津彦の自殺の動機や美知子との関係、赤ん坊のことなど、常に考えた上で行動する人物として描かれている。また、義久が地の文で考えを述べる際、非常に多弁であることは注目すべき傾向であろう。これは『太陽の季節』の語り手の特徴と重なっていると言える。

次に義久の描かれ方を中心に、『太陽の季節』との違いを考えていく。

まず、義久と竜哉はともにスポーツマンとして設定されている。スポーツマンが主人公に据えられる理由は、作者の行為者を讃える傾向や、男性優位主義的な価値観にあると考えられる。しかし、義久は野球、竜哉は拳闘とスポーツの種類は異なる。なぜ竜哉を拳闘部員に設定する必要があったのだろうか。

義久は、丘下の学生町の行きつけの小さなレストランで昼食をとるためにゆっくり坂を下って行った。道々やはり彼もあの不可解な嘉津彦の自殺について考えてみるのだ。人間の行動の裏には、どんな意味でも動機の無いと言うことが有り得るだろうか。ただ、それが他の人々に理解され得るか否かと言うことは別として、当人にすらそれが見当らぬと言う人間の行動とは、スポーツの瞬間的な体のかわしと言った位しか無いのではないか。

『太陽の季節』に拳闘を取り入れた理由は、しばしば当時の流行を取り入れたためだと指摘されることがあるが、右に述べられるように、動機の見当たら



ぬ人間の行動とされる「瞬間的な体のかわし」をメインとしたスポーツを選択することで、竜哉が無意識下で行動する（もしくはそれに惹かれる）人物であることを示したかったためではないかと思われる。

また、彼らはいずれも行動することに意味がある、という価値観を有している。

義久はスポーツマンらしくその言葉を受け取って考えた。

そんなものだろうか。しかしこんな場合どうなのだ。彼等が試合の組み合わせで運悪く全く実力の違った相手とぶつかった時、その勝負は見えていても彼等はそれを投げ出しはしまい。たとえそれが子供っぽい意気込みに過ぎぬとしても、やってみなければわからないのだ。そして結果は予期した通りの惨敗であつたにせよ、精一杯やったと言う事実は、ユニホームの汗のしみのように後々まで残るわけだ。

井戸だつてそうではないか、水が出なくても手で掘った千米の深い穴があると言うことは、水が出たにしろ出ぬにしろ、人間にとって何か大したものではないだろうか。

義久はそう考えたが、生意氣なことを言うようで黙っていた。

（傍点本文）

これは、前述したように多くの石原作品で示される価値観であるが、この価値観が「灰色の教室」の時点ですでに示されていたことがわかる。行為者讚美の思想とその実践は、「抵抗だ、責任だ、モラルだと、他の奴等は勝手な御託を言うけれども、俺はそんなことは知っちゃいない。本当に自分のやりたいことをやるだけで精一杯だ」というエピソードで始まる「処刑の部屋」『新潮』一九五六年三月号）とその主人公・克己によって一つの到達点を迎えるが、「灰色の教室」の段階では、行為者讚美の思想は示されるものの、それを実践する人物像は描き切れていなかったと言つていいだろう。

義久は自殺を繰り返す嘉津彦の行動の動機を「考え」ながら、最終的に「自分の取った一つの行為の結着の為に、血だらけになって苦悶する嘉津彦の姿」に感動を覚え、行為の重要性を実感し、美知子との間に出来た「赤ん坊」を生み育てる決意をするものの、美知子の転倒・流産によって実行されることがないまま結末を迎えてしまう。

今回は義久と竜哉を比較することを目的としたが、「灰色の教室」ではむしろ嘉津彦に行為者としての役割が課せられている。嘉津彦は二度自殺を図る（作中では二度目と三度目の自殺について描かれる）が、それは「誰にも漠然とすら動機の掴めぬ自殺」であり、嘉津彦の口から明確な動機が述べられることはない。

さらに、二度目の蘇生から三度目の自殺を決行するにあたっては、蘇生の知らせを聞き「白け」るクラスメートの様子や、嘉津彦が自殺を決行しなければ

ばならない状況に追い込まれる様子が詳細に描かれている。そのような場面を通して、彼の自殺が行為のための行為となっていく様子がきちんと書きこまれており、嘉津彦が動機なき行為者となっていく様子が読者にも納得できる形となって現れていく。動機のない行為を自覚的に行うか無自覚的に行うかという違いはあるが、竜哉は義久よりも、嘉津彦に近い存在として考えるべきであろう。

一方、義久は嘉津彦に影響を受け、行為者の思想を理解・讚美し、最終的には実践しようとする人物として描かれている。また、それと同時に嘉津彦の行為を分析し、解説する人物としても描かれている。

このことから、「灰色の教室」の嘉津彦（行為者）―義久（解説者）の構図は『太陽の季節』竜哉（行為者）―語り手（解説者）と重なると言ってよいだろう。『太陽の季節』では「灰色の教室」の構図を引き継ぎつつも、行為者を主体とした物語を描こうとしたのではないだろうか。

ここまで、「灰色の教室」と『太陽の季節』を比較した。その結果、「二」で分析したような語り手の特色は、『太陽の季節』独特のものであることがわかった。また、「灰色の教室」では動機なき行為の存在に疑問を抱いていた義久が、自殺未遂を繰り返すことで動機なき行為を体現する嘉津彦を通して、行為の重要性を認識する展開となっているが、「灰色の教室」の嘉津彦と義久の関係性が、『太陽の季節』の竜哉と語り手の関係性に引き継がれていることも確認できた。

作者は「灰色の教室」では動機なき行為を目撃した人物たちの反応・解釈ということを中心に描いたが、『太陽の季節』では動機なき行為者をいかに描くか、ということを中心としたのだろう。それ故竜哉は徹底して考えない人物となつたのであり、また、行為の動機が竜哉自身にも「わからない」のだと結論づけるために、作中人物ではなく、全知の視点を持ちうる語り手に解説をさせる必要があつたのではないだろうか。

ただし、竜哉が考えない人物であるということは、竜哉の側に沿った心理描写が不可能になることを意味する。そのために、語り手は不確定な事項であることを強調しながら、執拗に解説を重ねていくのである。昭和三十二年に発表された「完全な遊戯」『新潮』十月号）について栗原は「人間らしい感情を完全に消去したとき、どういふものが出てくるかという一種の実験が行われている」<sup>19</sup>と指摘しているが、『太陽の季節』もまた、衝動的な感情によってのみ行動する動機なき行為者をいかに描くかという実験的な小説であると言えるのではないだろうか。

## まとめ

第一章では、語り手と竜哉の描かれ方の分析を通して、『太陽の季節』の読解を試みた。『太陽の季節』は若者の価値観を代弁しているというイメージが強く、また、現実取材しているというエピソードもあることから、若者の価値観を無計画に描いていると考えられがちであったが、実際は、語りによってそこに描かれる価値観が特殊なものとして浮かび上がるよう、巧妙に操作された作品であることが確認できた。

また、竜哉は、語り手によって感情を物質化してしまう人物として規定されるが、実際は、感情や行動の動機付けを、他者を通さなければ行えない、考えない人物として描かれている。そしてそれは作者が処女作から描き続けてきた行為者讚美の思想を体現する人物であつたと言えよう。『太陽の季節』は「灰

色の教室」で示された、解説者が行為者の行動や考えを解説することでその特殊さを浮かび上がらせるという構図を引き継ぎつつも、解説者を作中人物ではなく全知の視点を持つ語り手に据えることによって、作者が理想とする動機なき行為者を描こうとした作品であるのではないだろうか。

## 第二章 上流階級意識のよろめき―三島由紀夫『美徳のよろめき』論―

はじめに

三島由紀夫『美徳のよろめき』『群像』一九五七年四月六月号）は倉越節子の婚姻外の恋愛を描いた小説である。

同年六月に発行された単行本は三十万部を売り、一九五七年度ベストセラーズ第四位となった。この小説をきっかけとして「よろめき」という言葉が妻の浮気を指す言葉として使用されるようになり、不倫をする（もしくはそれに憧れる）妻たちを「よろめき族」と称するなど、作品のみならず当時の社会を巻き込む一つのブームとなった。また、『美徳のよろめき』をきっかけにいくつかの姦通小説論が現れるなど、文壇内においても一石を投じた。

しかし、作品を読んでみると「よろめき」という言葉は本文中で一度しか使われておらず、その意味も妻の浮気を意味するものではない。タイトルに使われている「よろめき」も単純に考えれば「美徳」にかかっているものであり、「美徳」が何を表しているかによって「よろめき」の意味は大きく変わってくると言える。

そこで今回は、本文の分析を通して「美徳のよろめき」というタイトルが一体何を表しているのかを再考したい。

一では、「よろめき」が妻の浮気を表す言葉として流行語となり、定着したのに対し、『美徳のよろめき』本文では、足もとがふらつく、という本来の意味でしか用いられていないことを確認する。

二では、本文における「美徳」の使われ方を分析し、本文中の美徳がほとんど節子の美徳を指すことから、節子の階級設定によっては中流階級の「な道徳」とは言い切れないことを示す。

三では、本文（主に第一節）の分析を通して節子が旧上流階級であり、上流階級意識を抱いた人物として設定されていることを確認する。それに対して語り手は中流階級的な目線から節子を語ろうとし、“語れない”ことを通して節子の価値観の特異さを示そうとしていることを指摘したい。

### 一．「よろめき」について

ここでは、「よろめき」の流行語としての意味と、本文の使われ方の違いについて確認する。

「よろめき」という言葉は、元々「よろめく」＝「足どりがふらついてよろよろする」という意味する言葉であったが、『美徳のよろめき』のベストセラー化をきっかけとして「妻が夫以外の男性にときめきを感じたり、誘惑されて浮気をしたりすること」という意味が付け加えられた。二『美徳のよろめき』には、妻が夫以外の男性と不倫関係に陥るものの、最終的には夫に発覚する事なく自らその恋を終えるという物語が描かれている。そのような物語の展開と、足もとが不安定になり、ふらふらしてしまうという意味の「よろめく」という言葉が合致したために、右のような新しい意味を得たと言える。

また、作品のあらすじとタイトルの合致だけではなく、当時の性をめぐる状況が、この言葉の流行語化を後押ししたと言える。中元さおりは「三島由紀

夫「美德のよろめき」論―「よろめきブームから読む」の中で、よろめきブームが起きた背景の一つに、一九四七年に姦通罪が廃止されたことにより、戦後、大衆小説の分野で姦通を題材にした作品が増加したことを挙げている。<sup>三</sup>中元が指摘するように、姦通を題材にした作品は当時としても、文学作品の中でも決して珍しいものではなかった。それではなぜ一九五七年に発表された『美德のよろめき』が、文壇内や社会で大きな話題になったのだろうか。

『美德のよろめき』には姦通が描かれていながら、これまでの姦通小説と条件が異なると考えられたために話題になったのである。この小説をきっかけとして、いくつかの姦通小説論が発表されたが、『美德のよろめき』に対する評価はいずれも、行為としての姦通は描かれるものの、姦通に対する罪の意識が描かれていないために、姦通小説に当てはまらないとするものである。

たとえば山本健吉は「姦通小説論」『群像』一九五七年十一月号において「さいきん、姦通小説を一つの典型的な形で日本にもあらしめようとした三島由紀夫氏の『美德のよろめき』は、夾雑物なしに純粹に姦通そのものを、その発端から終局まで、全体として描き出そうとしたもの」であり、「姦通という、少くとも小説的にはヒロイックですらある一つの行為を遂行しながら、どこにも敵対物、障害物を見出だすことができない」と述べ、「少しもやましい思いを伴なうことなしに姦通が行われるとき、姦通小説は成立しない」と述べる。

十返肇も「なぜ姦通小説が流行するのか」『婦人公論』一九五七年十一月号において「姦通者のもっている罪の意識やおそれがまた、この不自然で暗い関係を、たてえようもなく魅力的なものとするのだ」と述べており、これまで姦通罪が存在していた中で、姦通をテーマにした小説を成立させるにあたっては、姦通への罪の意識が必須であったと指摘する。

平林たい子は「姦通論」『群像』一九五八年二月号において、姦通罪の廃止によって人々の姦通に対する罪悪感が薄まったとし、『美德のよろめき』を「現代の姦通の特徴」を描いた物語であるとする。

実際、当時は「夫婦の不貞問題やそれにまつわる性の解放に大衆の関心が向かっている状況」<sup>四</sup>であり、週刊誌や女性誌において夫婦間の浮気の問題が実際に起り得る、もしくは起こっている問題として多く取りざたされるようになっていた。

よろめく、とは元々足もとが不安定になることであり、決して転ぶわけではない。姦通罪の廃止から十年が経ち、婚姻外の妻の恋愛が罪に問われることがなくなったことで「刑罰をとまなつて貞節の美德を強制する重苦しいことば」であった「姦通」に代わる言葉が求められる中で、「そういう行為の軽さ、遊びや享楽を含んだちよつとした出来心を伝えて妙だった」<sup>五</sup>からこそ「よろめき」という言葉は人々に受け入れられ、流行することになったのだろう。

それでは、三島は自身の小説から発生した「よろめき」ブームをどのように捉えていたのだろうか。三島は『美德のよろめき』単行本が発刊された翌月の一九五七年七月九日から翌年一月十日まで、ドナルド・キーンによる英訳『近代能楽集』を出版するクノップ社の招待を受けて渡米していた。そのため「よろめき」が流行語となった時期には日本におらず、帰国後ラジオ番組に出演した際に次のように述べている。

——三島さんの小説ぢやないんですがね、その、いきなり「意味のない笑ひ」なんです（笑）なんでも聞かれたと思ふんですが例の「よろめき」と

いふ言葉が、ゐない間に大変はやつちやつたんですが……

あれは僕、向うでね、日本の新聞なんか見るチャンスがあつたし、日本からくる人が「よろめき、よろめき」つていふからね、何のことかと思つたら僕の小説から出てゐるんでしょ。でまあ、いま帰つたら大変だわいと思つてたんですよ。六

ここからは、妻の浮気を意味する言葉として「よろめき」という言葉が流行したことに對し、三島が驚いている様子がうかがえる。この反応を見ると、「よろめき」が妻の浮気を意味する言葉として流行したことは、三島自身にとって想定外のことであつたかのように思われる。

海外滞在中にブームが起きていたことから、「よろめき」の解釈についてブーム形成時に三島が意見を述べることはなかったが、一九五九年三月に「不道德教育講座」の中で「よろめき」という言葉について「妻がよろめいた。というとき、あの変り者の小説家の用語では、妻が他の男と肉体交渉を持ったことを意味します」七と述べている。

これは一見、三島自身が作品内で「よろめき」という言葉を妻の浮気を意味する言葉として用いていたことを認めているように思えるが、「変り者の小説家の用語では」と、距離を置きながら追認する形をとっている。

実は『美徳のよろめき』の本文中では「よろめき」という名詞形は用いられていない。また、本文中で「よろめく」という言葉が使われているのも「今度十屋と逢ふときまでは子供を随すまい。手術のあとのよろめく体で逢ひたくはない」(第五節)という文のみである。これは節子の体が手術後で安定しない、倒れそうな状態であることを意味し、「妻が他の男と肉体交渉を持ったこと」を意味するものではない。

稲垣吉彦は「よろめき」が流行語化した原因を、次のように述べている。

またこのことばはさうとう幅広い意味で使われた。あやしく揺れる心ときめきといった心理的動揺レベルから、決定的な不貞行為までのすべてを含んだ、とりよつては如何様にもとれることばとして通用した。これが流行語化の現象で、本来の意味がぼやけて、各人各様の解釈を受け容れる。感覚次元のことばに転化するのである。さうしてこそ幅広い応用に耐えうるわけでもあらう。八

稲垣は「よろめき」を「浮気、姦通、不貞の意味」であるとするが、先に述べたように三島は作品内でそのような定義を述べていたわけではない。人々は『美徳のよろめき』というタイトルから「よろめき」の意味を連想・解釈するしかなかったと言える。

「よろめき」という言葉の流行時の用例を見ると、雑誌メディアが「よろめき」を妻の浮気や不貞を意味するものとして喧伝していたのに対し、新聞では「日本経済の繁栄も、よろめきははじめた感じである」(『繁栄のよろめき』『朝日新聞』一九五七年八月五日付)や、「勤務評定問題で」よろめいていゝとカゲロをたたかれ出した松永文相を、自民党は五日の総務会によび出して「シッタ激励した」(『松永文相』「よろめき説」を否定)『朝日新聞』同年

十二月六日付)のように、経済や政局に関する不安定さを表現する際に用いられている。

このことから、『美德のよろめき』が流行する初期の段階においては、「よろめき」は足元が不安定になるという本来の意味を失っていなかったと言える。そもそも『美德のよろめき』というタイトルから単純に考えれば、「よろめき」という言葉は「美德」にかかっている。「美德」とは「道徳」になった立派な行ない。また、よい心<sup>九</sup>を意味するが、「道徳」の規準が何であるかによって意味は大きく変わってくると言える。

小笠原賢二は『美德のよろめき』が題名の上手さとは裏腹に「難解であり、必ずしも口当りが良いというわけでもない」とし、その例として節子が「反時代的な女性」であることを挙げている。

節子は享楽に身を任せているようでないが、時代を容易に受け入れようとはしない。むしろかたくななほどに自分の強固な城を築き、現実から一線を引こうとしている。節子は優雅に暮し自由にふるまっているか見えながら、本当に人生を楽しんでいるわけではない。ここから窺えるのはむしろ苦しい表情である。作者の三島が、サービスのポーズを取る一方で、窮屈で退屈な時代に呑みこまれまいとして構え緊張する表情が透けて見えるようだ。「よろめき」とは不倫のことであるよりも、節子を半ば強引な理論や観念で武装し操作する三島の手つきのあやうさの如くに思われもする。<sup>+</sup>

私たちが「美德」と聞いたときに頭に浮かぶのは中流階級的な価値判断による良い道徳である。そこから『美德のよろめき』というタイトルを聞いたとき、たとえば「不倫をしてはいけない」というような「美德」が「よろめ」いたと考えがちである。

しかし、作品内で語られる「美德」のほとんどは節子の「美德」である。節子が同時代の枠から外れた反時代的な女性であるとするならば、作品で述べられる「美德」がどのようなものであるかをいま一度検討する必要があるだろう。

本文中では節子の階級の高さが語り手によって執拗に語られている。タイトルに掲げられる「美德」が、上流階級に属していた節子から見た「美德」であるとすれば、『美德のよろめき』は、節子がよいと考えていた上流階級的な意識や価値観が、土屋との「恋」を通して中流階級的な価値観へと「よろめ」く物語であると考えることができのではないだろうか。

## 二.「美德」について

ここでは、『美德のよろめき』の代表的な先行研究の一つである田中美代子「聖女の午後——「美德のよろめき」論」において「美德」が中流階級的な価値判断による正しい道徳と考えられ、その考えが本文の分析にも応用していることを確認する。また、本文における「美德」の使われ方の特徴をまとめ、『美德のよろめき』では節子の「美德」と世間的な「美德」が異なったものとして語られていることを指摘したい。

田中美代子「聖女の午後——「美德のよろめき」論」では、「美德」について次のように述べられている。

箱入娘から良妻賢母へ——誰が何と云おうと、これが今なお社会の良識がこぞって期待する女の理想像である。家庭婦人は、この線上を歩むときまさしく「美德」の化身だ。<sup>十一</sup>

田中は「美德」を、社会の良識からみてよい、美しいとされる行いと定義している。「良妻賢母」であることを「美德」の一つの例として挙げていることから考えると、田中が言う社会とは、中流階級的な価値判断を基準にした社会であると考えてよいだろう。

他の先行研究においても「美德」が用いられる時は、中流階級的な価値判断による正しい道德の意味で用いられている。

田中はその基準を元に『美德のよろめき』の節子を分析し、「節子はごく平均的、最大公約数的な日本人の道德観念の持主にすぎなかった」とする。そして「美德」に関しては、「つまり彼女のいう「美德」とは、外観のみに拘わるものにすぎない」と節子の言う「美德」は単に社会慣習としての秩序への順応および対世間的な徳目である「礼節」に近いものだった」とする。

田中は、節子もまた「良妻賢母」が「美德」とされるような価値観を元に「美德」を捉え、語ろうとしているものの、節子自身の能力の不足などにより、そこから外れてしまっているという見方をしている。

次に本文において「美德」がどのように使われているかを確認していく。

本文では、道德に関連する言葉が三十八回用いられている<sup>十二</sup>が、その中で、「美德」という言葉は十一回用いられている。今回は「美德」に限定して分析するが、「美德」に限らず道德に関連する言葉はすべて語り手の語りの中で用いられており、誰の道德について語っているかは、ある程度判定が可能である。「美德」が用いられている文章は、次の通りである。

①節子にとつては自分の官能的な魂を満足させないことが必要であつた。そこでいつまでも、自分の寛容な美德にたよつたのである。(第五節)

②節子のあまり深くものを分析しない思考の中では、彼女が今まで永いこと大切にして来た婦徳は、その実かなり曖昧な定義をつけられてゐた。空想の領域はまだ美德に属し、現実は悖徳に属してゐた。(第七節)

③どんな邪悪な心も心にとどまる限りは、美德の領域に属している、と節子は考へてゐた。(第七節)

④彼女は冷たい打算や身勝手な計画を美德と見なし、やさしさ、自然さ、無邪気さ、などの明るい感情を、悪徳と感じなければならなかつたからである。(第七節)

⑤そしてきびしい反省の数時間のあひだは、今は失はれてしまつたあの空想上の無害な快樂、ほしいままな美德のたのしみばかりを惜しんでゐた。(第七節)



⑥良人が望まなくても、貞節と美德の本質はさういふものであり、むしろ節子自身のためのものだ。 (第七節)

⑦節子は思ふのであつた。美德はあれほど人を孤独にするのに、不道德は人を同胞のやうに仲良くさせると。 (第十節)

⑧ロマンチックな考へと表裏して、彼女は自分で裏切つた美德の報いをそこに見て、それを葬り去らうとしてゐたのである。 (第十三節)

⑨⑩与志子は女にはめづらしい美德を持つてゐた。聴手になることのできるといふ美德を。 (第十四節)

⑪彼女は新聞種になるやうに生れつゝいた女ではなかつた。藤井家の平和な、明るい、道徳的な一族、矩を超えようともせず、欲望に煩はれもしない一族、退屈に苦しめられない心、不まじめな事に身を賭けたりしない堅実さ、さういふものは又節子のものであつた筈だ。事実恋をする前の節子は、さういふものに何の抵抗も感じてゐなかつた。

この日の午餐で節子ははつきり別れる決心がついた。

彼女はすでに偽善を意識して、それを愛して、それを選んでゐた。偽善にもなかなかいいところがある。偽善の裡に住みさへすれば、人が美德と呼ぶものに対して、心の渴きを覚えたりすることはなくなるのである。望むらくはそれがまた、あらゆる渴きを止めて……。 (第十八節)

(傍線引用者・以下同様)

「美德」という言葉を使う前には必ず「節子にとつては」(①)や「節子は思ふのであつた」(⑦)という文が伴っており、誰の美德かが明確にされている。そしてほとんどは節子の美德、道徳について語っている。

ただし、美德については例外が三つあり、それが⑨から⑪である。⑨⑩は一般的な「よい行い」の意味で使っており、対象は節子の友人である与志子である。

⑪の場面は、節子が、機智やユーモアのない父との会食・会話を通して、自分が一年の不まじめな情事に揉まれて機智に疲れたことに気づき、土屋との別れを決意する大事なシーンである。いわばよろめいていた彼女が、「偽善に馴らされ」た(第一節)もとの自分に戻ることを決心するシーンであるともいえるが、ここで語り手は、節子に対し「偽善の裡に住みさへすれば、人が美德と呼ぶものに対して、心の渴きを覚えたりすることはなくなるのである」と述べている。

ここである「人」とは「世間の人」を意味すると思われるが、あえてその言い方することによって、節子の考える「美德」と明確に区別している。そしてこのことは、節子の考える「美德」が世間的な「美德」、中流階級的な価値判断に基づく「美德」とは異なることを意味するのではないかと考えられる。

田中は、⑪の場面について分析し、「皮肉にも節子は、おのずからなる生の流露としての正しさによって、既成道徳の枠内に身を修め、確乎として生きた父の側に身を寄せることによって、辛くも救いの契機をつかむ」と述べているが、節子が「偽善の裡」に住むことを選んだことは、はたして「既成道徳の

枠内に身を修め」ることと同義なのだろうか。

この文章の解釈は、節子の父・景安をどう捉えるかによって大きく変わってくると言える。

節子の父に関しては「彼の生涯には、どんなに虫眼鏡で探してみても、一つの政治的変節、一つの私行上の悖徳も見当らなかった」「あらゆる点から見て申し分のない人格の持主だけにふさわしい、国家の正義を代表するような地位に就いていた」(第十八節)とあり、道徳に背いたことがなく、背くことも許されない人物として紹介されている。

田中はそこから、節子の父に「日本人における『道徳』の本質」や「高潔」さを読み取り、「ともかくこの高潔の人を、目前の汚辱から救うのは、娘のためではなかったろうか。彼女の使命は、それならば、永久に隠し通すこと、そして、『美徳』の陰に逃避することのほかにはない」と指摘する。この考えを元にすれば、確かに「偽善の裡に住」むことは不倫をしたことを隠して生きていくことを意味することになり、「既成道徳の枠内に身を修め」ることも同義となるだろう。

しかし、父の人物像は、あくまで語り手の語りの中で紹介されているのみであり、読者に向けての紹介ではない。節子が父との会話を通して感じ取っているのは、むしろ「景安のただ一つの欠点」といえる「会話にユーモアと機智のないこと」である。それによって節子は自分が生まれ育った「平明な藤井家の空気を思い出し」、自分が「機智に馴染まぬ生れつき」(第十八節)であることに気付くのである。

また、ここで、「偽善」の意味についても考えておきたい。

「偽善」という言葉はこの作品においては右の引用部と冒頭部にしか出てこない。「偽善」は通常、善良であると「偽る」ことを意味するが、冒頭部で、ウィットを持たないことと偽善に馴らされていることが結びつけられていることから、この物語においては、節子がウィット＝機智を持たない人物であることを「偽善」という言葉で表しているのだと考えられる。

機智を認識している立場から見れば、節子の状態は、何か考えがあるにもかかわらずそれを隠し、偽っているように見えるが、実際には、節子は気の利いた会話や文章を生み出す能力に欠けており、偽る内実すらないのである。そしてそれは節子の出自が「とりわけ上品な一族」(第一節)であったことに由来する。節子は考えたり、自己分析をする必要のない「幸福な種族」(第十六節)に属していたのである。

しかし、父と会食をしている段階の節子は、土屋との恋愛を通して機智に触れ、それに疲れ、自分が「機智に馴染まぬ生れつき」であることに気付いた状態である。冒頭では、傍目からは「偽善」と思われるような状態であるものの、実際にはそれすらわかっていない、ある意味で純粹な状態にあった節子が、土屋との恋を通して機智に触れ、考えることを覚え、最終的には「偽善」であることを意識しながら、自ら「偽善の裡に住」むことを選ぶのである。

つまり、「偽善の裡に住」むことは、節子が自分の元々属していた、機智のない世界に戻ることを意味すると言える。三で詳述するが、節子の出自が上流階級(華族階級)として設定されていることを考えると、節子が戻るべき場所は上流階級的な価値判断に基づいた世界である。

このことから、この場面は、節子が「既成道徳の枠内に身を修め」ることを選択した場面ではなく、むしろ既成道徳の枠から外れることを決意した場面

であると言えるのではないだろうか。

ここまで見てきたように、語り手は、節子の「美德」および道徳が、読者が想定しうる「美德」とは意味合いと異なることを示すために、誰の美德かを明確にしているのだと言える。そして三で分析するように、その違いが節子の出自に起因することを、語り手は冒頭部で執拗に解説しているのである。

### 三・節子の階級と語り手の分析

ここでは、主に第一節の分析を通して、節子の階級が上流階級（旧華族階級）として設定されていることを確認する。また、語り手がどのような価値観で節子の価値観を語るのか、ということについても考察する。

まずは節子の出自・階級について、先行研究でどのように考えられているか確認する。

先行研究においては、節子の階級を中流階級と規定するもの、上流階級と規定するもの、育ちのよさは示しつつも、具体的な階級を明言しないものの三種類に分かれる。<sup>±</sup>上流階級と規定するものは少数で、中流階級と規定するものか、具体的な階級を明言しないものがほとんどである。

なぜ中流階級と上流階級が混在するかについては、当時の日本の状況が関係している。

一九四七年、日本国憲法の施行によって法の下の平等が規定されるとともに、皇族を除く華族制度は廃止され、法的に裏打ちされた貴族制度は消滅した。一九五七年は、法律上、階級は存在していなかったが、華族階級として育った人びとは存在するという状況だったと言える。本文を読めば、節子もまたそのような立場に該当することが確認できる。そのため、中流階級であるとする論も、上流階級であるという論も間違いではない。

むしろ、中流階級であり上流階級であるという立場こそが、「よろめき」を生んだ原因でもあるといえるが、先行研究ではこの点を指摘するものはない。そのような中で、梶尾文武は節子の階級を次のように述べている。

語り手は冒頭からこの主人公が「小説を読まない」ことを繰り返してあげつらうことで彼女を同時代の大衆社会のロマンティックな気運から疎外する。「節子は自分が異端者であることを知つてゐた」と語り手は言うが、それは彼女がこの時代ならではの通俗的にしてロマンティックな志向と「教養」とを全く持ち合わせない「階級」に属することにまずは端を発している。<sup>十四</sup>

梶尾は、節子が同時代とは少し外れた人物であることに加え、その原因が彼女の「階級」にあることを指摘しており、これまでの先行研究と比べ一歩踏み込んだ表現をしている。

ただし、先行研究では、節子の階級は物語の梗概を述べるときに言及されることがほとんどで、本文を分析するにあたっては重要視されていない。梶尾も、本文で使われていたために「階級」という表現を用いたようだが、これ以降「階級」に関する言及は見られない。

日本において階級を明言するためには、階級についての議論が避けられない部分があり、それも先行研究において節子の階級が曖昧だった理由の一つであると思われるが、今回、私は一步踏み込んで、節子の階級を上流階級、旧華族階級であると断定したい。

その前提でなければ、節子の「美德」が既成道徳と異なっていることを説明することが困難であるし、本文を読めば節子が上流階級の出身であることは明らかであるためである。

それでは、第一節を中心に節子の階級と語り手の特徴を分析したい。

第一節には、階級に関する情報が多く書き込まれており、節子がどのような人物で、この物語で何が語られるか、までが暗示されている。以下に冒頭部を引用する。

いきなり慎しみのない話題からはじめることはどうかと思はれるが、倉越夫人はまだ二十八歳でありながら、まことに官能の天賦にめぐまれてゐた。非常に騷のきびしい、門地の高い家に育つて、節子は探究心や理論や洒脱な会話や文学や、さういふ官能の代りになるものと一切無縁であつたので、ゆくゆくはただ素直にきまじめに、官能の海に漂ふやうに宿命づけられていた、と云つたはうがよい。かういふ婦人に愛された男こそ仕合せである。節子の実家の藤井家の人たちは、ウキツトを持たない上品な一族であつた。多忙な家長が留守がちで、女たちが優勢な一家では、笑い声はしじゆうさざめいてゐるけれども、ウキツトはますます稀薄になる傾きがある。とりわけ上品な家庭であればさうである。節子は子供のころから、偽善といふものに馴らされて、それが悪いものであるとは思はぬやうになつてゐたが、これは別段彼女の罪ではない。

しかし、音楽や服装の趣味については、節子はこんな環境のおかげで、まことに洗煉されてゐた。会話には機智が欠けてゐたが、やさしく乾いた、口の中ですばやく廻転するやうなその会話の、一定のスピード、一定の言葉つかひをきけば、耳のある人なら、電話だけでも、節子の育ちのよさを察しただらう。それは成上り者がどんなに真似ようとしても真似られぬ、一定の階級の特徴を堅固にあらはしてゐた。

現代においては、何の野心も持たぬということだけで、すでに優雅と呼んでもよからうから、節子は優雅であつた。女にとつて優雅であることは、立派に美の代用をなすものである。なぜなら男が憧れるのは、裏長屋の美女よりも、それほど美しくなくても、優雅な女のはうであるから。

まず、冒頭部から節子の出自・階級を判定することが可能である。

とくに、「門地の高い家」に育つた、実家の藤井家が「とりわけ上品な家庭」であつたという記述や「成上り者がどんなに真似ようとしても真似られぬ、一定の階級の特徴を堅固にあらはしてゐた」という文章からは堂上華族を連想させる。

これらの文から、節子の階級は上流階級（旧華族階級）であると考えられる。

また節子は、上流階級として育つたが故の自意識や価値観（上流階級意識（語り手の言葉を借りれば「階級的偏見」）を「無意識に抱いてゐる」という設

定となっている。

・節子の好みはまったく官能的なものであつた。男はただ荒々しく美しい顔と、しなやかな体躯を持つてゐればよかつた。そして何よりも若さと。男の野心や、仕事の情熱や、精神的知的優越や、さういふものには節子は何らの関心がなかつた。(略) 女の目から見た世界を厳格に信じている節子は、そこらのありふれた知的な女のやうに、男の側の判断で迷はされたりすることが決してなかつた。

節子が無意識に抱いてゐる階級的偏見と、こゝういふ判断との折れ合ふのは微妙な地点である。彼女は野性を尊敬してゐなかつた。男を魅力あらしめるには、金のかかるお洒落と、一定の育ちから生ずる一定の言葉遣ひとが必要だと思つてゐたのである。(第一節)

・ただ節子は持ち前の偏見から、女優といふ職業を蔑んでゐた。一人として服装の趣味のいい女はゐないといふのが、こんな輕蔑の表向きの理由で、それといふのも育ちが悪いからだ、と考へてゐた。節子は民衆の平均的な趣味といふものを嫌悪してゐたのである。(第四節)

・こんなところで、節子の階級的偏見を云々するのは、不謹慎のそしりを免がれまい。しかしそのことは、このとき彼女を支配した情緒、彼女を促した情念と、無関係ではなかつた。大停電の街のどよめきのなかで、革命や暴動を夢みながら、まことに時代遅れな節子の偏見は、自分をはつきりその被害者の立場に置いて思ひ描いてゐた。(第六節)

右の三つの引用は節子の「階級的偏見」に関する文章をまとめたものである。

節子の出自や「階級的偏見」(『上流階級意識』)が示されている時は、その前後に必ずそれにとまなう価値観と対極のもの(もしくは「官能的なもの」)が示されている。たとえば冒頭部の「探究心や理論や洒落な会話や文学や、さういふ官能の代りになるもの」や「ウキツト」、「男の野心や、仕事の情熱や、精神的知的優越」がそれにあたる。

そしてこれらはいわば「民衆の平均的な趣味」とも言い換えることが可能だが、「官能の代り」になるものが必ずしもここに挙げられたものとは限らない。この物語内において、語り手によつて意識的に選別された価値観であると言える。

また、節子はここに挙げられた「民衆の平均的な趣味」を「嫌悪」している、もしくはそのような趣味とは「一切無縁であつた」人物であり、ある段階までは「民衆の平均的な趣味」を愛好する人種とは異なる価値観を有しているということになる。

ここで、語り手の特徴について述べておきたい。

佐藤秀明は、語り手について「二十八歳の節子が「官能の天賦にめぐまれてゐた」という「慎みのない話題」から始めてしまふ、あまり「上品」とは言えない語り手」<sup>15</sup>であると述べている。また、中元は語り手が「通俗的な恋愛小説や姦通小説」を参照にしていることを指摘する。これらのことから、語り手

は中流階級の目線で節子を批評していく立場であるといえる。

また、斎藤美奈子は語り手が節子を「見おろす位置は圧倒的に高く、持っている情報量は圧倒的に多い」<sup>十六</sup>と指摘する。確かに語り手は皮肉めいた語り口が多く、多弁である。

そのため、先行研究においては語り手が節子を支配しているという見方や下に見ているという見方がなされることがあるが、冒頭部における節子の価値観が示される箇所を確認すると、「こういう婦人に愛された男こそ仕合せである」「別段彼女の罪ではない」という記述や「男が懂れるのは」「優雅な女のほうである」という記述があり、節子の価値観を下に見ているとは言いきれない。むしろ語り手は節子を擁護・評価するような感想を述べていると言える。

・女の目から見た世界を厳格に信じている節子は、そこらのありふれた知的な女のやうに、男の側の判断で迷はされたりすることが決してなかった。（第一節）

・ふつうの女だつたら、あんな存在感の稀薄さを、子供への愛で濃くしようとは思はぬだらうか？ 節子はさうではなかった。（第四節）

・世間の人妻なら最初に思ひつきさうなこの目論見、良人に打明けようといふ目論見を、節子は今はじめて思ひついたのである。（第七節）

・節子は女らしい目でしか恋人を見なかつたから、そこに何も発見しない。もし知的な女が土屋を見たならば、かうした彼の因縁のない感情の無力感に、正に時代の児の特徴を読み取つたかもしれないのである。（第十一節）

さらに、右に挙げた文章のように、語り手は、世間の女性たちを節子と比較し、節子が世間の女性たちとは違う価値観を有していることを述べるが、そこでは違うことが語られるのみで、そこに批判的な目は向けられていない。

それどころか語り手は、節子に対してではなく、知的なものをよしとする女性にこそ批判的な目を向けているのではないかとも思われる。

先述したように、語り手は、自分の語れる言葉を駆使して、節子の価値観が、いかに世間の女性たちと違うか、自分が語れる価値観とは違うか、ということとを語る（それが多弁さに繋がっているのだと思われる）が、節子と同じ目線・立場から節子の内面を語ることとはしていない。しないというよりも、語れる言葉を持ち合わせていないのだと思われる。

三島由紀夫はこの物語について「シニカルな不可知論を主軸にした、一方的な姦通小説を書いた」<sup>十七</sup>と述べている。

不可知論とは、ものごとの本質は人に認識することが不可能であるとする立場、我々の感覚にあらわれる内容を超えることは知ることができないとする立場を意味する。

この物語において、上流階級の価値観というのは「我々の感覚にあらわれる内容を超え」ており、「知ることができない」価値観なのである。

中流階級的な目線で節子の内面を語ろうとする時、語り手は、節子の価値観が、自分が語り得る価値観とは違うことを表明することによってしか、節子

の内面、上流階級意識を語ることはできないのではないだろうか。

ただし、節子の場合、第一節の中で一カ所だけ、世間の女性と「同じ」であることが語られることがある。それが次の部分である。

女の友だちとの附合をする他はない。お茶に呼ぶ。呼ばれる。一緒に買物にゆく。芝居を見にゆく。……とかうするうちに、節子は自分が異端者であることを知った。みんなを軽蔑する気もなく、煩はしくもないのに、節子とみんなの関心とはどこかずれてゐる。節子は大人しく、愛らしく、何の野心も、過剰な教養も持たないのに、何となく自分だけは人とうちがつてゐると感じるのである。

おそらくこんな印象は節子の無智、乃至は世間知らずから来てゐたものにすぎなかつた。彼女はほかの女たちも自分と同じやうに感じてゐるといふことが理解できなかつたのである。

この文の傍線部分は一見、すべて同じ世間の女性を対象としているように思える。

しかし、節子の出自が上流階級であることを踏まえて考えれば、「女の友だち」「みんな」「人」と「世間」「ほかの女たち」はイコールではないと考えられる。「女の友だち」「みんな」「人」は自分と同じ上流階級（旧華族階級）の人々であり、彼女たちと違ふと感じているのである。

そしてその感覚は、「世間」の女性が感じるものと同じであると語り手が指摘している。

このことから、節子は上流階級意識を無意識に抱いているものの、そこに身を置いていることに違和感を抱いている人物であることがわかる。節子自身が、中流階級的な価値観によりめく可能性のある人物であるという危うさが第一節の終わりに示されているのである。

そしてここから、土屋との恋愛を通して、世間的な価値観を知り、そこへ寄り添っていくという物語が展開されていくのである。

## まとめ

第二章では「よろめき」「美德」の用例の確認と、第一節に描かれた節子の階級と語り手の特徴を分析した。

当時のメディアは『美德のよろめき』というタイトルを、「浮気をしてはいけない」という中流階級的な道徳を踏み外すことと解釈し、それが時宜にかなっていたために「よろめき」＝「妻の浮気」として流行・定着した。

しかし、本文では「よろめき」は足もとがふらつくという本来の意味でしか用いられておらず、「美德」も本文においては節子の美德として語られることが多く、中流階級的な道徳とは区別されていると考えられる。

先行研究において節子の階級に関する記述は統一されていないが、本文を読めば節子の階級が旧華族階級として設定されており、そのことが語り手によって執拗に語られているのは明らかである。

そして節子は上流階級意識を無意識に保ちつつづけている人物であるがゆえに、世間や語り手が語り得る価値観とは相いれない価値観を抱く人物として存在しており、その節子の価値観が、世間的な価値観へと「よろめ」く物語が展開されていく。

また、語り手は、語り手が語れる言葉（＝中流階級的な価値観）を駆使して節子の価値観をあぶり出そうとするものの、自分が語り得る言葉には当てはまらない、という語り方でしか節子の特異な価値観を説明することができないのである。

『美徳のよろめき』というタイトルは、中流階級的な道德の踏み外しを意味するのではなく、節子の上流階級意識が不安定になるということを指しているのではないだろうか。



## 第二章 『太陽の季節』ブームと「よろめき」ブーム

はじめに

第一章、第二章では『太陽の季節』と『美徳のよろめき』の作品分析を行った。

『美徳のよろめき』が『太陽の季節』を意識して描かれた作品であることは、小笠原賢二や斎藤美奈子によって指摘されている。とくに斎藤は、『美徳』は『太陽』のパロディとして読むこともできるのだ」と述べているが、そうであるとするならば、『美徳のよろめき』は『太陽の季節』の何を模倣し、また、どの部分を変えているのだろうか。

『太陽の季節』と『美徳のよろめき』に共通する点は、主人公の特殊性が語り手によって解説・演出されるということである。

両作の主人公は読者から見ると常軌を逸した行動をしているように思えるが、語り手が問題としているのは行動そのものではなく、主人公たちがそういった行動を起こす動機や考えを持ち合わせていない点にある。

そしてその原因は、どちらも経済的に裕福な生活を送っており、考えたり、自己分析をする必要のない「幸福な種族」に属していたことにあると思われる。

両作とも「恋」を通して考えることを学び、その状態に変化が訪れそうになるが、最終的には恋人の死によって断ち切られてしまったり、自分の出自を再認識することによって踏みとどまったりして、変化を受け入れることなく物語は幕を閉じる。

考えない人物の心理を描写することは不可能である。ただし、小説の場合には語り手に解説者の役割を与え、解説の対象が考えることができない人物であることを示すことで、考えない人物を描写することがろうじて可能になる。

『太陽の季節』と『美徳のよろめき』はいずれも語りによって、考えない人物の心理を描写しようとした実験的な小説であると言える。

一方、差異がどこにあるかを考えると、『太陽の季節』の作者が竜哉を通して、考えない人物を世代差に起因するものとして描こうとしたのに対し、『美徳のよろめき』の作者は節子を通して、考えない人物を階級差に起因するものとして描こうとしたことにある。

両作が発表された年は、法的に定められた階級制度が廃止されてから十年が経っていたものの、一九五九年の秋の国会で「中産階級育成論」が話題となる前であり、「日本はまだ中産階級の国家ではない」という認識が人びとに広く共有されていた「二時代でもあった。ここで話題になった「中産階級」は経済的な面においての話であるが、意識の面においても、国民が階級差を意識しうる時代であったと言える。

このことを考えると、一九五六年から五七年にかけては、階級による社会的平等が減少したことにより、これまで階級差や階層差に起因すると考えられていた環境・意識の差をどこに求めるかを、探っていた時代だったのではないだろうか。

そのような中で石原は、考えない人間像を一つの若者像としてあてはめようとし、三島はそこに違和感を覚え、階級差に起因するものとして考えない人

間像を描いたのではないかと考えられる。

そこで第三章では、それぞれの作品がどのように受容されたかについて考えていきたい。

当時の読者の感想や、新聞・雑誌記事の分析を通して、読者と違う階級・立場の人間をいかに描くかを目的とした『太陽の季節』『美德のよろめき』という小説が、メディアが話題にする際に、読者と同じ立場の人間を描いた物語にすり替えられてしまっていることを指摘したい。

当時の回想録や新聞記事から読者の声を拾ってみると、描かれた作品の主人公と同じ立場にあたる読者たちは、主人公たちを「ブルジョア階級」や「有閑マダム」と捉え、自分たちと違う階級・階層の人物の物語として受容していると考えられる。

しかし、両作がベストセラー化するにあたっては、違う種類の人間が描出されていることを示すのではなく、自分たちと同じ立場の人物が常軌を逸した行動をとっているものと捉え、身近な問題として考えようとする傾向が見られる。

一では、『太陽の季節』ブームについて扱う。主に難波功士の論に沿いながら、当時の若者世代にあたる読者の感想と週刊誌記事の比較をし、『太陽の季節』に描かれた若者像とその問題提起が、大人たちによって以前から問題視されていたアプレゲールや十代像と重ね合わせられて世代論へとすり替えられてしまったこと、それにより石原が描こうとしていた意識の問題についてまで考えられることがなかったことを指摘する。

『太陽の季節』に描かれた若者像の特殊性を階級差に求める若者たちと、世代差に求める大人たちの考えの差こそが多くの議論を生み、ブームと化していったのではないかと考えられる。

二では、『美德のよろめき』および「よろめき」ブームについて扱う。先行研究や読者の感想を参照しながら、当時の読者が『美德のよろめき』の節子から階級性を感じとっていたことを確認する。一方で、『美德のよろめき』の新聞広告の分析を通して、優雅さや芸術性の強調から大衆性を強調した文句へと変化していることを示す。

また、「よろめき」に関する週刊誌記事において、妻の不貞の増加が不自然に語られていること、妻の浮気が華族階級に特有の事件であるという扱いから、全女性の問題であるという捉え方に変化していることを指摘する。

## 一・階級差が世代差か―『太陽の季節』ブームについて―

難波功士「太陽族の季節」『族の系譜字』所収）は、太陽族という青年像が発生し衰退するまでを、石原兄弟ら「プロト太陽族」、兄弟および『太陽の季節』に影響を受けた「メデイエイテッド太陽族」、多くの週刊誌によって喧伝される「モラル・パニックとしての太陽族」の三つの項目に分けて詳細に分析し、次のようにまとめている。

「それは太陽族である」という状況は、小説が出版された当初、湘南の近辺や銀座の街角に遊ぶ裕福な若者たち（主役は男性）の共在によるものであ

った。しかし、メディアによって媒介され、大衆化された太陽族たち——例えば一九五六年六月号「平凡」誌上には映画『太陽の季節』のノヴェライズが、挿絵を多用しつつ早速掲載されている——が登場し、「太陽族」太陽族映画に悪影響を受けた青少年」へと転化するに至り、ほぼひと夏のブームとして終息していった。<sup>三</sup>

難波が指摘するように、元々裕福な層であることから成り立っていた『太陽の季節』の若者像は、映画および週刊誌の記事によって大衆化し、より広い層へと波及していった。

難波は石原兄弟をめぐる狂騒が「より広い層へと波及していき、スクリーンに映し出された裕次郎の姿を真似た若者が、海岸や街角に大量発生した様子」を当時の「キネマ世代」の証言をもとに示しているが、流行の様相と共に示されるのは、当時の若者が『太陽の季節』に描かれた若者像には経済的な豊かさが必要であると考えていることである。

そのことを踏まえた上で、当時の若者世代にあたる読者の感想を見ていきたい。

今回紹介する二人は当時大学生や社会人であり、『太陽の季節』の主人公である竜哉と同じ立場であると言うよりは作者の石原慎太郎（一九三二年生）に近い立場である。

斎藤美奈子は『太陽の季節』の語り手は、竜哉を兄の視点から語っていると指摘<sup>四</sup>しているが、竜哉の話が、慎太郎の弟である裕次郎の学園生活をモデルにしていることを考えると、今回挙げた三人の立場は、竜哉の価値観の新しさを浮かび上がらせる『太陽の季節』の語り手の立場により近いと言えるかもしれない。

当時大学生であった井上ひさし（一九三四年生）は、『ベストセラーの戦後史』において自分を含む大学生の大半が金欠状況にあったことを振り返った上で、当時の若者にとって、『太陽の季節』の衝撃は「反倫理性」ではなく「豊かで優雅な暮らし」にあったと述べている。

そういう若者たちにとって『太陽の季節』の世界が実在するとはほとんど青天の霹靂、当時の大人たちはこの作品のもつ「反倫理性」に驚愕したようだが、筆者たちはもつと単純に小説の登場人物たちの「豊かで優雅な暮らし」に仰天したのである。『…』『太陽の季節』に登場する若者たちなど作りのものにちがいないと決めてかかっていた。いや、正直に告白すれば、同世代に、海辺の別荘やホテルやクラブを根城にして、昼はヨットで遊び、夜は自家用車つきの金持令嬢と遊ぶ若者がいることなど認められなかったのである。<sup>五</sup>

また、当時大学三年生になったばかりであったという紀田順一郎（一九三五年生）も、いわゆる「太陽族」は「湘南の上流家庭、自由な校風と言う戦後の真空地帯の中から」出てきたもので、「当初同世代の若者すべてから支持を受けたと考えるのは間違いである」と、全ての若者に当てはまるという考えを

否定している。また、大学で一人の学生が友人に『太陽の季節』を勧める場面に遭遇したことを振り返っている。

「まあ、だまされたと思って読んでごらんよ」と、渋る相手にしつこく勧めている。「妙なことが書いてあるぜえ」。

私は思わず、その学生の顔を見てしまった。「ミョーなこと」という引つ張るようなアクセントには、強いおどろきと違和感がこもっているように思われたからだ。六

佐藤忠男（一九三〇年生）は『太陽の季節』について、「特殊なブルジョアのドラ息子たちの話なので、風俗としては目新しいが、大多数の地道な青少年にとっては全くの別世界だし、また一方、金で女に手を出さぬ契約をするとか、性の乱脈とかいったことは、世代の問題をぬきにして、別段珍しいことではない」と述べ、太陽族の流行についても「結局は、戦後しばらく、戦争責任を問われて鳴りをひそめていたブルジョア階級の復権宣言でしかなかったのである」と指摘する。七

これらの感想に共通するのは、『太陽の季節』に描かれる若者像は全ての同世代に当てはまるものではないという考えと、『太陽の季節』の特殊さは性に関する問題や反倫理性にあるのではなく、経済的に恵まれた環境から生ずる風俗、暮らしぶりにあるとする意見である。三人とも『太陽の季節』の若者たちと自分たちの差が階級差から生じると考えていることがみてとれる。

一方、週刊誌では『太陽族』や『太陽の季節』に登場する若者たちをアプレゲールと捉えており、戦後派の若者たち全体を指す言葉として用いている。反体制的・反道徳的な行動をとる若者という意味も含めてアプレゲールという言葉が用いられていると考えられるが、それによって『太陽の季節』に描かれる若者像が世代差として捉えられ、その解釈が浸透してしまったと言えるだろう。

はじめて『太陽族』の名が話題になったとされる『太陽族』の健康診断（『週刊東京』一九五六年五月五日号）では、大宅壮一が「あれから十一年、戦後派の中から新しいアプレ族が誕生した。『太陽の季節』で登場したいわゆる『太陽族』と呼ばれる一群の青年男女がそれ」と述べている。

「高校生と『性』——芥川賞受賞作『太陽の季節』が投げた波紋——」（『週刊読売』一九五六年二月十九日号）にも「『太陽の季節』は、昨年発表されたとき「このごろよく街で見かける一群の青年の言行を胸が悪くなるまで克明に写した作品」（吉田健一氏）というように、アプレゲールの赤裸々な生態をとり上げている」と書かれている。

また、「高校生と『性』」という題からもわかるように、この特集では「実際の若い人たちの社会」と結びつけ、高校生の性犯罪の実例を何点か挙げているが、このように、性犯罪と結び付けられてしまったことも、既存の若者像の問題に回収されてしまった原因の一つであろう。

第二部でも取り上げたように、若者と性に関する問題は一九五〇年頃から定期的に週刊誌に取りざたされているし、「十代の性典」（一九五三年）から始まる性典映画ブームなども見られる。

高島健一郎は「太陽の季節」という季節」（『近代文学研究』第二十三巻、二〇〇六年三月）において、塩澤実信『ベストセラーの光と闇』（グリーンアロー出版社、一九九五年）や日本出版学会編『出版の検証―敗戦から現在まで』（文化通信社、一九九六年）を参照しながら、従来の出版文化史では性風俗的な興味が『太陽の季節』がベストセラーとなった要因として考えられていることを指摘し、当時もそのような作品受容が一般的であったろうと述べている。

確かに『太陽の季節』がベストセラーとなった要因が性風俗的な興味にあったと考える論は非常に多い。しかし、『太陽の季節』において性に関する問題に着目する傾向は、当時の人々の興味がはじめからそこにあったというよりも、週刊誌によって形成されていた部分も大きいだろう。

『若き『背徳者』の波紋』（『週刊新潮』一九五六年三月二十五日号）では、『太陽の季節』の問題点を、「求愛方法について」「乱交について」「女性観について」の三つであるとしており、性に関する部分を抜き出し、強調している。また、「性の問題はさておき小説の主人公を代表選手とするアプレという時代こそ問題になると主張する人もいるだろう」とあり、この特集においてもアプレゲールの問題が扱われている。

難波は「階層・階級の差が文化の差であった時代から、階層（文化）よりも世代（文化）が卓越する時代の転換点に、太陽族は登場したのである」<sup>ハ</sup>と述べているが、ここまで見てきたように、これまで階級の問題として考えられていたものが、週刊誌を中心としたジャーナリズムの言説を通して、世代の問題へとすり替えられていったと言っていいたいだろう。

それでは石原慎太郎自身は、これらの批評に接し、どのような考えを抱いていたのだろうか。

先述した「高校生と『性』」には石原のインタビューが掲載されている。その中で石原は『太陽の季節』について次のように述べている。

「あの小説は、ぼくの身边に起った事実にもとづいている。いろいろの批評もきいた。とくにおとなに対する抵抗が描かれていないという意見に反発を感じる。いまの十代は昭和初期のモガ、モボなどのような封建性に対する抵抗などということさえ意識しないし、胸を張ってもいない。むしろおとなが十代に対してギヤアギヤ騒ぐことがおかしいと思っている。ものの考え方のスタートが根本的に違っているのだ」と述べている。退廃などという言葉も当らない。退廃の意味が違うのだ。いまの十代は、何かしら新しい価値を探しているのだ」<sup>九</sup>

ここから読み取れるように、石原は、「抵抗などということさえ意識しない」若者の「ものの考え方」に問題意識を抱いていたと考えられる。

石原は意識せずに行動するという「考え方」にも注目して『太陽の季節』の若者を描いたのかもしれないが、そこに描かれる若者の行動自体はそれ以前に大人が問題視していたアプレゲールや十代像と重なっていたために、既存の議論に回収されてしまった。

また、石原は作中で階級の問題を意識していないが、先行研究や当時の回想で指摘されているように『太陽の季節』に描かれた若者たちは明らかに「中産以上もしくは有閑階級」であり、読者はそのことを（作者以上に）意識している。<sup>+</sup>

このことから、石原が描こうとした人間像には、世代差に加え、階級差の問題も含まれていることがわかる。三島は石原が描こうとした「考え方」が階級差から生まれるものだと感じ取り、『美徳のよろめき』で階級の高さを強調しながら「考えない」「人妻・節子を意識的に描いたのではないかと考えられる」。

## 二・優雅さの消失と大衆化―「よろめき」ブームについて―

次に、『美徳のよろめき』がどのような物語として受け取られたかを見ていきたい。

『美徳のよろめき』も『太陽の季節』と同じように、節子と同じ立場にあたる読者が、主人公たちを自分たちと違う経済的に豊かな「有閑マダム」の話として受け止めているのに対し、映画化に伴いシナリオが改変されたことや、週刊誌が妻の不貞による夫婦関係の不和を問題視し、その際に「よろめき」の言葉が使われることによつて、すべての人妻に当てはまる問題を描いた作品として扱われてしまう傾向が確認できる。

それではまず、『美徳のよろめき』が当時の読者にどのように受容されていたかを確認したい。

中元さおりは「三島由紀夫『美徳のよろめき』論―「よろめき」ブームから読む―」の中で、「美徳のよろめき」が読者を捉えた理由の一つを次のようにまとめている。

「美徳のよろめき」に描かれた恋愛の風景はデイトールまで凝っており、まるで女性誌のグラビアのようなカタログ的な側面がある。細かく書き込まれた節子のエレガントなファッションと、横にたたずむロマンチックな青年。彼らが海岸や避暑地のホテルで人目を避けて逢瀬を重ねる姿は、女性読者にとつてありありと眼に浮かぶものであつただろう。「…」読者である一般的な主婦層にとつて、少し贅沢なライフスタイルがそこには展開されていたのだが、まさに「美徳のよろめき」の節子は女性誌で紹介されているようなものと重なる。「…」女性読者たちはテキストにちりばめられた優美で上品な小道具と設定そのものに、羨望の眼差しをむけながら「美徳のよろめき」を読んでいたのではないだろうか。節子の恋愛は苛酷なものではあつたが、全体的にはエレガントな物語として受け止められ、だからこそ節子の「よろめき」行為は、女性たちの願望の投影として描かれているのだ。<sup>11</sup>

中元はそれに加え、現実には「妻たちの性への関心の高さ」があつたことも「よろめき」ものというジャンルの物語」の流行の理由として挙げている。しかし中元自身が「ジャンル」と述べているように、性的な興味から読むだけでよければ、当時は『美徳のよろめき』以外にも多くの姦通小説が発表されていたはずである。読者にとつて「少し贅沢なライフスタイル」が描かれていたことこそが、『美徳のよろめき』が多くの読者を獲得した理由なのではないだろうか。

また、「恋する妻、恋される妻」(『週刊娯楽よみうり』一九五七年八月二十三日号)では『美徳のよろめき』に関する不思議な現象を紹介している。

またひところ、銀座の並木通りやみゆき通りで、この本を五、六冊かかえたマンボ青年の姿がちらほらしたことがある。ガール・フレンドにプレゼントするわけだともかく若い女性から中年婦人の間で『美徳のよろめき』が一種のアクセサリーみたいに使われていることはたしかだ。

そこで商魂たくましくK社では三島由紀夫のサイン入りの豪華本に着手し、生沢朗のサシ絵百枚、アート三色刷六ページで、週刊誌大のA4判、定価二千円というのを近く発売する。二千円の小説本というのは、戦前戦後、類をみない計画で、これでは『美徳のよろめき』も立派なバイブル並みだといっても過言ではあるまい。

ここで、『アクセサリー』という表現が用いられていることに注目したい。当時の青年たちは、『美徳のよろめき』を実用品としてではなく、装飾品としてプレゼントしていたことだろう。当時の読者たちは『美徳のよろめき』から、優美さやきらびやかさをイメージしたのではないかと思われる。

さらに、当時の読者の感想からも、節子を自分たちとは違う立場の人物として捉え、読んでいた様子がうかがえる。

『美徳のよろめき』の節子と同じ立場にあたる女性は主婦であり、それゆえ当時の感想はあまり残されていないが、一九五七年九月十二日付の『読売新聞』では「主婦とベストセラー」という見出しで、婦人欄投稿者が『挽歌』『美徳のよろめき』『愛のかたみ』の批評会をしたという記事が掲載されている。

「美徳のよろめき」に対しては「生活を知らない有閑マダム火遊び」「若い未婚の人が読んで、人妻はあんな不貞なものかと思われてはかきません」と非難ゴウゴウ。「この方が構成がしつかりしている」とか「かん通そのものを抜き出して、象徴的に書いているのであれだけが生活というのではない」「私は詩として読んだ」という弁護が出ても圧倒されてしまうほどでした。「挽歌」の方がよかったという一人の言葉には、ほとんどの人が賛成していたようです。

「夫人があれだけのことをしているのに、気付かない夫はよほどおかしい」「土屋は知らん顔をしているのに、節子夫人が一人で悲しんだり喜んだり苦労して、女の不利をつくづく知らされた」というのも主婦らしい感想といえましょう。

しかし「よろめきへの関心と魅惑は、いまの人妻共通のもの」という言葉も、やはり本心のようです。

江藤淳は、節子が「なまなましい生活のにおい」がない「現実感の薄い存在」であること、『美徳のよろめき』には「気の利いたいまわし以外はなに一つ現実感のあるものは描かれていない」<sup>1)</sup>ことを指摘しているが、当時の読者たちもまた、『美徳のよろめき』に「生活」が描かれていないと感じていたようである。

また、節子が「有閑マダム」であるために生活が描かれないという意見が見られることから、当時の女性読者は『美徳のよろめき』の節子が自分たちよ

りも上の階級に属すると感じていたことがわかる。この場合は否定的な言い方であるが、「テキストにちりばめられた優美で上品な小道具と設定そのものに、羨望の眼差しをむけながら「美徳のよろめき」を読んでいた」という中元の指摘と重なるものであろう。

ここまで見てきたように、当時の読者たちは『美徳のよろめき』の節子から、贅沢な暮らしから生まれる優雅さを感じ取り、そこに憧れや反発心を抱きながら物語を消費したと思われる。そしてそのような読み取りは、三島の描こうとした節子像に沿ったものであると考えられる。

しかし、その一方で新聞の広告においては、映画化決定以降、「有閑マダム」の物語ではなくすべての女性にあてはまるものとして考えられるようになっていく。ここで、一九五七年の『読売新聞』に掲載されていた『美徳のよろめき』の広告を紹介したい。①から③は書籍、④は映画の広告である。十三

①こんな婦人に愛された男こそ仕合せである――肉の宝石のように輝き、しかも限りなく優雅で哀愁に満ちた人妻の情事の宿命……／彫像のように寝椅子に横たわる節子の胸に、白く揺めく燭台の光……

果然大反響！ ベスト・セラ―

鬼才三島由紀夫が外遊前に残した異常な問題作と各紙挙って論評！

【奥野健男氏評】愛と官能に目ざめた女性の心理を細く鮮かに追究した手腕……これは見事に織り上げられた第一級の工芸品なのだ。……巻をおくのが惜しくなる。（七月十二日付）

②15万部突破！ ベストセラ―連続四週1位

今や「よろめき夫人」の新語を生む問題作！

肉の宝石のように耀く夜々……限りなく優雅で哀愁に満ちた人妻の恋の旅路……／唐草模様の工芸品を思わせる筆致の野心長篇として世評集中！（七月三十日付）

③日活映画化！ 絶賛既に19万部！

今や「よろめき夫人」の新語を生んで、波紋を描く話題の長篇

どんな女性の胸にもひそんでいる貞節の危機……こんな女に愛されたいと願うすべての男性の欲望……／それがこの本を選ばせ、この本の人気を支えているのです！

各新聞、週刊誌等挙って論評！（八月二十八日付）



④官能の海にたゞよう人妻節子

都会に夜のあるように／あなたの心にも」節子「が住む

夜読んでは眠れない三島文学の映画化！ （十月二十五日付）

七月に紹介された広告と、八月以降の広告文の性質は明らかに異なっている。七月に掲載された①と②は、本文の表現を用いながら、優雅さを強調した紹介となっている。また、「宝石」「彫像」といった表現や、奥野健男の評をもとにした「工芸品」という表現から、芸術性を感じさせる作品として紹介しようとする意図もうかがえる。

しかし、八月末に掲載された③では、映画化の決定を知らせる文句とともに「どんな女性の胸にもひそんでいる貞節の危機……」とあり、すべての女性にあてはまる話として紹介されている。また、本文の表現を用いずにわかりやすい文章が用いられており、読者に呼びかける形をとっている。優雅さを強調することをやめ、大衆性を強調した文句に変化したと言える。

そして、④の映画の広告にも「あなたの心にも」節子「が住む」とあり、③同様すべての妻（女性）にあてはまる話として紹介されている。

映画版の脚本を担当した新藤兼人は、「映画という大衆の面前では寢室の描写は、それほど自由ではない」<sup>十四</sup>ことから、シナリオを変更せざるを得なかったと述べている。それに伴い、映画のシナリオは原作と大きく異なっている。「小説の節子夫人は、肉体関係の進行によって、よろめくのであるが、シナリオでは、その関係を控えて、よろめくことにした」とあるように、映画では節子は土屋と肉体関係を結ぶことはなく、心理的な「よろめき」のみが描かれている。良人に見つかることもなく、三度の墮胎まで遂げてしまうという非現実的な内容から、浮気をするかしないかというきわめて現実的な問題に終始してしまっている。

三島は後にこの映画を鑑賞し、「これ以上の愚劣な映画といふものは、ちよつと考へられない」<sup>十五</sup>という感想を抱いている。

新藤は『安城家の舞踏会』（一九四七年）や『お嬢さん、乾杯！』（一九四九年）など華族階級を扱うことも多い脚本家である。映画『美德のよろめき』の冒頭でも節子が旧華族階級であることを強調しているが、三島が「考えない」人物を描写するために階級性を強調していたと考えると、あえて描かなかった節子の心理を描いたしまったということが、三島が映画に辛辣な評価を下した理由の一つなのではないだろうか。

このように『美德のよろめき』の場合は映画化によって、そこに描かれる「よろめき」の意味合いが大きく変わってしまい、それゆえに一部の階級に当てはまるものから、すべての女性に当てはまるものへと変化してしまっている。

また、映画化決定以降の「よろめき」に関する週刊誌記事においても、妻の浮気をすべての女性にあてはまる問題として扱おうとする動きが見られる。先述した「恋する妻、恋される妻」では、姦通小説や映画の氾濫が、人妻の浮気の増加に直結しているわけではないと主張しながらも、妻の不貞が原因となり離婚する夫婦が増えているという話題についても触れている。

「激増した妻の不貞」という見出しのもと、「いままでは」不貞「は夫の独占みたいな場合がだんぜん多かったが、さいきんでは妻の不貞が激増してきている」と述べているが、具体的なデータで示されているのは「昭和三十年度中に東京家庭裁判所に持ちこまれた離婚の申立件数」のうち「七割の千百三十七件は女性側からの申立てだという」<sup>一六</sup>ことのみであり、妻の不貞が増加したことを立証するものではない。

また、当時の新聞から離婚に関するデータが掲載されたものを見てみると、朝日新聞法律相談所における一九五六年一月から六月までの家庭問題の相談は「離婚が圧倒的で、その内訳は不貞（夫の不貞約八割）不和、虐待、内縁関係の解消による慰謝料請求などの順となっている」<sup>一七</sup>とある。また、『美德のよろめき』の単行本発刊後である一九五七年七月四日付の『朝日新聞』夕刊でも離婚の問題が扱われているが、「この十年間、離婚原因のトップをきつているのは、夫の不貞という言葉で表わされている三角関係によるものです」<sup>一八</sup>という文で始まっており、いずれも妻の不貞については言及していない。

データには表れない形で妻の不貞が問題となっていたのかもしれないが、実際に妻の不貞が騒がれていたというよりは、「よろめき」という言葉およびモチーフの流行に乗って、実際の妻の不貞をも問題視するようになっていったのだろう。

それを示す資料として、一九五七年十二月に掲載された、「よろめき」に関する特集を二つ紹介しておきたい。二つの記事からは、上流階級特有の事件とされた妻の「よろめき」を全女性の問題へと言い換えていく様子や、妻の不貞問題をことさらに書き立てていく様子が確認できる。

まず、『週刊娯楽よみうり』（一九五七年十二月十三日号）に掲載された「日本よろめき史」である。特集の冒頭部を引用しておく。

三島由紀夫の「美德のよろめき」がベストセラーとして紙価を高めて以来、いわゆる「よろめき」の言葉は大流行、いやそれどころか「よろめき」は日本女性の旧道徳から解放、進歩を意味するという議論さえあるらしい。だが過去をふり返ってみると、それほど「新しい女の道」でもないようだ。「古い道」「くずれた道」の例も少なくない。モデル・ケースとでもいいいた例を、近代の歴史からいくつかあげて考えてみていいのではないかい。

この特集では女性が「人妻の座からよろめく」ことが、『美德のよろめき』やよろめくという行為の流行以前から起こっているとして、十人の妻の浮気の例を紹介している。

紹介されているのは華族夫人である松井須磨子や柳原白蓮、近衛文麿の長女・昭子など、ほとんどが上流階級の話であるが、ここでは、上流階級の女性であるが故によろめくことが可能であるという文脈で紹介するのではなく、女性の宿命であるかのような書き方が選択されている。

二つ目は「今年の日本はどこまでよろめいたか？」（『週刊朝日』一九五七年十二月二十九日号）である。政治や経済など、八つの項目に分けて一九五七年を総括しており、女性という項目では「よろめきの本家」という題で次のような文が載っている。

「挽歌」や「美徳のよろめき」「雌花」「渴き」などの売れる根底で、現実の妻たちが、今年は大いによろめいた。それも明治、大正の極めて稀な、有名夫人の例外的事件とは違って、一般の奥様やおかみさんたちが、新聞のニュースにもならず、街のあちこちで人知れずよろめき続けたわけである。「…」つまり「よろめき夫人」は「極めて稀な」例外から今や一般に普及し、大衆化したといっている。

ここでもまた、妻の浮気が「有名夫人の例外的事件」であったことを承知しながらも、一九五七年においてはそれを否定し、「一般に普及」したと述べている。

また、この記事においても「妻の不貞」を理由とした離婚申立て件数が、一九五六年は九十件、一九五七年は半年で三十四件であり、「下半期を加えると、それを上回る見込み」だと書かれている。これも先述した資料と同じように数字の面では立証できていないが、「こうして表面に浮んだ数字は、いわば氷山の頭に過ぎ」ず、「離婚という破局まで行かない軽い」めまい「程度の」よろめき「を加えると、じっさいの数字としては、つかむことのできないこの数は、たいへんなことになりそうだ」と、問題があるかのように書き立てている。

三島が『美徳のよろめき』を発表した段階ではまだ上流階級の嗜みとして捉えられていた妻の不貞は、ジャーナリズムによって全女性への問題へとすり替えられてしまった。

そしてそれと並行して、「よろめき」という言葉が浮気に対する罪の意識の軽さを表現した「姦通」に代わる言葉として流行・定着していく。

それによって『美徳のよろめき』という作品自体も、一般的な家庭の妻を描いた話として消費されていくようになってしまったのではないだろうか。

## まとめ

第三章では、一九五六年から五七年にかけて巻き起こった、『太陽の季節』ブームと「よろめき」ブームを再考した。

『太陽の季節』と『美徳のよろめき』は、無軌道な若者の姿や不倫する人妻など、現代の問題とリンクさせながらも階級差からくる特質をいかに描くかという問題を含んでいたが、ジャーナリズムによって現実の問題に回収・拡張されてしまったと考えられる。

また、二作が描こうとした人物像が表向きに平等が目指される社会とは逆行するものであったことも、その主張が読まれなかった理由の一つであるだろう。

一方で、読者は作品に描かれた人物たちから階級差を感じ、そこに憧れや反発心を抱きながら作品を受容していることがわかった。

『出版事典』（出版ニュース社、一九七一年）の「ベスト・セラー」の項には次のような記述がある。

戦後とくに一九五〇年代以降は、出版社が積極的にその編集企画、宣伝、販売促進を行なって特定出版物の大量的な需要の進出に乗出し、意識的に

〈ベスト・セラーづくり〉に取組む傾向が強くなってきた。そのためには、できるだけ多数の読者の心理や感情の動きを見抜き、大衆の最大公約数的な関心を刺激するような主題と、平易でしかも扇情的な表現を盛込む必要があり、〔…〕

ここにも示されているように、戦後のベストセラー作品解釈や、作品をとりまくブームは、純粹に読者から発信されたものではない。あくまで出版メディアが作り上げた読者像に寄り添っているに過ぎないのである。

今後はそのような実態があることを踏まえた上で、ブームが形成されていく段階の資料やベストセラー作品を丁寧に見直し、当時の読者像や作品解釈を発見していく必要があるだろう。

## おわりに

五年に渡る研究を支えつづけてくださった藤森清先生をはじめ、金城学院大学の先生方に感謝いたします。

※本論は以下の論文に加筆・訂正を加えたものである。

- 「太宰治『斜陽』についての一考察―上流階級に関する報道との関連性」『金城学院大学大学院文学研究科論集』第十八号、二〇二二年三月  
「太宰治『斜陽』論―階級設定の曖昧さについて」『金城日本語日本文化』第八十八号、二〇二二年三月  
「『三等重役』のイメージの変遷―源氏鶏太『三等重役』論」『金城学院大学大学院文学研究科論集』第十九号、二〇二三年三月  
「戦後改革と性意識―源氏鶏太『三等重役』における戦後派重役像」『金城日本語日本文化』第八十九号、二〇一三年三月  
「動機なき行為者をいかに描くか―石原慎太郎『太陽の季節』試論」『金城日本語日本文化』第九十号、二〇一四年三月  
「流行語『恐妻』について」『金城学院大学大学院文学研究科論集』第二十一号、二〇二五年三月

## 第一部

## 第一章 上流階級に関する報道との関連性

一 根岸泰子「太宰治『斜陽』——その揺籃期の物語」『20世紀のベストセラーを読み解く』學藝書林 二〇〇一年

二 皇族と華族の説明として『日本国語大辞典〔第二版〕』（小学館、二〇〇一年）の記述を引用しておく。

皇族——天子・天皇の一族。

華族——明治時代に設けられた、身分制度の称の一つ。明治二年（一八六九）六月、江戸時代の公卿、諸侯をこれにあて、同一七年の華族令により、公、侯、伯、子、男の爵位を授けられ、国家に勲功のあつた政治家、軍人、官吏、実業家なども列することができるようになった。皇族の下、士族の上に位置し、種々の特権を受けた。昭和二年（一九四七）廃止。

三 『朝日年鑑』1950年版 朝日新聞社 一九四九年

四 岸睦子「斜陽」『太宰治大事典』勉強出版 二〇〇五年

五 尾崎秀樹「太宰治『斜陽』・華族の没落と流行作家の死 戦後ベストセラー物語（五）『朝日ジャーナル』第七卷第四十七号 朝日新聞社 一九六五年十一月

六 塩澤実信『昭和ベストセラー世相史』第三文明社 一九八八年

七 一に同じ

八 瀬戸内晴美、前田愛『名作のなかの女たち』岩波書店 一九九六年

九 三好行雄、梶木剛、東郷克美、渡部芳紀「共同討議『斜陽』をめぐる」『国文学』第二十四卷第九号 學燈社 一九七九年七月

十 奥野健男『太宰治論』春秋社 一九六六年

十一 津島美知子「三月二十日」『回想の太宰治』講談社 二〇〇八年

十二 山内祥史「年譜『太宰治全集』第十三卷 筑摩書房 一九九九年

十三 相馬正一『斜陽日記』のオリジナリテイ——創作『相模曾我日記』の活字化『国文学』第四十四卷第七号 學燈社 一九九九年六月

十四 「恋と革命を語る人気作家タザイ氏訪問記」『人民しんぶん』一九四七年六月二日↓『太宰治全集』第十卷 筑摩書房 一九九〇年

十五 奥野健男「斜陽」小論『太宰治論』角川書店 一九六〇年

奥野は「貴族」という単語を使用しているが、文脈から判断するに華族の意で用いていると思われるため、本稿では華族と同義のものとして考えていく。また、この傾向は今回検証した新聞記事においても確認できる。

十六 野平健一「太宰治著『斜陽』」『矢来町半世紀』新潮社 一九九二年

七一に同じ

大一九四五年の各新聞（東京版）の発行部数は、それぞれの社史『毎日新聞』は、川上富蔵『毎日新聞販売史戦前・大阪編』によれば以下の通りである。

朝日新聞――一四〇二一六三部、読売新聞――一六二七六六部、毎日新聞（東京日日新聞）――一四二九四二部

九『議院制度の改革（下）華族の特権廃止』『朝日新聞』一九四五年九月二十日付

二『華族令改正に着手』『朝日新聞』一九四五年十一月十三日付

二二『華族の政治的特権 首相答辞 剥奪を研究中』『朝日新聞』一九四五年十二月七日付

二二『華族世襲財産法廃止 政府・来議会に提案』『朝日新聞』一九四五年十二月二十八日付

二五『アジア歴史資料センターRef.A04017794099（第十一・十二画像目）、御署名原本・昭和二十一年・法律第五二号・財産税法（国立公文書館）を参照。』

二四法令データ提供システム（<http://law.e-go.jp/cgi-bin/lidxsearch.cgi>）を参照。

二五鹿島茂『宮家の時代』朝日新聞社 二〇〇六年

二六『別荘の賣物が続出 財産税生み出しに悩む湘南』『読売新聞』一九四七年二月十二日付

二七『新潮』十月号の広告が一九四七年十一月六日付の『毎日新聞』に掲載されていることから、『新潮』十月号の発売は十一月頃であったと考えられる。

二八この映画は、一九四七年度の『キネマ旬報』優秀映画投票で一位に輝いたことや『朝日年鑑』の「興行的には」「安城家の舞踏会」が最も成功し、た  
という記述から、好評を博したことがうかがえる。主な配役は安城忠彦を滝沢修、敦子を原節子、昭子を逢初夢子、正彦を森雅之。

二九『げいのう舞台再訪 鎌倉「安城家の舞踏会」』『朝日新聞』一九八三年四月九日付

三二二五に同じ

三一『清棲元伯爵の長男が盗み 家を飛出して転落の生活』『朝日新聞』一九四八年六月四日付

三二『清棲元伯爵の息 詐欺、窃盗で逮捕状 名門の子 語る転落の道』『読売新聞』一九四八年六月四日付

三三『蝕まれた』野鳥『伏見宮博恭王令孫の場合』『週刊朝日』一九四八年六月二十七日号

三四『このごろの犯罪』『週刊朝日』一九四八年八月十五日号

三五『高木元子爵（三笠宮妃実父）失踪』『読売新聞』一九四八年七月十二日付

三六『足どり尚不明 失そった高木氏』『毎日新聞』一九四八年七月十四日付

三七『高木元子爵の自殺説有力 太宰氏情死に衝撃？ 時勢にとけきらぬ深刻な悩み』『読売新聞』一九四八年七月十四日付

三八『高木氏、覚悟の家出 厭世のノートや辞世』『朝日新聞』一九四八年七月十四日付

三九『高木氏の遺書発見』探してはならぬ、自然に還元する。滅びゆく旧貴族の苦悶』『読売新聞』一九四八年七月十五日付

四十清棲家隆の事件は、二紙ともに「転落」という言葉を用いて報道している。

四十二「三十九に同じ」

四十二「悩みは果てなし」華族商法「夏枯れから閉店 繁昌するのはまず例外」『読売新聞』一九四八年七月二十六日付

四十三「宿命のダイヤ 大橋家のお家騒動 高木氏の失踪に共感」『読売新聞』一九四八年八月二十三日付

四十四「読書祭 良書ベストテン決る」『読売新聞』一九四八年十一月十五日付

四十五「人の噂も七十五日物語」『週刊朝日』一九四九年一月三十日号

四十六「食えぬ悲劇 元子爵が板の間かせぎ」『朝日新聞』一九四九年二月二十七日付

四十七「元子爵が板の間稼ぎ」『毎日新聞』一九四九年二月二十七日付

四十八「元子爵が板の間 老いと落魄から盗み」『読売新聞』一九四九年二月二十七日付

四十九「映画評」『読売新聞』一九四九年三月十五日付

五十「編集手帖」『読売新聞』一九四九年七月三十一日付

五十一「編集手帖」『読売新聞』一九五〇年四月十三日付

五十二「よみうり時事川柳」『読売新聞』一九五〇年五月十二日付

また、一九五〇年五月二十日は生活保護法施行令が公布された日である。

五十三例として、高見順「胸より胸に」や、宮本百合子「日本の青春」が挙げられる。

五十四「斜陽族」『昭和流行語辞典』三二書房 一九八七年

## 第二章 階級設定の曖昧さについて

一山内祥史「年譜」『太宰治全集』第十三巻 筑摩書房 一九九九年

二「恋と革命を語る人気作家ダザイ氏訪問記」『人民しんぶん』昭和二十二年六月二日↓『太宰治全集』第十巻 筑摩書房 一九九〇年

三伊藤整『斜陽』と『処女懐胎』『人間』昭和二十三年二月↓『太宰治論集 同時代篇』第二巻 ゆまに書房 一九九二年

四奥野健男『太宰治論』春秋社 一九六六年

五「皇族方がそろつて郊外のお住居 真先に東伏見宮家 貴族富豪等も同じ傾向」『朝日新聞』一九三三年九月二十五日付

六亀井勝一郎「作家論ノート 太宰治論」『文学界』一九四八年六月↓『太宰治論集 同時代篇』第三巻 ゆまに書房 一九九二年

七伊藤整『斜陽』と『処女懐胎』『人間』一九四八年二月号↓『太宰治論集 同時代篇』第二巻 ゆまに書房一九九二年

八当時の評論で述べられる「貴族」という単語のほとんどは、文脈から判断するに華族の意で用いられているものと思われるため、そうでないことが明確である場合を除いては、華族と同義のものとして考えていく。



九 志賀直哉、佐々木基一、中村真一郎「座談会 作家の態度（二） 志賀直哉氏をかこんで」『文藝』一九四八年六月号  
十 豊島与志雄、高見順、中島健蔵「創作合評会（第十一回）」「群像」一九四八年二月号  
十一 郡山千冬「ウキ世離れず小説時評」『ろまねく』一九四八年二月↓『太宰治論集 同時代篇』第二卷  
十二 河上徹太郎「死の文学」『新潮』一九四八年九月号↓『太宰治論集 同時代篇』第六卷 一九九三年  
十三 島由紀夫「私の遍歴時代」『三島由紀夫全集』第三十卷 新潮社 一九八〇年  
十四 七に同じ

十五 根岸泰子「太宰治『斜陽』——その揺籃期の物語」『20世紀のベストセラーを読み解く』學藝書林 二〇〇一年  
十六 亀井勝一郎「作家論ノート 太宰治論」『文学界』一九四八年六月↓『太宰治論集 同時代篇』第三卷 一九九二年  
十七 十五に同じ

十八 「臣籍降下の宮家 生活新設計 竹田宮は農園経営 本邸を手放す久邇宮」『読売新聞』一九四六年一月三日付

十九 「財産税 皇室は三十三億 皇族の筆頭は高松宮の一千万円」『読売新聞』一九四七年二月二十一日付

二十 小田部雄次『皇族』中央公論新社 二〇〇九年

二十一 「典範改正へ 皇族の立場から 三笠宮のおはなし」『朝日新聞』一九四六年十二月八日付

二十二 「皇族の臣籍降下 二月、市民の仲間入り」『朝日新聞』一九四六年十二月三十一日付

二十三 「皇族の人的解放」国民は捉われすぎる 気楽になった我々」『朝日新聞』一九四六年五月八日付

二十四 「天声人語」『朝日新聞』一九四六年五月九日付

二十五 津島美知子「書斎」『回想の太宰治』講談社 二〇〇八年

二十六 豊島与志雄、高見順、中島健蔵「創作合評会（第十一回）」「群像」一九四八年二月↓『太宰治論集 同時代篇』第二卷 ゆまに書房 一九九二年

二十七 島居邦朗、長野誉一「対談 太宰治（12）ここが聞きたい文学史（47）」『解釈と鑑賞』第三十六卷第十四号 至文堂 一九七一年十二月

### 第三章 『斜陽』受容における『桜の園』の影響

一 三好行雄、梶木剛、東郷克美、渡部芳紀「共同討議『斜陽』をめぐる」『国文学』第二十四卷第九号 學燈社 一九七九年七月

二 安藤宏『太宰治 弱さを演じるということ』筑摩書房 二〇〇二年

三 沢・米川正夫、演出・青山杉作、キャスト ラネーフスカヤ・東山千栄子、アーニャ・丹阿弥谷津子、ワリーヤ・村瀬幸子、ガーエフ・薄田研二、ロパ  
ーヒン・三島雅夫、トロフィーモフ・千田是也、ピーシチック・三津田健、シャルロッタ・岸輝子、エピソード・滝沢修、ドゥニャーシャ・杉村春子、  
ファイルス・中村伸郎、ヤーシヤ・森雅之他

- 四世相風俗觀察会編『現代風俗史年表』河出書房新社 一九八六年
- 五土方与志『桜の園』随感『朝日新聞』一九四五年十二月三十一日付
- 六石坂洋次郎『青い山脈』(99)『朝日新聞』一九四七年九月十六日付
- 七野原一夫『回想太宰治』新潮社 一九八〇年
- 八猪瀬直樹『ビカレスク太宰治伝』文藝春秋 二〇〇七年
- 九『演劇百科大辞典』平凡社 一九九八年
- 十菅井幸雄『チエーホフ日本への旅』東洋書店 二〇〇四年
- 十一小山内薫『桜の園』の演出者として『演劇新潮』一九二六年十一月号 新潮社
- 十二『チエーホフ全集』第十五卷 中央公論社 一九六一年
- 十三水品春樹『築地小劇場史』日日書房 一九二二年↓『コレクション・モダン都市文化』第三卷 ゆまに書房二〇〇四年
- 十四十一に同じ
- 十五青山杉作『桜の園』演出後記『青山杉作追悼記念刊行会 一九五七年
- 十六十五に同じ
- 十七十に同じ
- 十八十五に同じ
- 十九五に同じ
- 二十『劇評』『東京新聞』一九四五年十二月二十九日
- 二十一訳・米川正夫、演出・村山知義・八田元夫、キャスト ラネーフスカヤ・北城真記子、アーニヤ・吉沢照代、ワーリヤ・原泉、ガーエフ・伊達信、ロパーヒン・三島雅夫、トロフィーモフ・薄田研二、ピーシチック・大森義夫、シャルロッタ・中原栄子、エピソード・野々村潔、ドウニャーシヤ・清洲すみ子、ファイルス・中村栄二、ヤーシヤ・下条正巳他
- 二十二『朝日年鑑』1949年版 朝日新聞社 一九四八年
- 二十三『劇評』『朝日新聞』一九四八年六月四日付
- 二十四旭季彦『雑考チエーホフ劇』新読書社 二〇〇三年
- 二十五二十三に同じ
- 二十六二十四に同じ
- 二十七訳・湯浅芳子、演出・千田是也、キャスト ラネーフスカヤ・東山千栄子、アーニヤ・岩崎加根子、ワーリヤ・岸輝子、ガーエフ・松本克平、ロパー

ヒン・小沢栄、トロフィーモフ・信欣三、ピーシチック・永田靖、シャルロッタ・三戸部スエ、エピソード・浜田寅彦、ドウニヤーシャ・村瀬幸子、  
フィールス・東野英治郎、ヤーシャ・永井智雄他

二千八千田是也「チエーホフの受容」『千田是也演劇論集』第二卷 未来社 一九八〇年

二千九千田是也『桜の園』演出後記『千田是也演劇論集』第二卷 未来社 一九八〇年

三十十に同じ

三十二二十四に同じ

三十三二十九に同じ

三十三「フ」ほんとうの演劇を見た！『朝日新聞』一九五八年十二月六日付

三十四三十三に同じ

三十五六に同じ

三六「百年読書会」は、朝日新聞社のホームページによれば、「時代を超えて読みつがれる名作を読者とともに毎月1冊ずつ読んでいく読書会」として、二

〇〇九年四月から一年間にわたって連載された。「初めて読む人、これを機に再読する人も、いまの時代に「斜陽」をどう読んだか、どう感じたかのコ

メント」が投稿されており、四月（第一回）は「斜陽」が対象として選ばれた。

三七重松清編著『百年読書会』朝日新聞出版 二〇一〇年

三八「斜陽（四）」『太宰治全集』第九卷 筑摩書房 一九九二年

三九柳富子「斜陽」について——太宰治のチエーホフ受容を中心に——『比較文学年誌』第五号 早稲田大学出版部 一九六九年

四十尾崎秀樹「太宰治『斜陽』・華族の没落と流行作家の死 戦後ベストセラー物語（五）」『朝日ジャーナル』第七卷第四十七号 朝日新聞社 一九六五年

十二月

付記 『斜陽』からの引用はすべて『太宰治全集』第九卷（筑摩書房 一九九二年）によるものである。旧字体については新字体に改めた。

## 第二部

### 第一章 「三等重役」のイメージの変遷

「サラリーマン小説」の代表的な作品としては他に中村武志（自白三平）シリーズや山口瞳『江分利満氏の優雅な生活』などが挙げられる。また、近年伊井直行は「会社員小説」というジャンルを提唱し、『会社員とは何者か？』において多くの「会社員小説」を取り上げているが、その源流をなす作家として

源氏の名を挙げている。

二 真実一郎『サラリーマン漫画の戦後史』洋泉社 二〇一〇年

三 源氏鶏太「三等重役（最終回）」『サンデー毎日』一九五二年四月十三日号

四 源氏鶏太の回は一九七三年七月二十二日から八月五日にかけて全九回連載された。略歴の鉤括弧内の文章で注記のないものは「出世作のころ」からの引用である。

五十返肇「解説」『新日本文学全集』第十四卷 集英社 一九六二年

六 源氏鶏太『わが文壇的自叙伝』集英社 一九七五年

七 野村尚吾『週刊誌五十年』毎日新聞社 一九七三年

八『出版年鑑』一九五三年版 出版ニュース社 一九五三年

九 桑原社長が仲人をした（もしくはする予定の）夫婦に限定すれば十一組だが、浦島さんが仲人をした夫婦も入れれば十二組となる。さらに桑原社長の娘・名代子と高砂機械工業の社員・加島のカップルのように、社外の人間の恋愛話も存在する。

十『日本国語大辞典』第二版』第六卷 小学館 二〇〇一年

十一 源氏鶏太「三等重役の応接間」『サンデー毎日』一九五二年四月二十日号

十二『現代用語の基礎知識』一九五四年版 自由国民社 一九五三年

自由国民社が運営するウェブページ「月刊基礎知識」(<http://www.jiyu.co.jp/GN/edv/index.html>)内の「三等重役」の欄には「本誌1953年版収録」とある。自由国民社に確認したところ、「現代用語の基礎知識」一九五三年版は存在せず「三等重役」という言葉が掲載されている一番古いものが一九五四年版であること、「本誌1953年版」というのは一九五三年に編集した一九五四年版を指すのではないかとの回答をいただいた。

十三 源氏鶏太「出世作のころ」『読売新聞』一九六八年八月五日付

十四「次号から」『サンデー毎日』一九五一年八月五日号

十五 井上ひさし「ベストセラーの戦後史 8」『文藝春秋』一九八八年一月号

十六 源氏鶏太「三等重役（第十四回）」『サンデー毎日』一九五二年十一月十一日号

十七 源氏鶏太「艶福物語」『サンデー毎日別冊』一九五二年二月

## 第二章 流行語「恐妻」について

一 尾崎秀樹「戦後ベストセラー物語 27」『朝日ジャーナル』第八卷第十七号 一九七五年四月

二 山本嘉次郎は「戦争前の恐妻家と戦後の恐妻家とは、一寸意味がちがつて来ましたね。」（山本嘉次郎、源氏鶏太、小野佐世男「恐妻学教室」『面白倶楽部』

光文社、一九五二年七月」と、戦前に「恐妻家」という言葉があったという考えを示している。一方で、乾孝は「恐妻」というような言葉のまだできないころ（たしか一九五一年ごろ）（乾孝編『日本は狂っている戦後異常心理の分析』同光社磯部書房、一九五三年）と回想しており、戦後発明された言葉であるとしている。

- 三 ミツヨ・ワダ・マルシアーノ「（再）定義される労働力——貫戦史でのサラリーマン映画」『戦後』日本映画論』青弓社、二〇一二年
- 四 佐々木邦「恐妻病者」『佐々木邦全集』第八巻 大日本雄弁会講談社 一九三二年
- 五 佐々木邦「主権妻権」『佐々木邦全集』第六巻 大日本雄弁会講談社 一九三二年
- 六 近藤日出造「恐妻会覚書」『恐妻会』朋文社 一九五五年

### 第三章 『二等重役』における戦後派重役像

一 源氏鶏太「二等重役（最終回）」『サンデー毎日』一九五二年四月十三日号

二 尾崎秀樹「戦後ベストセラー物語 27」『朝日ジャーナル』第八巻第十七号 一九六六年四月

三 小宮隆太郎編『戦後日本の経済成長 東京経済研究センター主催第1回コンファレンス議事録』岩波書店 一九六三年  
四 二に同じ

五 源氏鶏太「二等重役（第一回）」『サンデー毎日』一九五一年八月十二日号

六 渋谷知美『日本の童貞』文藝春秋 二〇〇三年

七 斎藤駿「源氏鶏太と〈私〉」『思想の科学』一九七五年三月号

八 源氏鶏太「二等重役（第十五回）」『サンデー毎日』一九五一年十一月十八日号

九 大宅壮一、源氏鶏太「サラリーマンの神様」『週刊公論』一九六二年一月九・十六日合併号

十 源氏鶏太「二等重役（第二回）」『サンデー毎日』一九五一年八月十九日号

十一 主に藤目ゆき『性の歴史学』（不二出版、一九九七年）を参照した。

十二 田代美江子「戦後改革期における「純潔教育」——『教育字研究室紀要——〈教育とジェンダー〉研究——」第三号 二〇〇〇年二月

十三 山本信弘、大道乃里江、戸田百合子、小山健蔵、須藤勝見「性教育の歴史的変遷の文献的一考察」『大阪教育大学紀要 第4部門（教科教育）』第三十九

巻第二号 一九九一年二月

十四 十二に同じ

十五 野村尚吾『週刊誌五十年—サンデー毎日の歩み』毎日新聞社、一九七三年

十六 「日本版」春のめざめ』『サンデー毎日』一九五二年一月二十日号

#### 第四章 恐妻と貞操―源氏鶏太「三等重役」に描かれた戦後性

一 斎藤駿「源氏鶏太と〈私〉」『思想の科学』一九七五年七月号

二 鈴木貴宇「明朗サラリーマン小説」の構造―源氏鶏太『三等重役』論『インテリジェンス』第十二号、二〇一二年三月

三 井上ひさし「ベストセラーの戦後史8」『文藝春秋』一九八八年一月号

四 ミツヨ・ワダ・マルシアーノ「(再) 定義される労働力―貴戦史でのサラリーマン映画」『戦後』日本映画論』青弓社、二〇一二年

五 吉見俊哉『親米と反米―戦後日本の政治的無意識』岩波書店、二〇〇七年

六 三月七日に『ブロンディ子守の巻』(一九三九年製作)、六月二十七日に『ブロンディの仲人』(一九四〇年製作)、八月二十九日に『ブロンディ泥棒退治』(一九四八年製作)が公開されている。

七 『ブロンディの仲人』『スクリーン』一九五〇年七月号

八 岩本茂樹『憧れのブロンディ―戦後日本のアメリカニゼーション』新曜社、二〇〇七年

九 山本嘉次郎、源氏鶏太、小野佐世男「恐妻学教室」『面白倶楽部』一九五二年七月号

十 徳川夢声、藤浦洸、近藤日出造、田村泰次郎「四十男が浮気を語る放談会」『婦女界』一九四九年十一月号参照。この座談会で恐妻と民主的な夫婦関係を直結させる動きは見られないものの、恐妻であることを「愛妻家」や「妻を尊敬し得る」とことと結びつけており、その片鱗をうかがうことができる。

十一 三に同じ

十二 源氏鶏太「三等重役の応接間」『サンデー毎日』一九五二年四月二十日号

十三 「三等重役(第二回)」『サンデー毎日』一九五二年八月十九日号

十四 二に同じ

十五 「三等重役(第四回)」『サンデー毎日』一九五二年九月二日号

十六 「三等重役(第二十二回)」『サンデー毎日』一九五二年一月六日・十三日合併号

十七 「三等重役(第二十六回)」『サンデー毎日』一九五二年二月十日号

十八 「三等重役(第三十回)」『サンデー毎日』一九五二年三月九日号

十九 岩本茂樹「アメリカ漫画『ブロンディ』へのまなざし―「夫の家事労働」をめぐる」『メディア・コミュニケーション』第五十八号、二〇〇八年三月  
二十 「三等重役(第二十一回)」『サンデー毎日』一九五二年十二月三十日号

- 二二一 「ふえた桃色遊び 子供心に映る大人の影」『朝日新聞』一九五一年二月三日付
- 二二二 「文部省「純潔教育」を再検討」『朝日新聞』一九五二年二月八日付
- 二二三 安藤画一 「性教育のあり方」『純潔教育基本要項附性教育のあり方』一九四九年六月
- 二二四 『日本国語大辞典「第二版」第六卷、小学館、二〇〇一年
- 二二五 斎藤光 「純潔教育委員会の起源とGHQ」『セクシュアリティの戦後史』京都大学学術出版会、二〇一四年
- 二二六 大宅壮一、源氏鶏太 「サラリーマンの神様」『週刊公論』一九六一年一月九・十六日合併号

付記 『三等重役』からの引用はすべて『サンデー毎日』連載時本文によるものである。

## 第三部

### 第一章 動機なき行為者をいかに描くか——『太陽の季節』論

二〇一二年三月から翌年三月にかけて、月一回のペースで開催し、その内容は後に書籍（豊崎由美、栗原裕一郎『石原慎太郎を読んでみた』原書房、二〇一三年）としてまとめられた。

二 豊崎由美×栗原裕一郎『いつも心に太陽を』[introduction] <http://d.hatena.ne.jp/shintarotokyol/>（二〇一四年一月四日引用）

三 金岡直子 「価値の顛倒——石原慎太郎「太陽の季節」——」『国文論叢』第四十七号、神戸大学文学部国語国文学会、二〇一三年九月

四 高島健一郎 「太陽の季節」という季節——作品の読解とは無関係なブーム形成を振り返って——『近代文学研究』第二十三号、日本文学協会近代部会

二〇〇六年三月

五 斎藤美奈子『妊娠小説』筑摩書房 一九九七年

六 稲垣広和 「太陽の季節」論——「読み」の試み——『中京大学文学部紀要』第四十一卷第一号 中京大学文学部 二〇〇六年

七 中村三春 「石原慎太郎「太陽の季節」『解釈と鑑賞』第七十三巻第四号 至文堂 二〇〇八年四月

八 五に同じ

九 この章でとくに指摘のない引用は「太陽の季節」本文（『石原慎太郎の文学』第九巻 文藝春秋、二〇〇七年）によるものである。

十 五に同じ

十一 五に同じ

十二 七に同じ

十三 三島由紀夫 「石原慎太郎氏の諸作品」『三島由紀夫全集』第二十九卷 新潮社 一九七五年  
十四 七に同じ

十五 磯田光一 「解説」『日本の文学』第七十六巻 中央公論社 一九六八年

十六 七に同じ

十七 奥野健男 「解説」『太陽の季節』新潮社 一九五七年

十八 この章でとくに指摘のない引用は「灰色の教室」本文『石原慎太郎の文学』第九巻 文藝春秋、二〇〇七年)によるものである。

十九 BOOK STAND 「押忍ー論壇女子部」第二回「豊崎由美×栗原裕一郎 いつも心に太陽を」慎太郎で巡る現代日本文学 60年史 vol.4」を突撃」  
<http://www.webdoku.jp/tsushin/2012/08/01/163000.html> (二〇一四年一月四日引用)

## 第二章 上流階級意識のよろめきー『美德のよろめき』論

一 ここでは、節子の階級が上流階級(華族階級)であったことを踏まえ、それより下の階級であるという意味で「中流階級」という言葉を用いている。また、内閣府の「国民生活に関する世論調査」には、「お宅の暮し向きは、全国的にみればどの程度だと思えますか」というような、生活の程度を通して帰属意識を聞く設問が一九五八年の調査より組み込まれているが、一九五八年の回答は、「上」が0.2%、「中の上」が3.4%、「中の中」が37%、「中の下」が32%、「下」が17%、「不明」が10%であった。当時の国民の七割が自らの生活程度を「中流」と捉えていたと考えられることから、当時の国民に共通する考えを示す際に「中流階級的」という表現を用いた。

二 『日本国語大辞典』第二版』小学館 二〇〇一年

三 中元さおり 「三島由紀夫「美德のよろめき」論ー「よろめき」ブームから読む」『広島大学大学院文学研究科論集』七十二 二〇一二年十二月  
四 二に同じ

五 杉浦明平 「美しきものへの反感 戦後ベストセラー物語」『朝日ジャーナル』第八巻第三十五号 一九六六年八月

六 「三島由紀夫渡米みやげ話ー「朝の訪問」から」『三島由紀夫全集』第二十巻 新潮社 二〇〇三年

七 三島由紀夫 「不道德教育講座」(32) いわゆる「よろめき」について『週刊明星』第二巻第九号 一九五九年三月

八 稲垣吉彦 『流行語の昭和史』読売新聞社 一九八九年  
九 二に同じ

十 小笠原賢二 「幸福」という存在論『三島由紀夫の時代』勉強出版 二〇〇一年

十一 田中美代子 「聖女の午後ー「美德のよろめき」論」『海』第十巻第七号 一九七八年七月

十二 具体的には、「道徳」が二十一回、「美德」が十一回、「婦徳」が一回、「悖徳」が三回、「悪徳」が一回、「不徳」が一回(計三十八回)。



三 それぞれの主な例は次の通りである。①「中産階級の人妻」(小谷野敦『恋愛の昭和史』文藝春秋 二〇〇八年)、「中産階級の貞淑な妻」(中元論 ②「中上流階級の教養ある夫人」(佐藤論、「上流階級の夫人」(橋本文三「解説」『現代日本文学館』42 文藝春秋 一九六六年) ③「生れも躰もいい」(北原武夫「解説」『美徳のよろめき』新潮社 一九六〇年)「良家の娘」(小笠原論

十四 梶尾文武「三島由紀夫『美徳のよろめき』論」小説家の明晰」『国語と国文学』第八十三巻第七号 二〇〇六年七月

十五 佐藤秀明「三島由紀夫 人と文学」勉誠出版 二〇〇六年

十六 斎藤美奈子『妊娠小説』筑摩書房 一九九七年

十七 三島由紀夫「十八歳と三十四歳の肖像画」『群像』一九五九年五月

付記 『美徳のよろめき』からの引用はすべて『三島由紀夫全集』第十巻(新潮社、一九七三年)によるものである。旧字体については新字体に改めた。

### 第三章 『太陽の季節』ブームと「よろめき」ブーム

一 斎藤美奈子『妊娠小説』筑摩書房 一九九七年

二 神林博史「総中流」と不平等をめぐる言説：戦後日本における階層帰属意識に関するノート<sup>(3)</sup>『東北学院大学教養学部論集』第一六一号、二〇二二年三月

三 難波功士『族の系譜字』青弓社、二〇〇七年

四 一に同じ

五 井上ひさし『ベストセラーの戦後史』<sup>12</sup>『文藝春秋』一九八八年五月号

六 紀田順一郎『昭和シネマ館』小学館 二〇〇八年

七 佐藤忠男『青春映画の系譜』秋田書店 一九七六年

八 二に同じ

九 「高校生と『性』」芥川賞受賞作『太陽の季節』が投げた波紋」『週刊読売』一九五六年二月十九日号

十 また難波論でも示されているように、週刊誌での用例においても、初期(一九五六年)の段階では上流階級やブルジョア階級、「ブルジョアの子弟」であることが「太陽族」であることの条件の一つであったようである。そうでない階層が「太陽族」を真似ている場合には「月光族」「衛星族」と呼ばれていたようである。

十一 中元さおり「三島由紀夫『美徳のよろめき』論——「よろめき」ブームから読む——」『広島大学大学院文学研究科論集』第七十二号 二〇二二年十二月  
十二 江藤淳「読者が小説に求めるものの最近のベストセラーを読んで」『読売新聞』一九五七年十二月五日付

十三 書籍の場合はタイトルや作者名、値段および出版社の紹介を除き、それぞれの広告に掲載されている『美徳のよろめき』に関する文句を全て引用した。  
映画の広告は文句のみ引用した。

十四 新藤兼人「脚色の弁」『シナリオ』一九五七年十一月号

十五 三島由紀夫「裸体と衣裳―日記」『三島由紀夫全集』第二十八卷 新潮社 一九七五年

十六 「恋する妻、恋される妻」『週刊娯楽よみうり』一九五七年八月二十三日号

十七 「朝日法律相談所の窓から 住、金、離婚 都民の悩み」『朝日新聞』一九五六年七月二十日付

十八 「家庭と職場の法律案内」『朝日新聞』一九五七年七月四日付